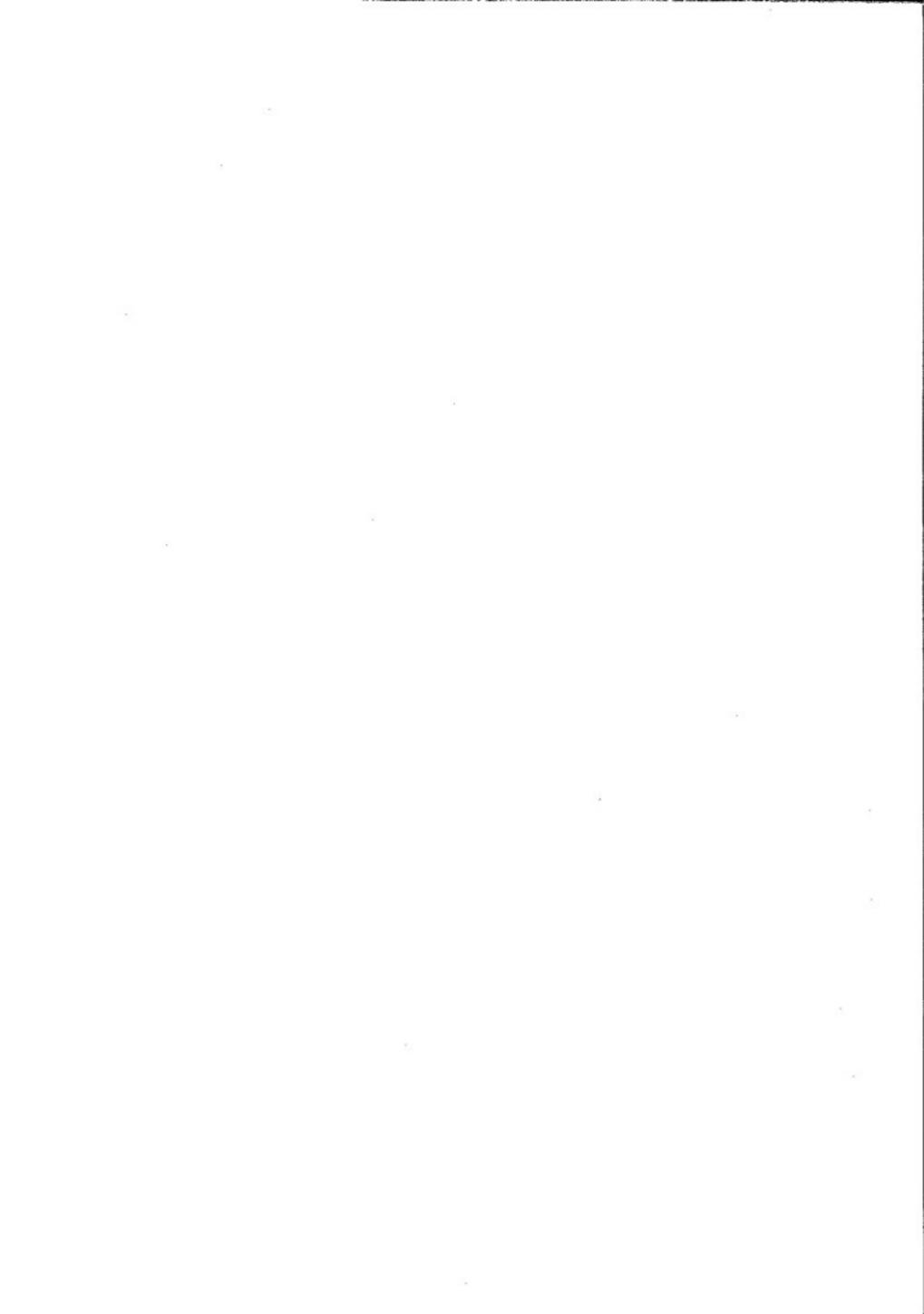


# 久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書

—大阪竜華都市拠点地区区画道路2号線に伴う—

2001年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



正誤表 (財)八尾市文化財調査研究会報告68

頁	行	誤	正
はしがき	15	(財)大阪府文化財調査研究センターよって	(財)大阪府文化財調査研究センターによって
5	20~21	小型方墳	小形方墳
5	31	竜華寺跡	竜華寺
6	3	河内地区	河内地域
22	18	(発B 3)	(発B <sub>3</sub> )
51	37	小型の鉢	小形の鉢

## はしがき

八尾市の南西部の大字渋川・龜井に位置し、20万m<sup>2</sup>に及ぶ「旧国鉄竜華操車場」は昭和13年に造られ、戦前・戦後の経済を支える一大物流拠点としてその役割を担ってきました。ところが、高度経済成長の後半期には、高速道路網の整備・拡大や一般道の整備が進むなかでトラック輸送への急速な変換が進行し、鉄道輸送の役割が低下衰退への道を辿りました。更に、国鉄の民営化に伴う多大な債務返還のための所有地売却処置のなかで、国鉄が民営化される昭和61年に先立つ昭和59年に廃止され、その歴史に幕を閉じることとなりました。

同跡地については、昭和61年7月に八尾市から「竜華操車場跡地の基本構想」が発表され再開発が具体化したこと、昭和63年と平成8年に八尾市教育委員会、平成7年に(財)大阪府文化財調査研究センターにより範囲確認調査が実施されています。

平成9年以降は、道路部分を中心とした基盤整備ならびに主要建物を対象とした発掘調査が当調査研究会と(財)大阪府文化財調査研究センターよって継続的に実施されており、弥生時代中期～近代に至る遺構・遺物が検出されています。

今回、平成9年度に実施しました大阪竜華都市拠点地区区画道路2号線に伴う久宝寺遺跡第22次調査の整理が完了しましたので、報告書として刊行することに致しました。

本書が地域の歴史を解明していく資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願ってやみません。

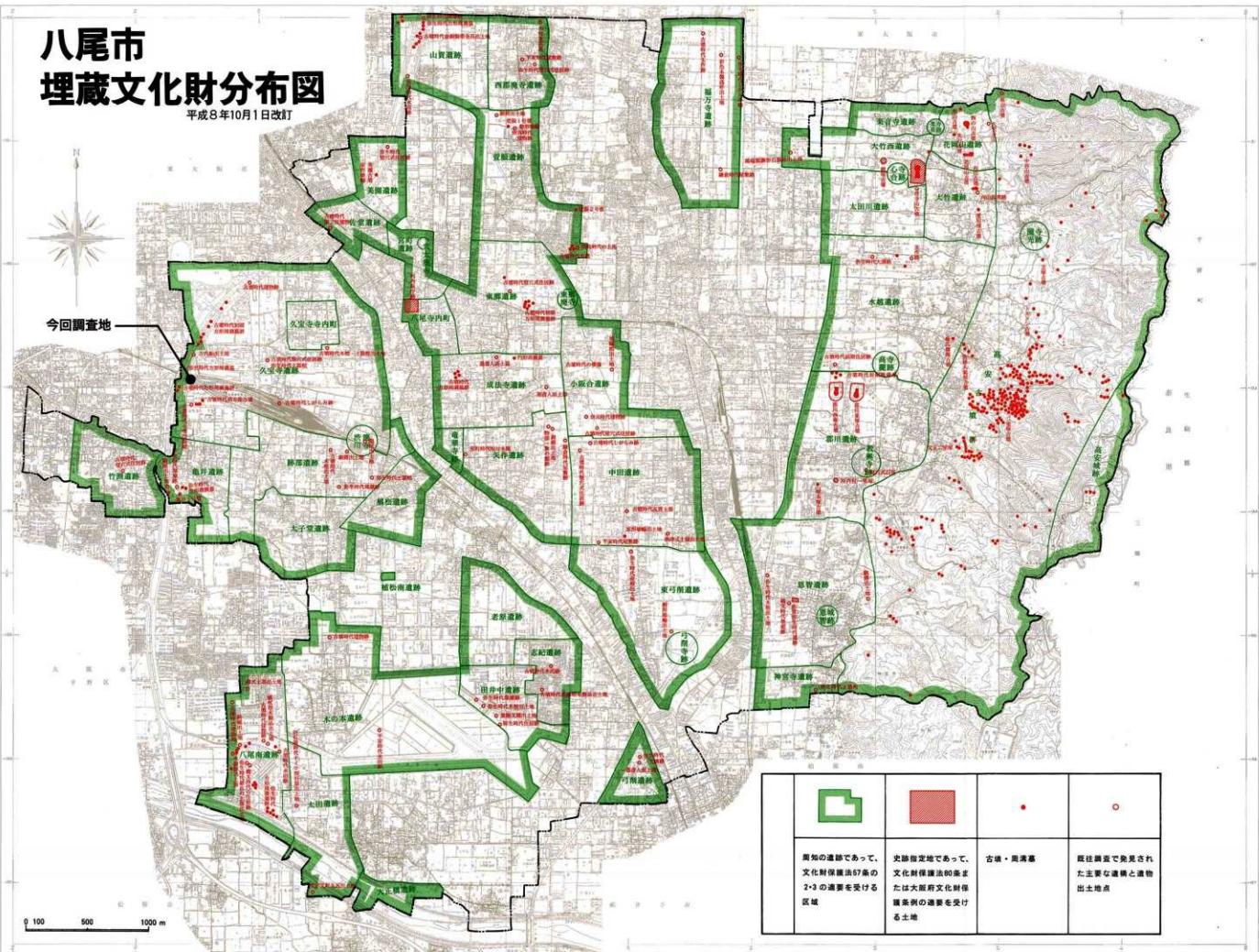
最後になりましたが、一連の発掘調査に対して御協力いただきました関係諸機関の皆様に深謝すると共に、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚く御礼申し上げます。

平成13年10月

財團法人 八尾市文化財調査研究会  
理事長 木山丈司

# 八尾市 埋蔵文化財分布図

平成8年10月1日改訂



## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市大字龜井で計画された大阪竜華都市拠点地区内で平成9年度に実施した区画道路2号線に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第22次調査（KH97-22-1～KH97-22-3）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第74号 平成9年7月31日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が住宅・都市整備公団関西支社（現 都市基盤整備公団関西支社）から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成9年10月22日～平成10年1月13日にかけて原田昌則が担当した。調査面積は928m<sup>2</sup>である。現地調査においては、朝田 要・伊藤静江・岩沢玲子・垣内洋平・岸田靖子・北原清子・小林範彰・辻野優子・永井律子・中前和代・村田知子・村本恵一郎が参加した。
1. 整理業務は、平成12年12月1日～平成13年3月23日に実施し、印刷製本は平成13年度に行った。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－伊藤・岩沢・板野行伸・川村一吉・北原・藏崎潤子・小林・後藤 喬・佐藤光子・永井・中村百合・水木純司・村井俊子・村田・山内千恵子、図面トレース－北原・山内、図面レイアウト・遺物写真－原田が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。
1. 現地調査の実施および整理業務においては、以下の方々からの協力とご指導を受けた。  
梅木謙一 ((財)松山市生涯学習振興財団)、小出輝雄 (埼玉県富士見市教育委員会)、井藤徹・後藤信義・本間元樹・本田奈都子・鳥崎久恵 ((財)大阪府文化財調査研究センター)、水谷陸彦 (総合科学株式会社)、都市基盤整備公団関西支社、(株)かんこう、山本土木(株)、(株)サクラ建設工業、(順不同・敬称略、所属は調査時点)
1. 調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

## 凡　例

- 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の1/2500の地形図（昭和61年測量・平成6年修正・平成8年7月編纂）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成8年10月1日改訂）・国土地理院地形図「大阪東南部（1/25000）」（平成10年3月1日）を使用した。
- 本書で用いた標高の基準はT.P.（東京湾標準潮位）である。
- 本書で用いた方位は、国土座標第VI系の座標北を示す。
- 土色は、小山正忠・竹原秀雄編1997年後期版『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所 色票監修に準拠した。
- 遺構は下記の略号で示した。  
井戸—S E　　土坑—S K　　溝—S D　　小穴・柱穴—S P
- 遺構図面の縮尺は、平面全図は1/300、断面全図は横1/300・縦1/40に統一した。部分図には1/20・1/40・1/50・1/80がある。
- 遺物図面の縮尺は、1/4を基本とするが一部1/5がある。土器の断面については、弥生土器・土師器・黒色土器は白、須恵器は黒、灰釉陶器は細かい水玉、木製品は斜線を用いた。なお、黒色土器の焼付着範囲の表示として粗い水玉を使用した。
- 遺構番号は1調査区から順に通し番号を付けた。
- 古墳時代初頭～前期の時期概念は、古墳時代初頭前半・後半（庄内式期～古相・新相）、古墳時代前期前半～後半（布留式期～古相～新相）に区別した。当該期の土器形式分類および土器編年は（財）八尾市文化財調査研究会報告37（1993）に従った。
- 土器の形式・編年で参考とした文献については、P53に提示した。

## 本　文　目　次

はしがき	
例言	
八尾市埋蔵文化財分布図	
第1章　調査に至る経過	1
第2章　地理・歴史的環境	2
第3章　調査概要	10
第1節　調査の方法と経過	10
第2節　基本層序	12
第3節　調査成果	12
1) 検出遺構と出土遺物	12
2) 遺構に伴わない遺物	48
第4章　まとめ	54

## 挿 図 目 次

第1図	久宝寺遺跡周辺の遺跡分布図	3
第2図	調査地周辺の発掘調査位置図	8
第3図	調査地地区割り模式図	11
第4図	22-1 調査区・22-2 調査区平断面図	13・14
第5図	22-3 調査区平断面図	15・16
第6図	S K-3 平断面図	18
第7図	S K-3 出土遺物実測図	18
第8図	S K-6 出土遺物実測図	19
第9図	S K-7 出土遺物実測図	19
第10図	S K-6 平断面図	19
第11図	S K-7 平断面図	19
第12図	S K-8 平断面図	19
第13図	S K-8 出土遺物実測図	20
第14図	S K-9 平断面図	20
第15図	S K-9 出土遺物実測図	21
第16図	S K-10 平断面図	22
第17図	S K-10 出土遺物実測図	23
第18図	S D-1 平断面図	24
第19図	S D-1 出土遺物実測図その1	25
第20図	S D-1 出土遺物実測図その2	26
第21図	S D-1 出土遺物実測図その3	27
第22図	S D-2 平断面図	28
第23図	S D-2 出土遺物実測図	29
第24図	S D-3 平断面図	30
第25図	S D-3 出土遺物実測図	30
第26図	S D-4 平断面図	31
第27図	S D-4・S D-6 出土遺物実測図	31
第28図	S D-8 出土遺物実測図	32
第29図	S D-11 出土遺物実測図	32
第30図	S D-13・S P-7 平断面図	33
第31図	S D-13 出土遺物実測図	34
第32図	S D-14 平断面図	35
第33図	S D-14 出土遺物実測図	36
第34図	S D-15 平断面図	38

第35図	S D - 15出土遺物実測図	38
第36図	S D - 20平断面図	39
第37図	S D - 20出土遺物実測図	40
第38図	S P - 7出土遺物実測図	41
第39図	1号方形周溝墓出土遺物実測図	42
第40図	2号方形周溝墓主体部平断面図	42
第41図	1号方形周溝墓平断面図	43
第42図	2号方形周溝墓平断面図	44
第43図	土器棺墓1平断面図	45
第44図	土器棺墓1に使用された複合口縁壺実測図	45
第45図	2号方形周溝墓主体部木棺底板実測図	46
第46図	3号・4号方形周溝墓平断面図	47
第47図	22-3調査区 第5層出土遺物実測図	48
第48図	22-1調査区 第8層出土遺物実測図その1	49
第49図	22-1調査区 第8層出土遺物実測図その2	50
第50図	22-2調査区 第8層出土遺物実測図	52
第51図	22-3調査区 第8層出土遺物実測図	53

## 写 真 目 次

写真1	22-1調査区西部より東を望む	1
写真2	S E - 1検出状況（北から）	17
写真3	S E - 2検出状況（東から）	17
写真4	S P - 7検出状況（北から）	41

## 表 目 次

第1表	調査地周辺の発掘調査一覧表	9
第2表	各調査区一覧表	10

# 図版目次

図版一	調査地を含む旧国鉄竜華操車場 跡地全景	図版一七	2号方形周溝墓主体部掘方断面 同上 主体部木棺底板取り上げ状況
図版二	22-1 調査区全景	図版一八	同上 主体部断ち割り状況
	22-1 調査区全景		土器棺墓1検出状況
図版三	22-2 調査区全景	図版一九	3号・4号方形周溝墓検出状況 SK-3、SK-7、SK-9
	22-2 調査区全景		出土遺物
図版四	22-3 調査区全景	図版二〇	SK-9、SK-10出土遺物
	22-3 調査区全景	図版二一	SD-1 出土遺物
図版五	SK-1 検出状況	図版二二	SD-1 出土遺物
	SK-2、SK-3 検出状況	図版二三	SD-1、SD-2 出土遺物
図版六	SK-6～SK-9 他検出状況	図版二四	SD-2、SD-3、SD-13
	SK-7 検出状況		出土遺物
図版七	SK-9 検出状況	図版二五	SD-13 出土遺物
	SK-10、SD-12 検出状況	図版二六	SD-13 出土遺物
図版八	SK-12、SD-21 検出状況	図版二七	SD-14 出土遺物
	SD-1 検出状況	図版二八	SD-14 出土遺物
図版九	SD-2 検出状況	図版二九	SD-15、SD-20、SP-7、 土器棺墓1出土遺物
	SD-3 検出状況	図版三〇	2号方形周溝墓主体部木棺底板、 22-3 調査区 第5層、22-1 調査区 第8層出土遺物
図版一〇	SD-4 検出状況	図版三一	22-1 調査区 第8層出土遺物
	SD-5・SD-6、SP-2～ SP-6 検出状況	図版三二	22-1 調査区 第8層出土遺物
図版一一	SD-11 検出状況	図版三三	22-1 調査区 第8層、22-2 調査区 第8層出土遺物
	SD-13 検出状況	図版三四	22-2 調査区 第8層、22-3 調査区 第8層出土遺物
図版一二	SD-14 検出状況		
	SD-14 遺物出土状況		
図版一三	SK-11、SD-16～SD-19 検出状況		
	SD-17～SD-20 検出状況		
図版一四	SD-20 遺物出土状況		
	SD-22 検出状況		
図版一五	1号方形周溝墓検出状況		
	2号方形周溝墓検出状況		
図版一六	2号方形周溝墓主体部検出状況		
	2号方形周溝墓主体部掘方掘削状況 同上 断面		

# 第1章 調査に至る経過

久宝寺遺跡は、1935年（昭和10年）に小字西口・栗林（現八尾市久宝寺5丁目）で行われた道路工事中に、船の残片とともに弥生時代中期～古墳時代の遺物が発見され遺跡として認識されるようになった。考古学的な調査は1973年（昭和48年）度以降で、遺跡の西部を縦断する近畿自動車道の計画に伴い、（財）大阪文化財センター（現（財）大阪府文化財調査研究センター）による試掘調査が実施されている。これらの調査では、弥生時代～中世に至る遺構・遺物が重層的に広範囲にわたって検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認された。1982年（昭和57年）以降には大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センターによる近畿自動車道建設に伴う発掘調査、ならびに八尾市教育委員会・（財）八尾市文化財調査研究会・（財）東大阪市文化財協会による発掘調査が随所で継続して実施されており、弥生時代前期～近世に至る遺構・遺物が検出されている。主な調査成果を調査順に列挙すれば、1983年（昭和58年）に（財）大阪文化財センターにより実施された久宝寺南（その2）では、古墳時代初頭後半（庄内式期新相）の最古の準構造船が発見されており、内海の河内湖南岸に近接した久宝寺遺跡が「津」的な役割を果たした集落であったことを示す資料として注目された。1991年（平成3年）に八尾市北龟井3丁目で当調査研究会が実施した第9次調査（KH91-9）では、古墳時代前期前半（布留式期古相）の2棟の住居内から重圓文鏡と素文鏡が出土したほか、近接する地点からは墳丘長35mを測る前方後方墳1基が検出されており、中河内地域における古墳文化受容期の在り方を知る上で貴重な資料を提供した。また、1994年（平成6年）に八尾市神武町で当調査研究会が行った第18次調査（KH94-18）では、古墳時代初頭後半（庄内式期新相）に比定される朝鮮半島の南部に淵源を持つ炉形土器・軟質陶耳壺が出土しており、西接する大阪市の加美遺跡第1次調査（KM84-1）の1号方形周溝墓出土の陶質土器（朝鮮三国時代初頭）の存在とともに、遺跡範囲の西部を中心に、渡来系集団の集落が存在した可能性が強くなってきた。この様に、久宝寺遺跡では、特に古墳時代初頭～前期を中心として、広範囲にわたって数多くの集落が形成されたことが知られている。

一方、今回の調査地点である旧国鉄竜華操車場跡地（約24.6ha）は、遺跡範囲の南部を横断する形で展開する広大な敷地で、遺跡総面積の約1/7を占めている。同地は1986年（昭和61年）に国鉄民営化に先立って廃止された後、同年7月に八尾市から「竜華操車場跡地の基本構想」が発表され、再開発が進められることとなった。旧国鉄竜華操車場跡地内での発掘調査は、1988年（昭和63年）の八尾市教育委員会の試掘調査を嚆矢と



写真1 22-1 調査区西部より東を望む

して、1990年（平成2年）度には当調査研究会が第4次調査（K H90-4）、1995年（平成7年）度には（財）大阪府文化財調査研究センターによる試掘調査（95-1～7トレンチ）とJ R久宝寺駅舎・自由通路設置に伴う発掘調査（95-8・9トレンチ）、1996年（平成8年）度には八尾市教育委員会の試掘調査と当調査研究会による第20次調査（K H96-20）が実施されている。さらに、平成9年度以降は、「大阪竜華都市拠点地区」の土地区画整理事業の一環として、公共施設および道路部分を中心とした発掘調査が策定され継続的に実施される運びとなった。

平成9年度については、久宝寺遺跡第22次調査（K H97-22）として、区画道路2号線を対象とした発掘調査を実施した。調査面積は約928m<sup>2</sup>を測る。

発掘調査は八尾市教育委員会による埋蔵文化財調査指示書に基づき実施した。調査は「大阪竜華都市拠点地区における埋蔵文化財発掘調査に関する覚書」に基づいて、八尾市教育委員会、住宅・都市整備公団関西支社（平成11年10月から都市基盤整備公団関西支社）、（財）八尾市文化財調査研究会との三者による業務委託契約書の締結後、現地調査に着手した。

現地発掘調査期間は平成9年10月22日～平成10年1月13日である。内業整理業務は平成12年12月1日～平成13年3月23日に実施し、印刷・製本については平成13年度に実施した。

## 第2章 地理・歴史的環境

久宝寺遺跡は、大阪府八尾市北西部の久宝寺1～6丁目・西久宝寺・南久宝寺1～3丁目・北久宝寺1～3丁目・亀井・渋川・渋川町1～7丁目・神武町・北亀井町1～3丁目および東大阪市大蓮東5丁目・大蓮南2丁目一帯の東西1.6km、南北1.7kmの範囲に展開する縄文時代後期～近世にかけての複合遺跡である。久宝寺遺跡周辺の遺跡群は、近畿自動車道建設に伴う調査や市単位の調査が数多く実施されており、考古学的な蓄積資料も比較的多い。周辺に隣接する遺跡としては、北に佐堂遺跡・美園遺跡、東に長瀬川を挟んで宮町遺跡・八尾寺内町遺跡・成法寺遺跡・竜華寺跡が対峙する他、南東に渋川廃寺、南に跡部遺跡・亀井遺跡、南西に竹渕遺跡、西に大阪市の加美遺跡が位置している。また、遺跡範囲内には遺跡名でもある久宝寺寺内町が存在している。

八尾市を包括する中河内地域の地勢は、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵・河内台地、西を上町台地、北を淀川に画されている河内平野の南部にある。河内平野の形成については、海平面の昇降による侵食面の移動と、旧大和川と淀川による堆積作用との相互作用によるものと考えられている。特に、河内平野南部については、旧大和川水系の平野川・長瀬川・楠根川・玉串川・恩智川が北西方向に放射状に流下しており、平野部内にみられる自然堤防・扇状地性低地・三角州性低地等の地形形成については、これらの河川の堆積作用によるところが大きい。久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川と平野川に挟まれた扇状地性低地に分類される冲積地に展開した遺跡で、現地表面の海拔高はT.P.+9.5m前後を測る。以下、当遺跡周辺の遺跡を中心に時期ごとに概観してみる。

後氷期の大坂平野（河内平野）の発達史については、梶山彦太郎・市原 実両氏による研究により九つの時代に区分されている。それらの研究成果から考察すれば遺跡周辺で人々の足跡が認



1 若江遺跡	14 萩原北遺跡	27 鬼井北遺跡	40 植松南遺跡	53 大淵遺跡
2 若江北遺跡	15 東鷲遺跡	28 竹割遺跡	41 太子堂遺跡	54 八尾南遺跡
3 上小阪遺跡	16 東部妙寺	29 鬼井遺跡	42 高遠真遺跡	55 木の本遺跡
4 小若江遺跡	17 犬太塚寺	30 路原遺跡	43 瓦破遺跡	56 老原遺跡
5 西御遺跡	18 言可遺跡	31 路原遺跡(堀田土地)	44 瓦破廟寺	57 志紀遺跡
6 山貫遺跡	19 佐堂遺跡	32 津川鹿寺	45 三宅遺跡	58 田井中遺跡
7 西御曉寺	20 八尾寺内町遺跡	33 法辯寺遺跡	46 三宅東遺跡	59 太田遺跡
8 西御原寺遺跡	21 久宝寺寺内町遺跡	34 小院合遺跡	47 長吉野山遺跡	60 弓削遺跡
9 衣掛遺跡	22 久宝寺遺跡	35 中田遺跡	48 長原遺跡	61 本郷遺跡
10 弓削遺跡	23 加美遺跡	36 東弓削遺跡	49 城山古墳群	
11 加美北遺跡	24 長庵寺	37 先作遺跡	50 六反古墳群	
12 友井東遺跡	25 平野寺前遺跡	38 龍華寺跡	51 歳旦遺跡	
13 美園遺跡	26 平野東康都市	39 桂松遺跡	52 別所遺跡	

第1図 今宝寺遺跡周辺の遺跡分布図 (S = 1/40000)

められるのは縄文時代晚期で、河内湾の淡水化が進行し河内潟が形成された時期（河内潟の時代）にあたる。周辺遺跡では、新家・山賀・亀井の各遺跡から縄文時代晚期の土器片が出土しているほか、長原遺跡では集落が検出されている。

弥生時代前期には、水稻耕作の導入に伴って河内潟に注ぐ河川により形成された微高地および自然堤防を中心に集落が営まれている。前期の古段階には若江北遺跡・山賀遺跡・八尾南遺跡でその成立をみる他、中段階～新段階にかけては美園遺跡・亀井遺跡・城山遺跡・瓜破遺跡・長原遺跡・久宝寺遺跡・跡部遺跡・中田遺跡・田井中遺跡がある。

弥生時代中期には河内潟の陸化に伴って、新たに瓜生堂遺跡・巨摩庵寺遺跡・若江北遺跡・加美遺跡・東郷遺跡・小阪合遺跡・木の本遺跡・東弓削遺跡・弓削遺跡が成立している。また、水稻耕作を中心とした安定した基盤を背景として、集落規模の拡大化を計っており、亀井遺跡に象徴される拠点集落の出現や瓜生堂遺跡2号方形周溝墓や加美遺跡のY1号墓に代表される大形の墳丘墓の存在は、弥生文化が昇華した証を可視的に示している。ところが、弥生時代後期になると中期の生活面を流水堆積層が厚く覆っている例が平野部の各遺跡で検出されており、自然環境が不安定であったことが推定されている。前代から続く既存の集落は、環濠集落の解体に連動して等質的な集落が点在する散村的な集落形態への移行を余儀なくされたようである。

古墳時代初頭（庄内式期）～前期（布留式期）においては、前代に比して集落の増加が顕著で、西岩田遺跡・山賀遺跡・瓜生堂遺跡・佐堂遺跡・友井東遺跡・美園遺跡・小若江北遺跡・久宝寺遺跡・亀井遺跡・加美遺跡・竹洞遺跡・萱振遺跡・東郷遺跡・成法寺遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・東弓削遺跡・木の本遺跡・八尾南遺跡・長原遺跡・瓜破遺跡等で検出されている。この時期を通じての集落の在り方は前代と同様、大規模な集落に発展することなく、土器型式の1型式ないしは長くても2型式程度の期間に居住域が移動を繰り返す形で推移したことが推定される。当該期の集落は庄内式期古相から中相にかけては漸次推移するが、庄内式期新相～布留式期古相においては爆発的に集落数が増加し、布留式期古相をピークとして集落が減少する流れが看取される。庄内式期新相～布留式期古相段階の集落の急増に連動して、吉備・山陰・播磨・阿波・讃岐・摂津・東海等の各地域からの搬入土器の占める割合が高く、物的交流のほか、移住者等の人的交流も想定されている。久宝寺遺跡では、第18次調査（KH94-18）で朝鮮半島南部にその淵源を持つ炉形土器・軟質土器が出土しており、西接する加美遺跡1次調査（KM84-1）で検出された1号方形周溝墓出土の陶質土器（朝鮮三国時代初頭）の存在は、交流が国内に留まらず海外におよんだことを示している。これらの要因としては、準構造船に代表される造船技術の確立や北方に広がる河内湖を通じて海上交通が容易な地点に久宝寺遺跡が立地し、「津」的な役割を果たしたことにもならない。一方、当該期における古墳については、方形周溝墓を中心とした前代の墓制形態が継承されるものの、布留式期古相以降は、古墳文化受容の着実な浸透の中で、庄内式期に見られた等質な造墓形態から脱却して、墳形の多様化、主体部構造の変化、鏡類の副葬、埴輪の使用等の質的変化が進行し、前期後半段階において他地域に比して遅く定型化した古墳の出現をみるのである。平野部で検出されたものに限定すれば、庄内式期では、加美遺跡・亀井北遺跡・久宝寺遺跡・東郷遺跡・成法寺遺跡・萱振遺跡・八尾南遺跡・布留式期では、加美遺跡・友井東遺跡・久宝寺遺跡・萱振遺跡・東郷遺跡・成法寺遺跡等の遺跡で検出されている他、布留式期新相には、中河内地域の首長層がヤマト政権との従属的な関係を結んだ結果として、萱振1

号墳・美崗古墳・塚ノ本古墳が出現している。なお、久宝寺遺跡内では、近畿自動車道の試掘調査において石劍が出土していることから、前期後半の古墳が存在していた可能性がある。

古墳時代中期の集落位置は前代に符合した形で推移している。5世紀代の河内平野南部で集落を構成した集団は、南部の羽曳野丘陵で展開される古市古墳群の造営や、『記紀』にみる治水事業を始めとする大規模な土木工事の推進の一躍を担っていたことは想像に難くない。久宝寺遺跡内においても、旧大和川水系の本流に施工された大規模な堰が検出されており、土木技術の向上や鉄製農具の進化と普及が河内平野の開発を推進した要因であったと推定される。また、当該期における須恵器や韓式系土器に代表される新出土器の出現、馬飼養等の新来技術の導入については、土器相の変化に表出されるように朝鮮半島を中心とする渡米系集団との関係が留意される。当該期の古墳は、平野部においては、全て埋没した形で検出されたもので、長原遺跡・八尾南遺跡・城山遺跡のように群集化するものと、友井東遺跡・巨摩遺跡・亀井遺跡・竹瀬遺跡のような単独墳がある。続く、古墳時代後期の集落は山賀遺跡・友井東遺跡・萱振遺跡・矢作遺跡・中田遺跡・小阪合遺跡・東郷遺跡・久宝寺遺跡・太子堂遺跡・跡部遺跡・竹瀬遺跡・長原遺跡で検出されており、比較的集落規模の小さなもののが大半を占めている。当該期の集落の特徴としては、後期全般を通して継続する集落が少ないことや、後期前半に廃絶する集落が比較的多いこと、更には、後期後半段階に集落の増加と分散化が偏在化していることが指摘される。一方、後期古墳の推移は、長原古墳群が古墳造営を停止した後期中葉以降、平野部での築造は激減し、これ以降は生駒山地西麓部に展開する高安古墳群内に墓位位置を変えている。久宝寺遺跡内では、七ツ門古墳（6世紀中葉）が検出されており、長原遺跡内の七ノ坪古墳（6世紀前半）とあわせて、平野部における数少ない横穴式石室を持つ古墳として貴重である。当該期の古墳の在り方は、小型方墳を主体とする従前の墓制形態が、横穴式石室を主体部に持つ円墳へと変化する時期と符号しており、後期中葉以降は一部の例外を除けば、平野部が居住域と生産域、生駒山地西麓部が墓域としての分化が図られている。こうした推移の中で、後期後半の平野部でみられる居住域の増加やそれに符号した高安古墳群の群集化は、大和政権による地域の生産体制の強化が、再編成された在地系・渡来系の有力氏族に委ねられた結果を示すものと理解される。

飛鳥～奈良時代の集落は萱振遺跡・成法寺遺跡・東郷遺跡・久宝寺遺跡・太子堂遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・弓削遺跡・東弓削遺跡・長原遺跡等で検出されている。また、大和と難波津を結ぶ交通の要衝であった中河内地域は、大和飛鳥地域と同様、仏教文化の受容は早く、渡来系氏族集団を燈籠として多くの氏寺の建立が認められている。久宝寺遺跡を中心とする平野部に限って、「和名抄」による河内国郡界別に区分すれば、渋川郡の渋川廃寺（飛鳥時代前期～室町時代）・竜華寺跡（奈良時代後期～鎌倉時代）、若江郡の西郡廃寺（奈良時代前期～鎌倉時代）。東郷廃寺（飛鳥時代後期～平安時代前期）・弓削守（奈良時代後期）、志紀郡の五条宮跡（奈良時代後期）、丹北郡の瓜破廃寺（奈良時代）がある。守院以外では、「統日本紀」の神護景雲三年（769）十月三十日の条「詔以=由義宮、為=西京。河内國為=河内職。…」のように奈良時代後期に若江郡の南部を中心とした一帯に「西の京」の造営が計画された。翌年の宝龜元年（770）には称德天皇の薨去に伴い、造都の中止を余儀なくされるが、一時期ではあるにせよ歴史の表舞台になったことは特筆される。

平安時代～鎌倉時代の集落は、萱振遺跡・佐堂遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・矢作遺跡・長原

遺跡で検出されている。当該期の集落は、条里区画に基づくものや主要街道、寺社周辺で成立したものが多い。

室町時代～戦国時代の河内地区は、南北朝期の動乱、畠山氏の内乱に端を発する応仁の乱から戦国時代末期の織田信長の近畿統一までの長きに亘って戦乱の渦中であった。当該期における集落は、若江遺跡・萱振遺跡・東郷遺跡・亀井遺跡等で検出されている。集落数が前代に比して激減する要因としては、防御を目的として集約された集村に村落形態が変化したことによるものと考えられる。なお、調査地一帯は中世時期には「橋島」と称されているが、これについては『河内名所図会』<sup>註1</sup>に記されたように、同地にあった龍（竜）華寺の訓読の「たちばな寺」から転じたものと推定されている。「橋島」と称された範囲は、古長瀬川と古平野川に挟まれた地域あたり、南西部には初代河内守護であった畠山基国の子、満家の開基である真觀寺（応永年間1394～1428）があり、北部には西証寺（現顯證寺）を中心に天文十年（1541）に寺内特権を得て成立した「久宝寺寺内町」がある。

近世の集落は前代の集落と重複して推移している。近世の河内地域は、大坂城の城下町として都市化が進行し、大消費地となった大坂への生産物の供給や流通を担う役割を果たしたものと考えられる。なかでも、八尾周辺の木綿は「久宝寺木綿」として知られており、宝永元年（1704）の大和川付け替え以降は旧川筋の新田開発や中河内特有の「半田（はんだ）」「搔き揚げ田」「島畑」と呼ばれる田畠混在の耕地面積の利用により綿作はさらに急速な発展を遂げ、明治10年代に衰退するまで地場产品としての役割を果たした。

明治10年（1877）に来日し、東京都の大森貝塚の発見や我が国に近代的な考古学を紹介したこととで知られているエドワード・モースが明治12年（1879）に九州への研究旅行の帰りに、大阪の古墳を見学するために八尾市を訪れている。その著『日本その日その日』（1917年刊）によれば「大阪にいる間に、我々は大阪を去る十二哩（マイル）の服部川と郡川の村に、ある種の古代の塚があるということを聞いた。我々は人力車に乗って完全に耕された大平原を横切った。目のとどくかぎり無数に、典型的な新英蘭（ニューイングランド）のはねつるべがある。これは浅い井戸から灌漑用の水を汲み上げるために使用する。以下省略（石川欣一訳）」のように当時の耕作地の様子が記されている。中河内一帯では、エドワード・モースが見聞した「ねね釣瓶」が点在する長閑な田園風景が、昭和30年代までは展開していたようである。

#### 註記

註1 享和元年（1801）『河内名所図会』卷4

諸華寺古蹟

「同村（河内国渋川郡植松村）にあり、調に称えてたちばな寺という」

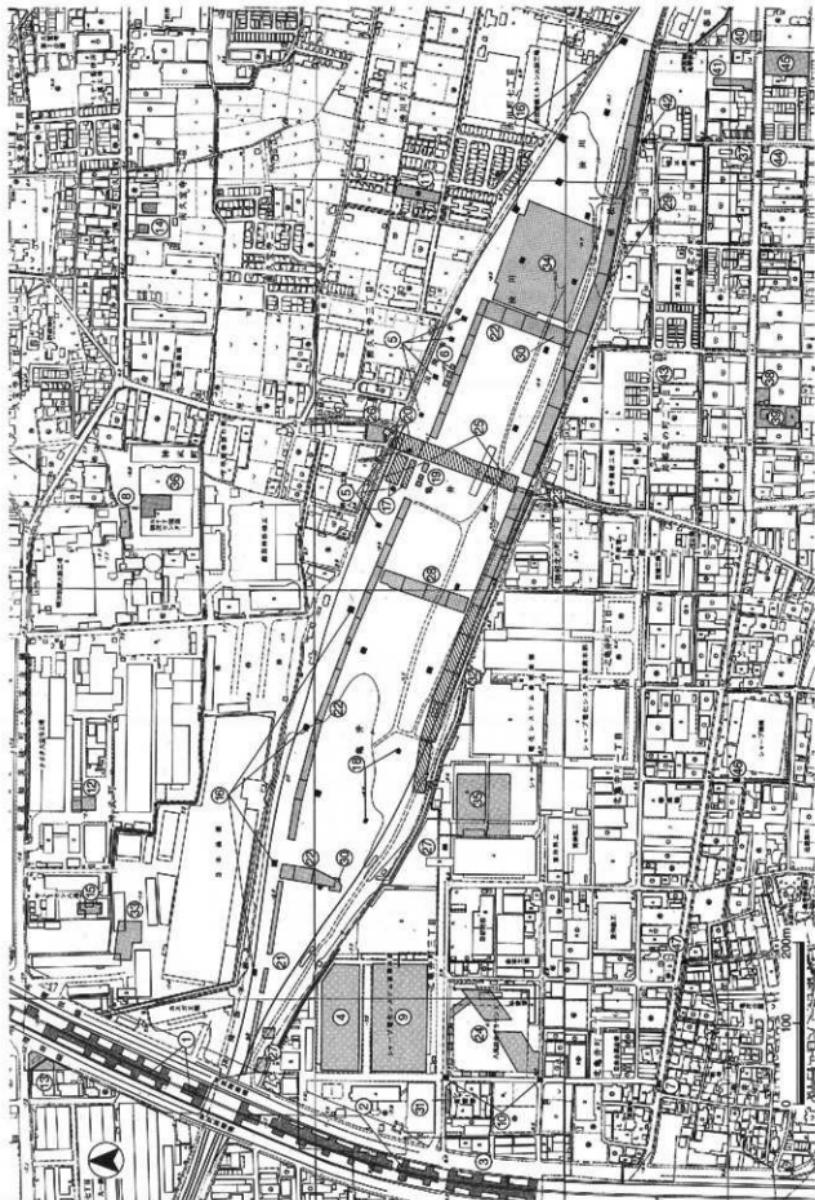
註2 大藏永常 天保4年（1833）『総圖要纂』

註3 大野 煦 1989「島畠の考古学的調査－大阪府池島遺跡の事例－」『郵政考古紀要15』郵政考古学会

本遺跡については、大野氏に従って「島畠」を使用した。

## 参考文献

- ・赤木克視・村上生他 1987『河内平野の動態Ⅰ近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—プロローグ編—』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・梶山彦太郎・市原 実 1986『大阪平野のおいたち』青木書店
- ・(財)大阪市文化財協会 1983『長原遺跡発掘調査Ⅲ』
- ・福永信雄 1997「河内潟東・南辺の弥生時代開始期における集落形態について」『宗教と考古学』金関 惣の古希をお祝いする会
- ・田代克己・今村道雄他 1981『瓜生堂遺跡Ⅲ』瓜生堂遺跡調査会
- ・田中清美 1986「加美遺跡の検討」「古代を考える43」
- ・坪田真一 1995「久立寺遺跡出土の朝鮮半島系土器について」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第31回)資料』
- ・一瀬和夫他 1987「久宝寺守南(その2)」大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・山田隆一 1994「古墳時代初頭前後の中河内地域—旧大和川流域に立地する遺跡群の枠組みについて—」『弥生文化博物館研究報告第3集』大阪府弥生文化博物館
- ・広瀬雅信他 1992『益振遺跡 大阪府文化財調査報告書 第39輯』大阪府教育委員会
- ・渡辺昌宏他 1985『美國』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・井藤 徹他 1978『長原』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- ・後藤信義・本田奈都子 1996「八尾市龜井在住 久宝寺遺跡・児童地区(その1)発掘調査報告書—JR久宝寺駅舎・自由通路設置に伴う—」(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第6集』(財)大阪府文化財センター
- ・中西清人・江内義浩・妹尾直子 1974「近畿自動車道吹田～松原線建設予定地内龜井遺跡他2遺跡 第1次発掘調査報告書」(財)大阪文化財センター
- ・後藤信義 1998「久宝寺遺跡七ツ門古墳現地検討会資料」(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・赤木克視他 2001「久宝寺遺跡・児童地区発掘調査報告書Ⅲ」「(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第60集」(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・高井健司 1987「城下マンション(仮称)建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG85-23)略報」「昭和60年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会
- ・吉岡 哲 1988「考古編 第1～5章」『八尾市史(前近代)本文編』八尾市役所
- ・山本 昭 1984「河内竜華寺と洪川寺」「藤澤一夫先生古希記念 古代文化論叢」
- ・安井良三他 1991「大阪府八尾市寺院古文書調査報告書(日録)」八尾市教育委員会
- ・櫻井敏雄・大草一憲 1988「寺内町の基本計画に関する研究—久宝寺守内町と八尾守内町を中心として—」八尾市教育委員会
- ・エドワード・モース 石川欣一訳 1939『日本その日その日』



第2図 調査地周辺の発掘調査位置図 (S = 1/6000)



## 第3章 調査概要

### 第1節 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、平成9年度以降の継続事業として策定された旧国鉄の竜華操車場跡地を中心とする「八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業」に伴うものである。平成9年度については、久宝寺遺跡第22次調査（KH97-22）として、区画道路2号線道路部分を調査対象とした。

第22次調査地は旧国鉄の竜華操車場跡地の西端に位置し、JR久宝寺駅から西約750mの地点にあたる。東西方向に設定された新設道路予定地の延べ211.5mを鋼矢板打設により3調査区に分割した。総調査面積は約928m<sup>2</sup>を測る。調査区名は、西から久宝寺遺跡第22次-1調査区（KH97-22-1）～第22次-3調査区（KH97-22-3）と呼称した。各調査区の調査期間・規模等の詳細は、第2表にまとめた。調査方法は、埋蔵文化財調査指示書に示された試掘調査の結果から、現地表下2.2mまでを機械掘削とし、以下0.5mについては人力掘削を行った。また、各調査区の南側を除く三方には土層観察用のセクション（幅0.6m）を設定した。

調査区全体の地区割については、平成9年度以降継続する発掘調査に対応するため、旧国鉄竜華操車場跡地全域を含む地域の東西2km・南北1kmについて、国土座標VI系（原点 東経136°00' 北緯36°00'・福井県越前岬付近）に準拠して大区画・中区画・小区画を設定した。大区画は500m四方で全体を8区（I～VIII）に区分し、区分内の北西隅をIとし南東隅をVIIIと呼称した。中区画は大区画を100m単位に25区（1～25）に区分し、区画内の北西隅を1とし南東隅を25と呼称した。小区画は中区画を10m単位に区分した。小区画の呼称については、北西隅を起点として東西方向はアルファベット（西からA～J）、南北方向は算用数字（北から1～10）で示し、1A地区～10J地区と表記した。以上の区分法を使用して、第3図の凡例で示したような個々の地区表示とした。なお、小区画内の地点表示については、国土座標値を入れる方法を取った。

調査面の呼称については、人力による調査で検出された面を上部より「第1面」とした。遺構番号については、1調査区から順番に遺構番号を付与し、凡例の様に表記した。[凡例SD-1]。

現地調査での平面図の作成は、航空測量（1/20・1/100）と平板測量（1/50・1/100）を併用した。地層断面は（1/20）、主な遺構については（1/10・1/20）に統一した。高さの基準は東京湾標準海面（T.P.）を適用した。方位は座標北を採用した。

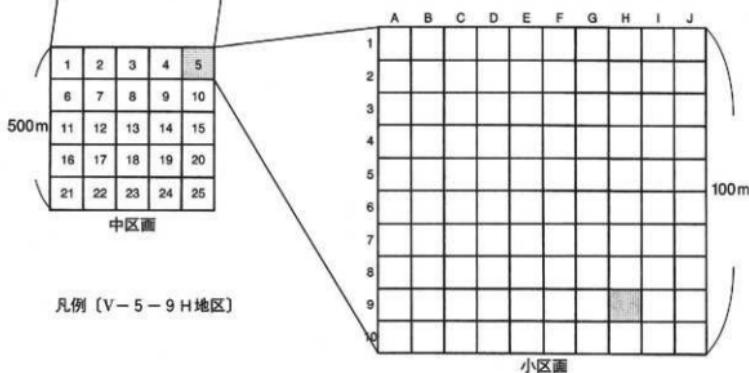
調査の手順としては、東側にあたる3調査区から1調査区の順に実施したが、土層観察用のセクションや側溝の設置により、平面的に捉えられた部分は南北幅3m前後で、面的にも1面のみの調査であるため、同一面で多時期の遺構を検出する結果となった。

第2表 各調査区一覧表

略号		東西幅 (m)	南北幅 (m)	面積 (m <sup>2</sup> )	調査期間
1調査区	KH97-22-1	90.5	4.4	394	H 9/12/5～H 10/1/13
2調査区	KH97-22-2	30.5	4.4	136	H 9/11/19～H 9/12/15
3調査区	KH97-22-3	90.5	4.4	398	H 9/10/22～H 9/11/28



大区画（地図 S = 1 / 15000）



第3図 調査地区割り模式図

調査の結果、現地表下2.3~2.5m (T.P. +5.5~5.7m) 付近に存在する第9層上面で、古墳時代初頭前半（庄内式期古相）～古墳時代初頭後半（庄内式期新相）・古墳時代前期前半（布留式期古相）・平安時代前期・近世に比定される遺構・遺物を検出した。遺物は、遺構内および包含層を構成する第8層を中心に出土しており、総数はコンテナ箱に25箱である。

## 第2節 基本層序

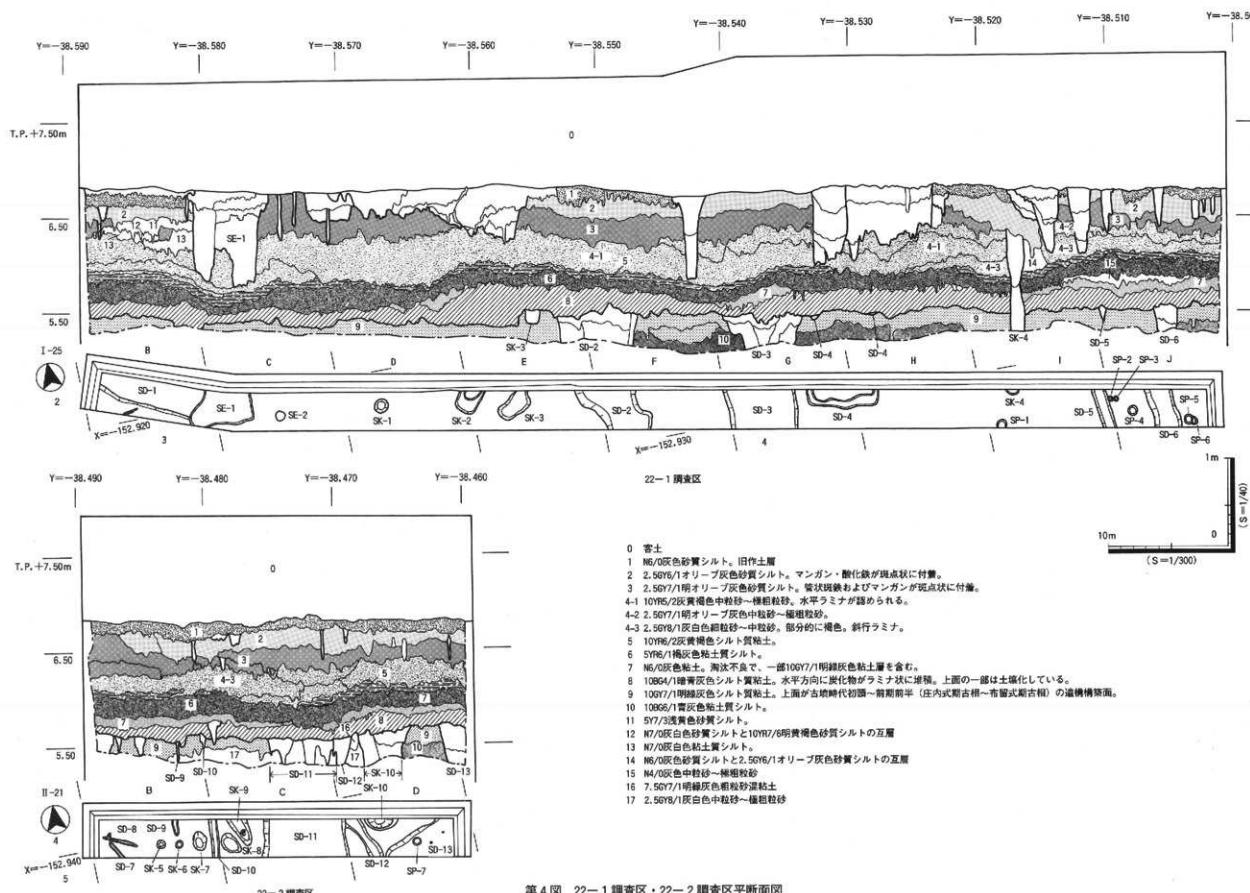
第22次調査は、新設道路に伴うもので、南北が狭く東西方向に長い調査区で、東西方向の調査範囲は延べ約240mに及ぶ。調査地全域の層相は、現表土から1.2~1.4mまでは旧竜華操車場の建設時における客土層、それ以下は水田耕土を示す作土層と水田耕土下特有の土壤で構成され、中間層においては河川洪水層の存在によりやや複雑な層相を呈するものの、下部層においてはシルト質粘土を主体とする比較的安定した層相が確認された。ここでは、11層（第0層～第10層）を抽出して基本層序とした。

- 第0層 客上。層厚1.2~1.4m。旧竜華操車場建築時の整地層。上面の標高はT.P.+7.8~8.1m。
- 第1層 N6/0灰色砂質シルト。層厚0.1~0.25m。旧作土層。
- 第2層 2.5GY6/1オリーブ灰色砂質シルト。層厚0.15~0.2m。耕盤に特有なマンガン・酸化鉄が斑点状に付着。
- 第3層 2.5GY7/1明オリーブ灰色砂質シルト。層厚0.1~0.55m。管状斑鉄およびマンガンが斑点状に付着。
- 第4~1層 10YR5/2灰黄褐色中粒砂～極粗粒砂。層厚0.15~0.4m。水平ラミナが認められる。
- 第4~2層 2.5GY7/1明オリーブ灰色中粒砂～極粗粒砂。層厚0.1m。
- 第4~3層 2.5GY8/1灰白色細粒砂～中粒砂。層厚0.15~0.25m。部分的に褐色。斜行ラミナが認められる。
- 第5層 10YR6/2灰黄褐色シルト質粘土。層厚0.05~0.1m。3調査区のII-22-6A・B地区では本層より上部に構築された古墳時代後期中葉の畦畔状遺構を検出している。
- 第6層 5YR6/1褐灰色粘土質シルト。層厚0.1~0.2m。
- 第7層 N6/0灰色粘土。層厚0.05~0.15m。淘汰不良で、一部10GY7/1明緑灰色粘土を含む。
- 第8層 10BG4/1暗青灰色シルト質粘土。層厚0.1~0.3m。水平方向に炭化物がラミナ状に堆積。上面の一部は土壌化している。1・2調査区では古墳時代初頭前半（庄内式期古相）～前期前半（布留式期古相）の遺物を含む。3調査区では西端のみに存在。
- 第9層 10GY7/1明緑灰色シルト質粘土。層厚0.2m。本層上面が古墳時代初頭前半～前期前半（庄内式期古相～布留式期古相）の遺構構築面。
- 第10層 10BG6/1青灰色粘土質シルト。層厚0.2m以上。

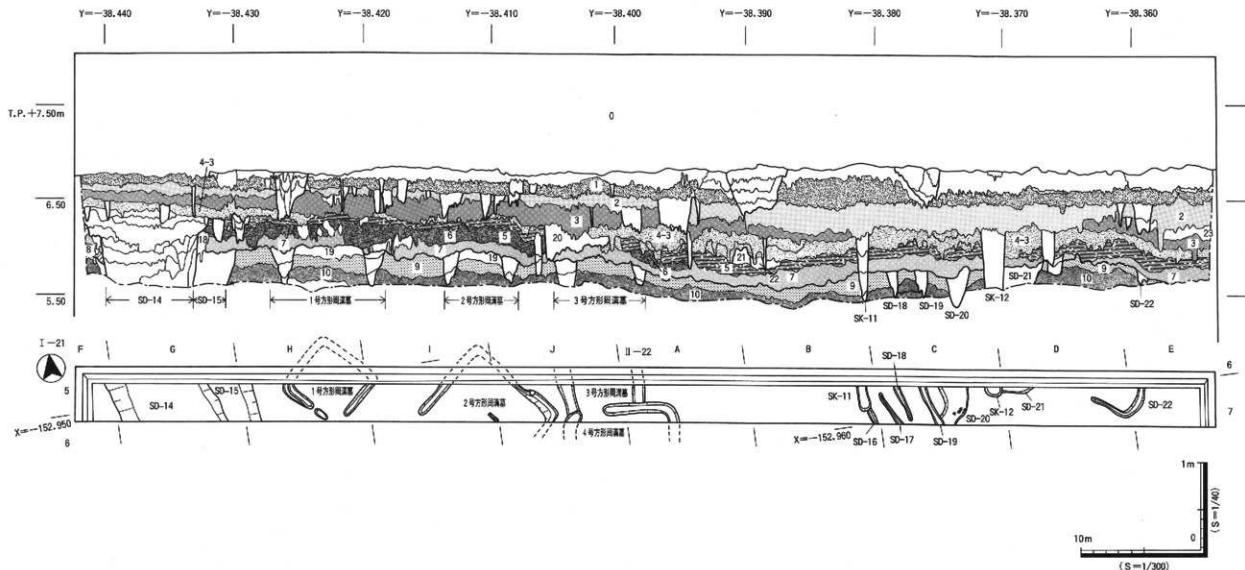
## 第3節 調査成果

### 1) 検出遺構と出土遺物

現地表下2.3~2.5m付近（T.P.+5.5~5.7m）に存在する第9層上面を調査対象面とした。検出された遺構には、井戸2基（SE-1・SE-2）、土坑12基（SK-1～SK-12）、溝22条（SD-1～SD-22）、小穴7個（SP-1～SP-7）、方形周溝墓4基（1号方形周溝墓～4号方形周溝墓）がある。時期的には、構築面が第1層のSE-1・SE-2が江戸時代中期以降、第4~1層のSK-1、第4~3層のSK-11・SK-12が平安時代前期以降、第5層のSD-14が奈良時代末期～平安時代前期の他は、古墳時代初頭前半～前期前半（庄内式期古相～布留式期古相）に比定されるものが大半を占めた。



第4図 22-1 調査区・22-2 調査区断面図



- 0 寒土
- 1 10YR6/1灰褐色砂質シルト。旧作土層
- 2 2.50Y6/1明オーリーブ灰色砂質シルト。マンガン・酸化鉄が斑点状に付着。
- 3 2.50Y7/1明オーリーブ灰色砂質シルト。等粒砂の上にマンガン斑点状に付着。
- 4-1 10YR5/2灰黃褐色中粒砂～細粒粘砂。水浮ラミナが認められる。
- 4-2 2.50Y7/1明オーリーブ灰色中粒砂～細粒粘砂。
- 4-3 2.50Y8/1灰白色細粒粘砂～中粒砂。部分的に褐色。斜行ラミナ。
- 5 10YR6/2灰黃褐色シルト質粘土。
- 6 5YR6/1褐色灰土質シルト。
- 7 NG/0灰色粘土。測定不能で、一部10YR7/1明緑灰色粘土層を含む。
- 8 10YR6/4暗青灰色シルト質粘土。水平方向に炭化物がテクニカ状に堆積。上面の一部は土壤化している。
- 9 10YR7/1明緑灰色シルト質粘土。上面が古墳時代初期～前期前半（庄内式精古相～布留式精古相）の埴輪焼面。
- 10 10YR6/1青灰色粘土質シルト。
- 18 10YR6/3にびい黄褐色細粒粘砂～粗粒砂。
- 19 10YR6/1褐色粘土質シルト。上面のマンガン斑点が顯著。1号・2号方形溝基の底土。
- 20 10YR7/4にびい黄褐色細粒粘砂シルト。一部中粒砂を含む。
- 21 10YR7/4にびい黄褐色シルト質粘土。種野状の盪まり。6世紀中葉の遺物を含む。
- 22 10YR7/2にびい黄褐色シルト質粘土。
- 23 2.50Y7/1明オーリーブ灰色細粒粘砂～中粒砂

第5図 22-3調査区断面図

## 井戸 (S E)

### S E - 1

1 調査区西部の I - 25 - 2 ・ 3 B C 地区で検出した。第1層上面を構築面としており、南西部で S D - 1 を切っている。北部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分では掘方が不定形を呈するもので、東西幅4.3m、南北幅2.95mを測る。深さは0.5mまでは確認したが、以下は湧水が多大なため掘削を中止した。埋土は雑多な土層がブロック状に混じりあった不均質な層相である。掘方の西部で井戸側の設置が想定される土層堆積が認められたが、井戸側そのものを検出するに至っていない。遺物は出土していないが、江戸時代中期以降に中河内地区を中心に構築された農耕用の井戸と考えられる。

### S E - 2

S E - 1 の東約1.7m地点で検出した。S E - 1 と同様、構築面は第1層上面である。井戸側に桶枠と瓦枠を使用する井戸で、径0.75m、深さ1.2m以上を測る。桶枠は径0.68m前後、深さ0.6m以上を測る。瓦枠は縦28cm、横25cm、厚さ2.8cmを測る井戸側用瓦を9枚で一周させるもので、これを4段以上に積み重ねている。井戸側内部からは、内部に落ち込んだ井戸側用瓦が出土している。時期や性格は S E - 1 と同様のものと推定される。

## 土坑 (S K)

### S K - 1

1 調査区西部の I - 25 - 3 D 地区で検出した。円形を呈するもので、径1.1m、深さ0.5mを測る。掘方の断面形状は逆台形を呈する。埋土は4 - 1 層を構成する10YR5/2灰黄褐色中粒砂～極粗粒砂で充填されている。遺物は出土していない。第9層上面で検出したが、本来の構築面は第4 - 1 層上面が想定される。遺物は出土していない。いわゆる、粘土探掘土坑と推定される。構築時期は、平安時代前期以降と推定される。

### S K - 2

1 調査区西部の I - 25 - 3 D ・ E 地区で検出した。検出部分では「U」の字状を呈する溝状で、北部は調査区外に至る。東西幅1.8m、南北幅1.15m、深さ0.18mを測る。埋土は灰色極細粒砂と灰色粘土質シルトの2層から成る。遺物は古墳時代初頭前半（庄内式期古相）に比定される土器類が少量出土したが、図化できたものは無い。

### S K - 3

S K - 2 の東で検出した。東西方向に長い梢円形を呈するもので、北部は調査区外に至る。長径2.7m、短径1.4m、深さ0.4mを測る。埋土は灰色極細粒砂～粘土質シルトを中心とする4層

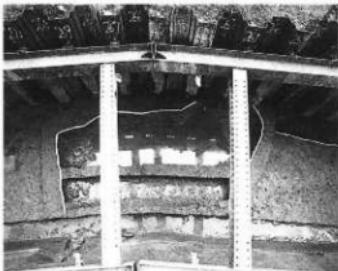


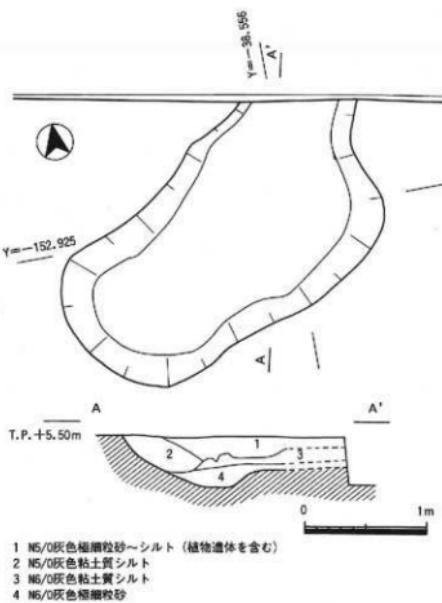
写真2 S E - 1 検出状況 (北から)



写真3 S E - 2 検出状況 (東から)

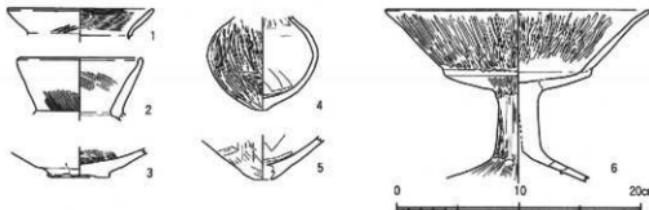
から成る。遺物は古墳時代初頭前半（庄内式期古相）に比定される土師器類が少量出土している。

6点（1～6）を図化した。1は壺の口縁部の小片である。庄内式期に存在する第V様式系壺の壺A類に分類される。2は短頸直口壺A類の口頸部である。口頸部が斜上方に直線的に伸びた後、端部付近で直上方に角度を変えている。3は壺の底部と推定される。底部は小さく突出したドーナツ底である。4・5は小形壺の底部で、共に尖り底で小さな底部を持つ。4の体部外面には、縦方向の密なヘラミガキ、底部にはヘラケズリが施されている。6は高杯で杯部の2/3以上が残存しており、口径21.7cm、杯部高5.5cmを測る。杯部は段を有する杯底部から口縁部が外反気味に伸びる。柱状部は円筒状で長く中空である。杯部外面は、縦方向のヘラミガキが施されている。脚部外面は、全体にハケ調整が行われている。高杯A<sub>2</sub>にあたる。庄内I期に比定される。



第6図 SK-3 平断面図

長く中空である。杯部外面は、縦方向のヘラミガキが施されている。脚部外面は、全体にハケ調整が行われている。高杯A<sub>2</sub>にあたる。庄内I期に比定される。



第7図 SK-3 出土遺物実測図

#### SK-4

1 調査区東部のI-25-4 I地区で検出した。北部は調査区外に至る。検出部分で半円形を呈する。検出部分で東西幅1.03m、南北幅0.35mを測る。第9層上面で検出したが、本来の構築面は第4～2層上面である。SK-1と同様、粘土探査坑と推定される遺構である。北壁面での観察では、掘方の断面形状は瓢形で、深さ1.3mを測る。埋土は上層が灰白色中粒砂～極粗粒砂と灰白色砂質シルトの互層、下層が青灰色砂質シルトの2層から成る。遺物は出土していない。

#### SK-5

2 調査区のII-21-5 B地区で検出した。円形を呈するもので、径0.65m、深さ0.5mを測る。

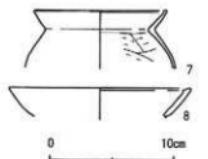
埋土はV字形を呈する断面形状に沿ってシルト質粘土を主体とする2層が堆積している。遺物は古墳時代初頭（庄内式期）に比定される土器類の小片が少量出土したが、図化できるものは無い。

#### S K - 6

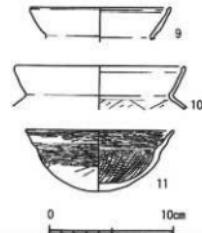
2調査区のII-21-5B地区で検出した。SK-5の東に隣接している。円形を呈するもので、径0.55m、深さ0.22mを測る。埋土は少量の有機物を含む暗灰色シルトの単一層である。遺物は第8図SK-6出土遺物実測図古墳時代前期前半（布留式期古相）に比定される土器類の小片が少量出土している。甕2点（7・8）を図化した。共に小片である。7は口縁端部の肥厚が小さく、体部内面のヘラケズリが屈曲部に及ばない等の特徴を持つもので、布留式甕の中でも古相に位置付けられる甕F<sub>1</sub>にあたる。8は口縁端部の内部肥厚が内傾する面を持つ甕F<sub>2</sub>にあたる。遺構の帰属時期は布留I期である。

#### S K - 7

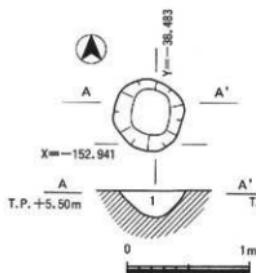
SK-6の東に隣接している。南北方向に長い楕円形を呈するもので、長径1.45m、短径1.0m、深さ0.45mを測る。埋土は逆台形を呈する掘方断面に沿って4層がレンズ状に堆積している。遺物は4層を中心に古墳時代前期前半（布留式期古相）に比定される完形品を含む土器類が少量出土している。3点（9～11）を図化した。9・10は布留式甕（甕F<sub>1</sub>）の口縁部の小片である。11は半円形の底体部に二段に屈曲する口縁部が付く精製品の小形鉢（鉢H<sub>2</sub>）である。完形品で、口径12.0cm、器高5.0cmを測る。この器種としてはやや小振りである。各部の調整は、外面体部上位から口縁部にかけて横方向の密なヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキの後、



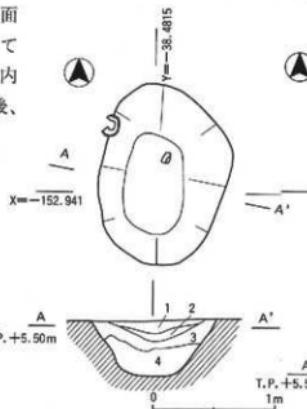
第8図 SK-6出土遺物実測図



第9図 SK-7出土遺物実測図



1 N3/0暗灰色シルト

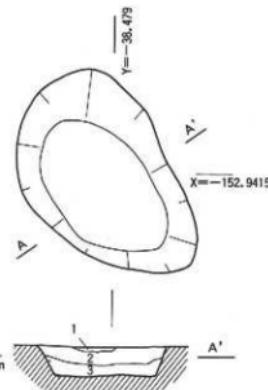


1 10YR3/1暗灰色粘土質シルト

2 10YR3/1黒褐色粘土

3 N5/0灰色粘土質シルト

4 N5/0灰色シルト質粘土



1 N4/0灰色シルト（有機物のラミナ）

2 N4/0灰色シルト

3 N3/0暗灰色シルト（遺物を含む）

第10図 SK-6 平断面図

第11図 SK-7 平断面図

第12図 SK-8 平断面図

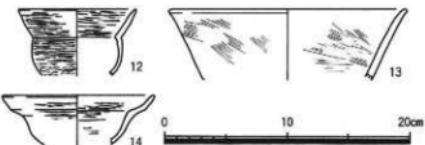
体底部に放射状にヘラミガキを装飾的に施す。遺構の帰属時期は、SK-6と同様、布留I期が想定される。

#### SK-8

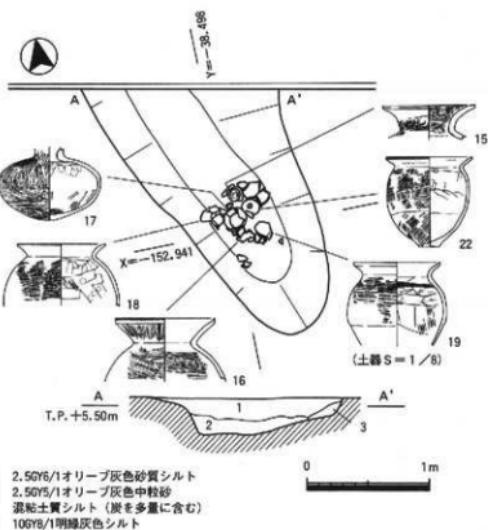
2調査区のII-21-5C地区で検出した。SD-10の東に隣接している。南北方向に長い楕円形を呈するもので、長径1.85m、短径1.1m、深さ0.24mを測る。底部はほぼ水平で掘方の断面形状は逆台形を呈する。埋土はシルトを主体とする3層から成る。遺物は2・3層から古墳時代前期前半（布留式期古相）に比定される土師器類が少量出土している。3点（12～14）を図化した。12は口径が体部最大径を凌駕する小形丸底壺（小形壺B2）である。外面および内面口縁部に横方向のヘラミガキを施す。13は大形直口壺Aの口縁部の小片である。胎土中に微細な角閃石を多く含み、褐灰色系の色調を呈する。生駒西麓産である。14は小形鉢（鉢H2）にあたる。遺構の帰属時期は布留I期と考えられる。

#### SK-9

SK-8の北に隣接している。北部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分では、南北方向に溝状に伸びるもので、検出長2.1m、幅1.05m、深さ0.28mを測る。埋土は3層から成る。遺物は2層を中心古墳時代初頭前半（庄内式期古相）に比定される土師器類がコンテナ1箱程度出土している。13点（15～27）を図化した。15は口頸部が外反気味に大きく開くもので、広口壺Cにあたる。外面の口頸部下間に縱方向のハケメ、内面の口頸部に横方向のヘラミガキが施されている。16は口頸部が直線的に伸びるもので、口縁端部は上部に拡張し幅広の面を有し、端部には細かいキザミ目が施されている。白灰色の色調で撒入品と推定される。外面の体部から口縁部にかけて煤の付着が認められ、壺以外の機能を果たした可能性がある。17は玉葱形の体部を有する細頸壺と推定される。底部は径1.4cm程度の小さなもので、あげ底を呈している。体部外面の調整は、上部が縱方向、中位以下が横方向のヘラミガキにより全体が丁寧に仕上げられている。18～24は第

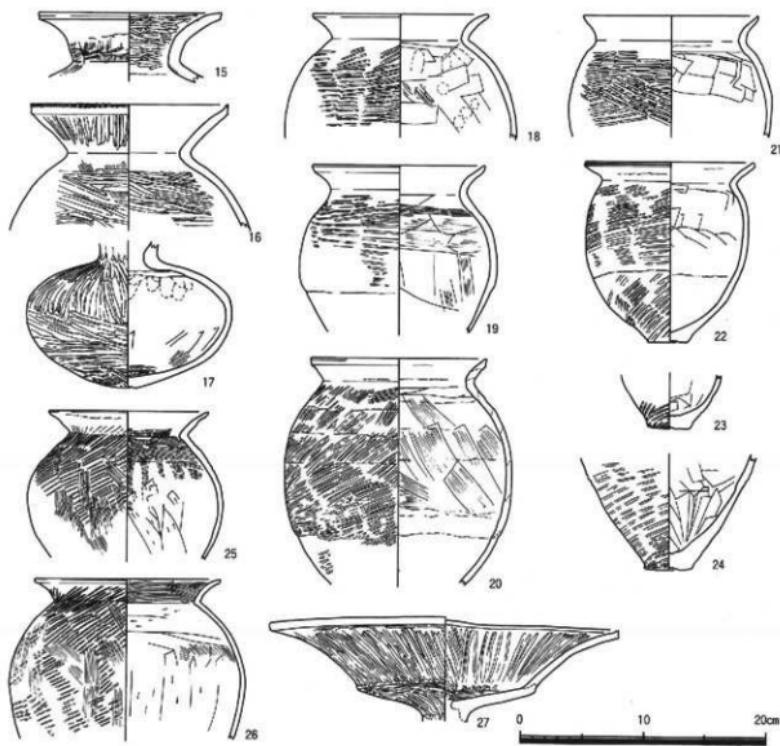


第13図 SK-8出土遺物実測図



第14図 SK-9 平断面図

V様式系甕である。器高からみて、18~21が大形品、22が中形品である。形態的には、体部が球形化した甕A<sub>2</sub> (18・19・21) と体部がやや胴長の甕A<sub>1</sub> (20・22) に分類される。口縁端部の形態では、外反気味に伸びた後、端部が丸く終わるもの18、尖り気味のもの21、内傾して面を持つもの22、やや幅広の面を持つ19・20がある。体部外面のタタキ調整は、3本/cm程度で三分割成型に沿って角度を変えており、18・19・21・22では上段および中段が水平方向ないしはや右上がりのタタキ、下段が右上がりのタタキである。20は、中段・下段が右上がりのタタキ、上段は水平方向のタタキの後、右上がりのタタキを施す。21については、中段から上段にかけて左上がりのタタキが部分的に施されている。体部内面の調整は、上段が板ナデ、中段以下はナデが施されている。23・24は第V様式系甕の底部である。共にやや突出したドーナツ底を呈する。23は小形品で底部外面に煤の付着が認められる。25・26は庄内式甕で河内型庄内式甕の古相に位置付けられる。共に球形の体部で、口縁部は叩き出し技法により成形されている。第V様式系甕に比して器壁がやや薄い (3mm) 特徴を持っている。体部外面のタタキ調整 (4本/cm) は連続ラセン



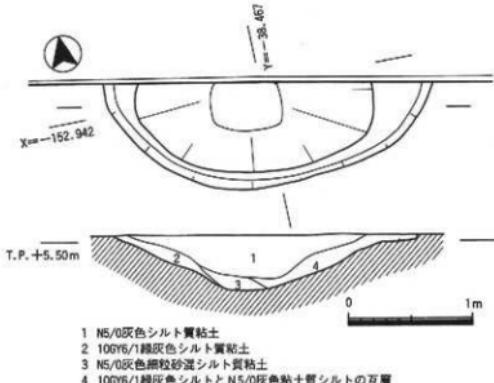
第15図 SK-9出土遺物実測図

タタキによるもので、その上に縦方向のハケメが散発的に施されている。体部内面の調整は、屈曲部より下部をヘラケズリする26と、上部がハケメ以下ヘラケズリを行う25がある。25が非生駒西麓産である。26が生駒西麓産である。27は高杯A<sub>2</sub>に分類される。水平な杯底部から口縁部が大きく外反するもので、杯部口径28.5cmを測る。杯部内面に煤が付着しており、高杯の持つ機能以外に使用された可能性がある。これらの土器群は河内型庄内式壺の出現期の様相を示す資料で、庄内Ⅰ期に比定される。

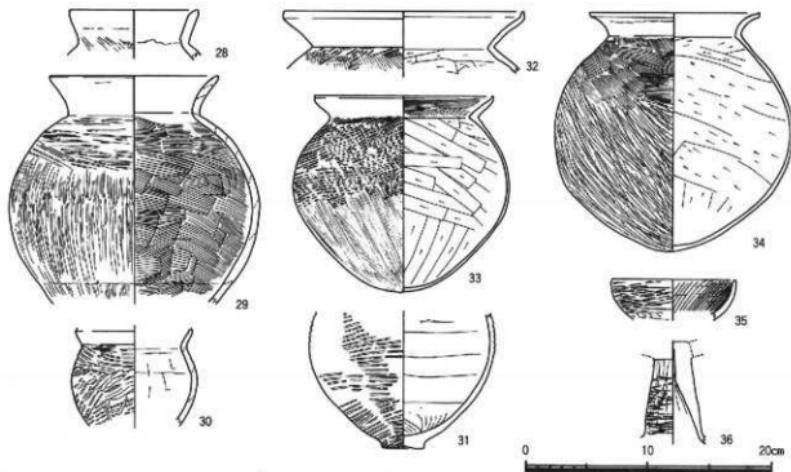
#### S K-10

2 調査区東部のII-21-5 D地区で検出した。北部は調査区外に至る。検出部分で東西幅2.70m、南北幅0.9m、深さ0.45mを測る。埋土は擂鉢状を呈する掘方の形状に沿って4層が堆積している。遺物は1層を中心に古墳時代初頭後半（庄内式期新相）に比定される土師器類が少量出土している。9点（28～36）を図化した。28は短頸壺の小片である。29は球形の体部に外反する口縁が付く広口壺Aである。体部外面の調整は上半が横方向、中位以下が縦方向のヘラミガキが施されている。体部内面は上半が横方向、それ以下が左上がりのハケメが密に施されている。灰白色の色調で、胎土中に大粒の赤色酸化土が散見される。30は第V様式系の小形壺である。体部は二分割成形によるもので、体部外面上段は水平方向、下段は右上がりのタタキ調整が行なわれている。31は第V様式系壺の体底部である。底部は小さく突出するドーナツ底である。32は庄内式壺の小片である。口縁端部が上方に拡張され幅広の端面を形成している。体部外面は右上がりのタタキを密なハケ調整で消している。生駒西麓産である。33はほぼ完形の庄内式壺（壺B3）である。口径14.3cm、器高16.0cm、体部最大径17.5cmを測る。体部最大径がほぼ中位にあるもので、底部は丸味を持つ尖り底である。体部外面のタタキ調整は中位まで、その後上位から底部にかけて縦方向のハケ調整が施されている。内面は口縁部がヨコハケ、体部は底部から屈曲部にかけてヘラケズリを行なう。生駒西麓産である。34は球形の体部に尖り底が付く壺である。ほぼ完形品で、口径13.8cm、器高19.6cm、体部最大径19.4cmを測る。体部外面に布留式壺の属性であるハケ調整の他、細かい単位のヘラミガキが全体に密に施された壺で、布留式影響の庄内式壺に総括される壺Dにあたる。体底部

の全面に煤の付着が認められる。赤褐色系の明るい色調を呈するもので、非生駒西麓産である。35は椀形の杯部に裾部が大きく開く脚部が付く高杯C<sub>2</sub>の杯部の小破片である。36は高杯の柱状部である。柱状部外面は縦方向に面取りした後、横方向のヘラミガキが行われている。遺構の帰属時期は、庄内式壺B<sub>3</sub>の特徴を示す33の存在からみて古墳時代初頭後半（庄内式期新相）の庄内Ⅲ期が考えられる。



第16図 SK-10平面面図



第17図 SK-10出土遺物実測図

### SK-11

3調査区東部のII-22-6B地区で検出した。北部は調査区外に至る。検出部分では、南北方向に伸びる溝状を呈している。底部は水平で掘方断面の形状は逆台形を呈する。検出長2.0m、幅0.77m、深さ0.45mを測る。埋土は褐灰色粘土と灰白色細粒砂～中粒砂（第4～3層）で充填されており、短期間に掘削と埋め戻しが行われたことを示している。遺物は出土していない。本来の構築面は第4～3層上面が想定され、時期的には平安時代前期以降が想定される。遺構の性格としてはSK-1・SK-4と同様、粘土探掘坑と推定される。

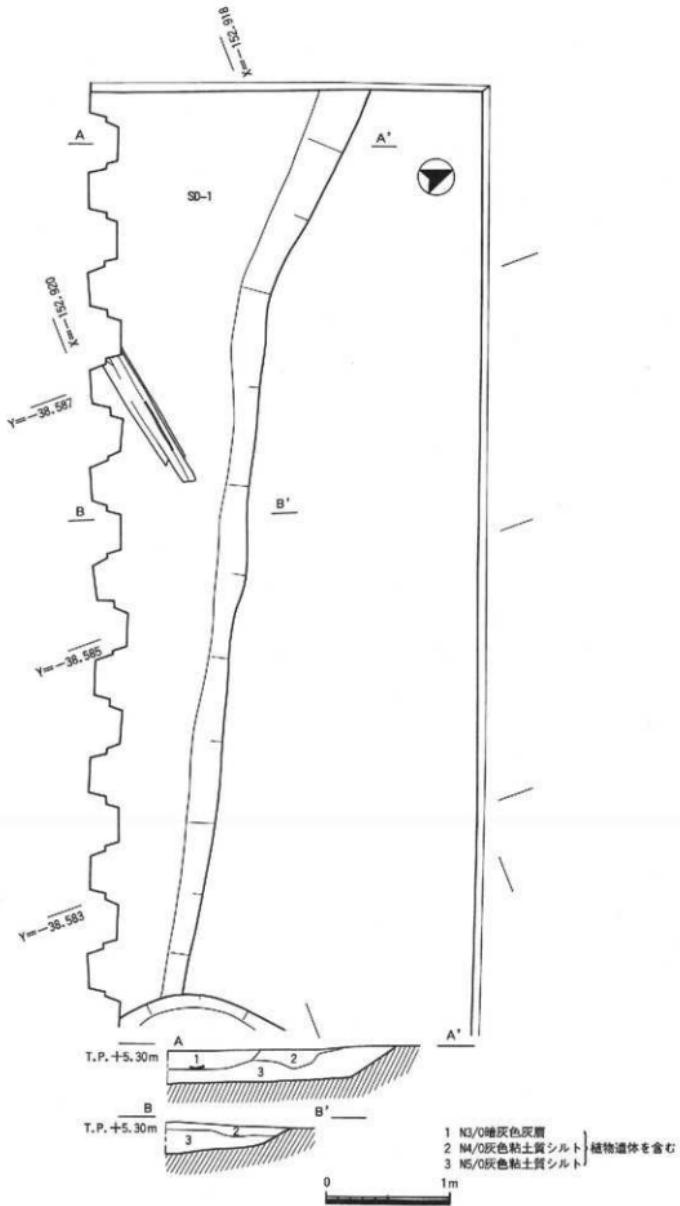
### SK-12

3調査区東部のII-22-6C地区で検出した。北部が調査区外に至る。検出部分で半円形を呈することから、本来は円形の掘方を有するものであった可能性が高い。検出部分で東西幅1.4m、南北幅0.7m、深さ0.55m以上を測る。埋土はSK-11と同様である。遺物は出土していない。SK-11と同様、第4～3層上面から切り込む遺構であり、遺構の性格についても同様であったことが想定される。

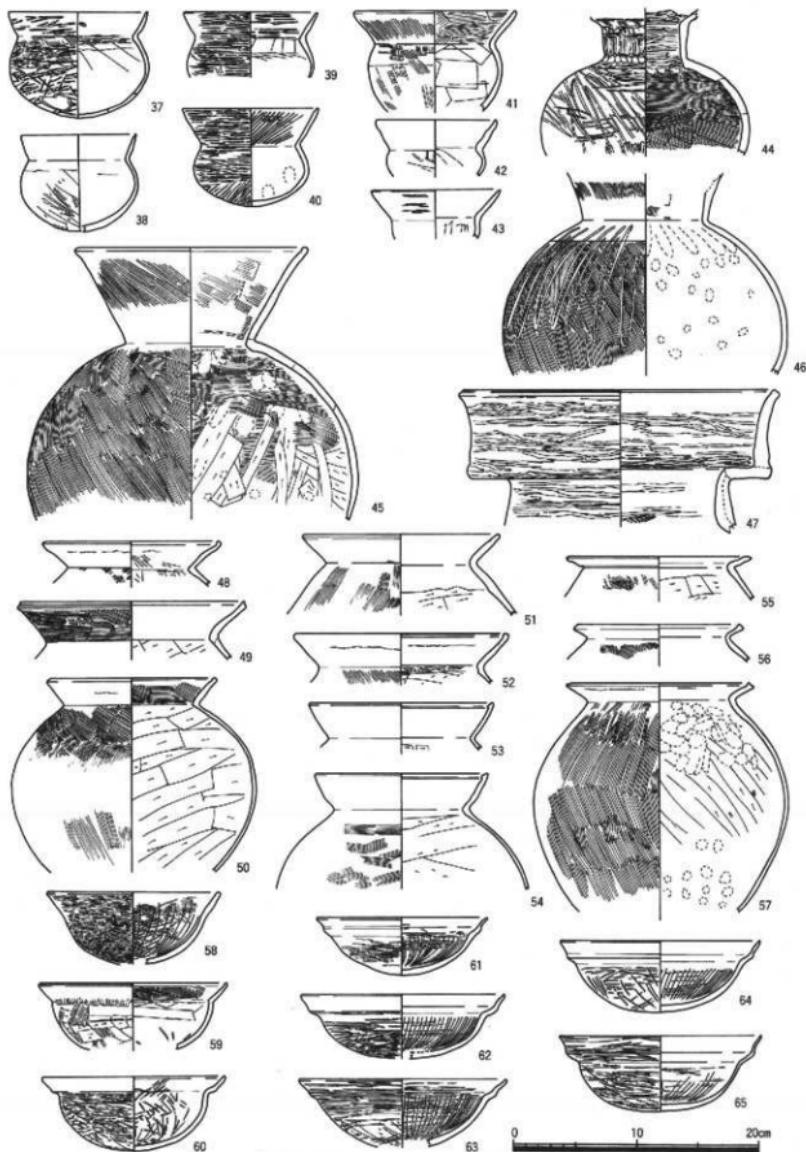
### 溝(SD)

#### SD-1

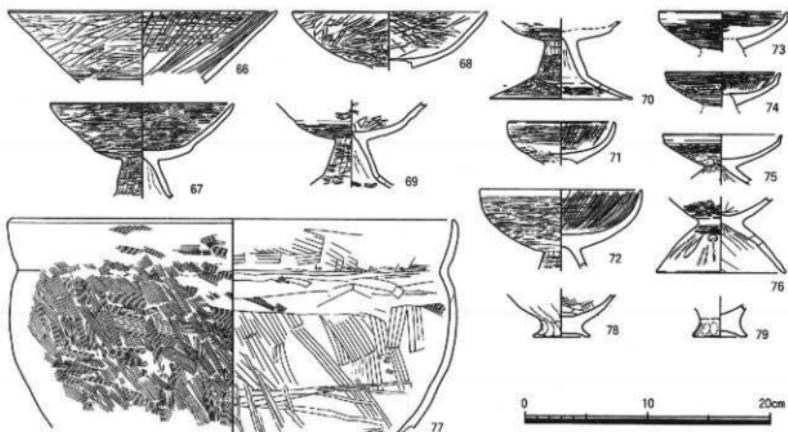
1調査区西端のI-25-2・3B地区で検出した。東西方向に伸びる溝で東端はSE-1に切られている。調査では北肩を検出したのみで、南肩は調査区外に至るために不明である。検出部分で、検出長7.5m、幅2.0m、深さ0.27mを測る。埋土は3層から成る。遺物は古墳時代初頭後半～前期前半（庄内式期新相～布留式期古相）に比定される土師器類が多量に出土した他、木製品が少量出土している。44点（37～80）を図化した。壺類は11点（37～47）である。37～43は小形丸底壺に分類されるもので、口径と体部最大径がほぼ等しい37～39が小形壺B<sub>1</sub>、口径が体部最大径を凌駕する40・41が小形丸底壺B<sub>2</sub>、半球形の体部に大きく開く口縁部が付く42・43が小形



第18図 SD-1 平断面図

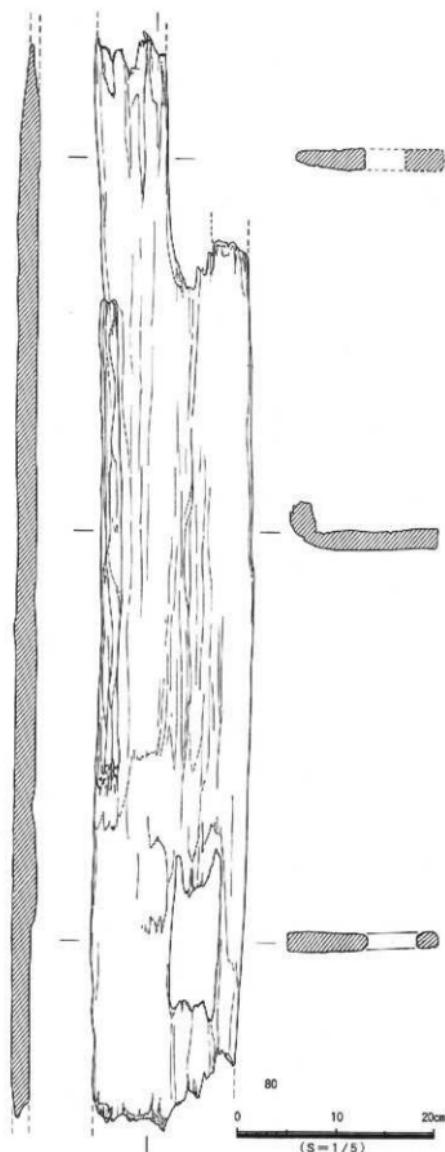


第19図 SD-1 出土遺物実測図その1



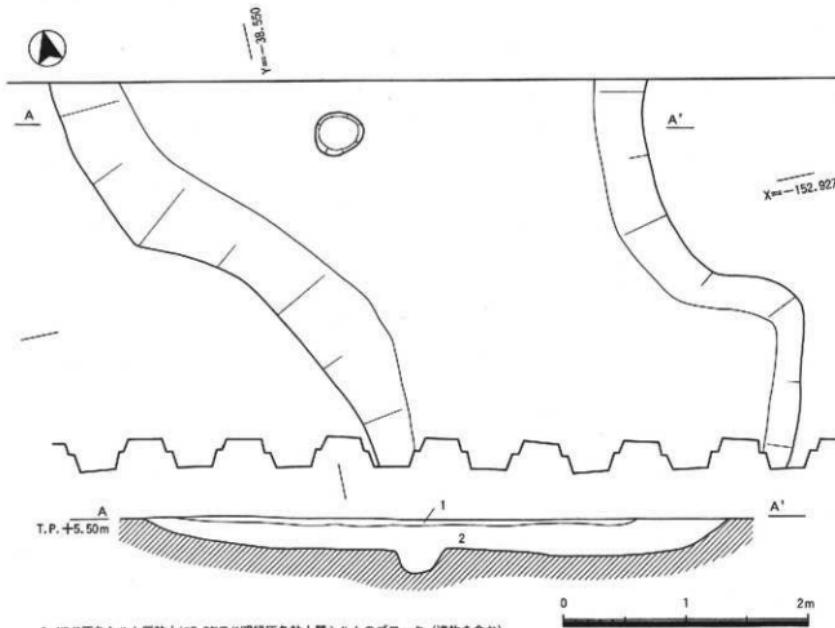
第20図 SD-1出土遺物実測図その2

壺B<sub>3</sub>にあたる。外面の調整は口縁および体底部が横方向のヘラミガキを行う37・39・40と体底部外面にヘラケズリを行う38、体底部外面の一次調整としてハケ調整を行う41がある。37の体底部には焼成後の穿孔が認められる。44は口縁部を欠損する。二重口縁壺B<sub>3</sub>に分類される。45・46は大形直口壺Aである。45は口縁部がほぼ完存しており、口径18.2cm、口頸部高7.7cmを測る。布留式期の大形直口壺Aは、45に見られるように布留式壺と同様、口縁端部が肥厚する形態のものが多い。46の体部外面には、タテハケ調整後に装飾的に綫方向のヘラミガキが施されている。2点共に褐灰色を呈するもので、生駒西麓産である。47は大形の複合口縁壺E<sub>1</sub>に分類されるもので、口頸部の1/2が残存している。口縁は上方へ直線的に伸びた後、中位から外反し内傾する端面を形成する。口頸部は内外面ともに、横方向のヘラミガキにより平滑にされている。壺は10点(48~57)を図化した。48~50は庄内式壺である。3点共に「く」の字に屈曲する口縁部を有するもので、口縁端部が上方へ摘み上げられ内傾する面を形成しており、49の端面には1本の沈線が廻る。50の体部上半は左上がりの細筋タタキの後、下部付近はタテハケでタタキが消されている。河内型庄内式壺の最終段階である壺B<sub>4</sub>にあたる。48・50が生駒西麓産、49が非生駒西麓産である。51の壺は、屈曲部が丸くヘラケズリが屈曲部に及ばないもので、布留式壺の属性の一部を持つ壺を総称した布留式傾向壺の壺Eにあたる。非生駒西麓産である。52~54は布留式壺で口縁端部が丸味を持って肥厚する52が壺F<sub>1</sub>、内部肥厚が内傾する面を持つ53・54が壺F<sub>2</sub>にあたる。54は口縁部が完存しており、口径14.2cmを測る。55は丸味のある屈曲部から強く外折してやや小さい口縁部を形成している。体部内面のヘラケズリは、屈曲部のやや下まで行なわれている。搬入品である。56・57は外折する口縁部の端部が内傾して断面三角形状を呈する。東四国系の壺で壺M<sub>2</sub>にあたる。57は体部下半より上部が残存するもので、口径14.4cm、体部最大径20.6cmを測る。体部外面のタテハケは上半が右上がり、中位から下半が左上がりである。体部内面の調整は、上半と下半に指頭圧痕が顯著で、中位はヘラケズリを行う。小形鉢は8点(58~65)を図化



第21図 SD-1 出土遺物実測図その3

した。そのうち、口縁部が内湾氣味に伸びる鉢H<sub>1</sub>が58・59で、60～65については、口縁部が二段に屈曲する鉢H<sub>2</sub>に分類される。全て精製品で、色調は黄橙色系を呈する。高杯は7点(66～72)を図化した。杯部が斜上方に直線的に伸びる高杯A類が5点(66～70)と楕形の杯部に低い脚部が付く高杯C類2点(71・72)がある。高杯A類66～70は66が大形品の他は小形品である。大きさに違いがあるものの、高杯A<sub>4</sub>にあたるもので、小形品のうち68以外は杯部外面に段を有する。高杯C類は口径が8.7cmを測る小形の71と、12.9cmを測る大形品の72がある。高杯類は全て精製品で、色調は黄橙色系である。小形器台は4点(73～76)を図化した。73～75が受部、76が杯部から脚部が残存しており、4点共に受部と脚部が貫通しない器台B<sub>3</sub>にあたる。受部のみ残存する73～75はやや深めの受部を持つもので、端部は上方に器壁を減じて拡張され、幅広の端面を形成している。3点共に受部内外面の器面には、焼成時に生じた小さな円形状の剥離が全面に認められる。76以外は精製品で、色調は黄橙色系である。77は大形鉢(鉢J<sub>2</sub>)である。口縁部が内湾氣味に立ち上がり端部は内傾する面を有する。78・79はあげ底の底部を有する製塩土器である。80は建築部材と推定される。残存部分で幅15.5cm、長さ113.5cm、厚さ2.0cmを測る。一部、突起部分があるほか、方形に穿たれた孔が2箇所に認められる。出土遺物の帰属時期としては、布留Ⅰ期が推定される。

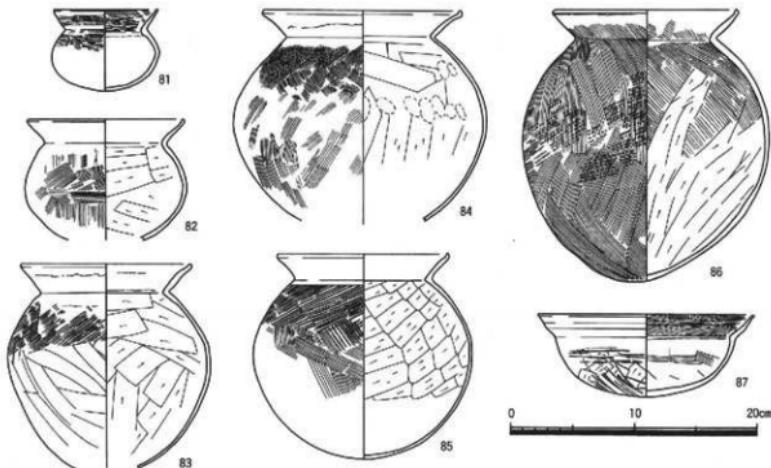


1 NS/0灰色シルト質粘土に7.5Gy/1明緑灰色粘土質シルトのブロック(遺物を含む)  
2 NS/0灰色シルトと7.5Gy/1明緑灰色シルトの互層(遺物を含む)

第22図 SD-2 平断面図

### SD-2

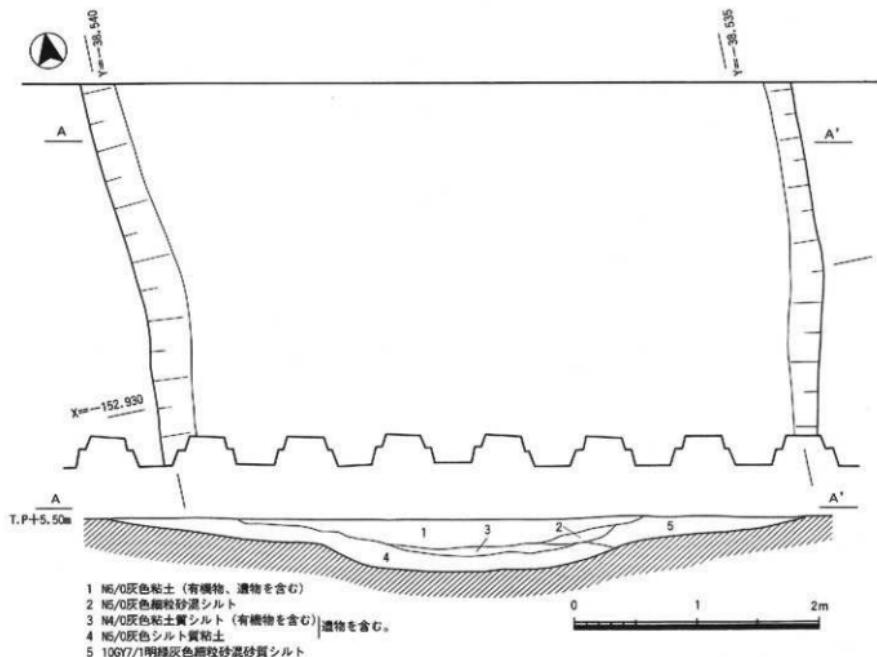
1調査区中央部のI-25-3E・F地区で検出した。南北方向に蛇行気味に伸びるもので、検出長3.5m、幅4.75m、深さ0.25mを測る。埋土は断面形状に沿って不均質な層相を持つ2層がレンズ状に堆積している。遺物は1・2層から古墳時代前期前半（布留式期古相）に比定される土師器類が多量に出土している。7点（81～87）を図化した。81は体部最大径が口径を凌駕する小形丸底壺B<sub>1</sub>である。ほぼ完形で、口径8.5cm、器高6.7cm、体部最大径8.4cmを測る。83～85は庄内式壺である。球形の体部に丸底の底部が付くもので、体部外面のタタキ調整は上半のみに細筋タタキ（5本/cm）が施されており、以下はハケないしはナデ調整が行われている。壺B<sub>1</sub>にあたる。3点共に生駒西麓産である。82は小形の壺である。布留式壺の属性である体部外面のハケ調整や屈曲部が丸味を持つ等の特徴を持つ。布留式傾向壺の壺Eに分類される。生駒西麓産である。86は体部の張りが小さく、やや長めの体部に尖り底気味の底部が付く壺である。体部外面の調整は、体部中位まで右上がりのタタキを施した後、全体をタテハケにより消している。体部内面は上位が幅広のハケメ状の条痕を残す板ナデ、以下はヘラケズリが行われている。形態や調整の特徴から、布留式影響の庄内式壺に分類される壺Dにあたる。撒入品である。87は小形鉢（鉢H<sub>2</sub>）である。完形に復元でき、口径17.4cm、器高6.8cmを測る。出土遺物からみて遺構の帰属時期は布留Ⅰ期に比定される。



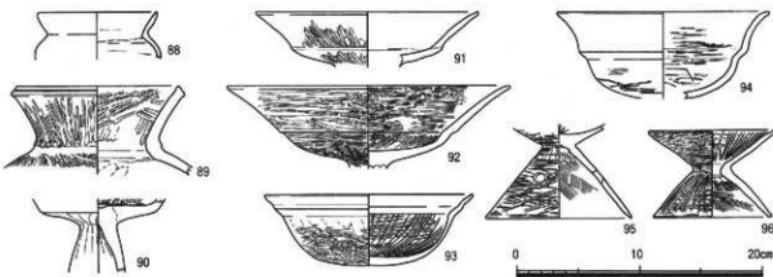
第23図 SD-2 出土遺物実測図

### SD-3

SD-2の東で検出した。南北方向に伸びるもので、検出長3.1m、幅5.7m、深さ0.45mを測る。埋土は緩やかな傾斜を持つ断面形状に沿って5層が漸次に堆積している。遺物は1・3・4層を中心古墳時代前期前半（布留式期古相）に比定される土師器類が多量に出土している。9点（88～96）を図化した。88は小形丸底壺B<sub>1</sub>の小片である。89は口縁部が斜上方へ外反気味に



第24図 SD-3 平断面図



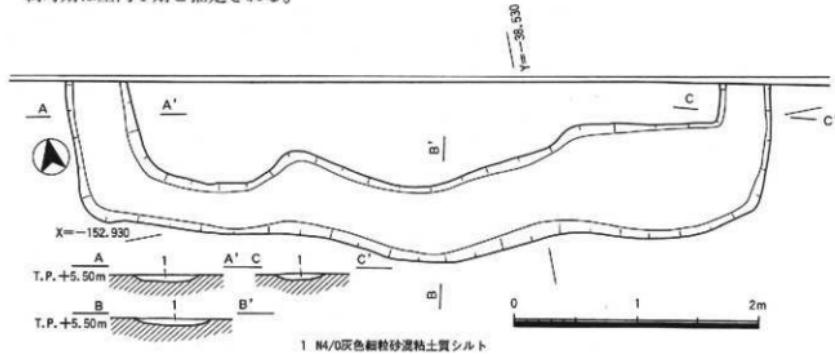
第25図 SD-3 出土遺物実測図

伸びるもので、端部は内傾する面を有する。広口壺Aに分類される。90～92は高杯である。91は杯部口縁部が外反するもので高杯A<sub>2</sub>にあたる。92は杯体部と口縁部の境の外面に明瞭な段を持つ。全体に丁寧な作りで、胎土も精良である。河内地域では類例が少ないが、石川県南部（加賀南部）を中心とした漆町遺跡の器種分類では、高杯B<sub>1</sub>に分類されるものに酷似しており、加賀南部地域では普遍的に存在するものとされている。93は鉢H<sub>2</sub>に分類される小形の精製鉢である。94は二段に屈曲する口縁部が大きく外反して伸びるもので、93と同様、鉢H<sub>2</sub>に分類される

が類例に乏しい。漆町遺跡で小形土器（鉢形）のA2aとされる器形に近く、92と同様加賀南部からの搬入品の可能性がある。95は小形器台B類で脚部は完存している。脚部内面の中位以下に布目の痕跡が残る。96はいわゆる鼓形器台で、屈曲部外面に段を持たない器台C<sub>2</sub>にあたる。出土した遺物は、一部、古い時期のものを除けば布留Ⅰ期を中心とした資料である。

#### SD-4

SD-3の東で検出した。検出部分で「コ」の字状を呈する。検出長5.8m、幅0.45～0.65m、深さ0.06m前後を測る。埋土は灰色細粒砂混粘土質シルトの單一層である。遺物は古墳時代初頭前半（庄内式期古相）に比定される土器類が少量出土している。第V様式系壺1点（97）を図化した。97は口縁部の残存率が1/12程度の小破片である。「く」の字に屈曲する口縁端部に垂直方向に広がる面を有する。体部外面の調整は左上がりのタタキ（4本/cm）で、内面についてはハケとナデ調整が行われている。体部内面にヘラケズリが行なわれていないことから、第V様式系壺に分類したが、体部外面のタタキ調整は庄内式期古相の庄内式壺と酷似している。遺構の帰属時期は庄内Ⅰ期と推定される。



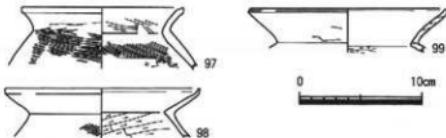
第26図 SD-4 平断面図

#### SD-5

1調査区東部のI-25-4 I地区で検出した。南北方向に伸びるもので、検出長3.25m、幅1.12m、深さ0.1mを測る。埋土は炭を含む灰色粘土質シルトの單一層である。遺物は古墳時代前期前半（布留式期古相）に比定される土器類が極少量出土しているが、図化できたものは無い。

#### SD-6

SD-5の東のI-25-4 J地区で検出した。南北方向に伸びるもので、検出長3.2m、幅2.05m、深さ0.2mを測る。埋土は上層の灰色粘土質シルトと下層の青灰色シルトの2層から成る。遺物は古墳時代初頭後半（庄内式期新相）に比定される土器類が少量出土している。庄内式壺2点（98・99）を図化した。共に



第27図 SD-4 (97)・SD-6 (98・99) 出土遺物実測図

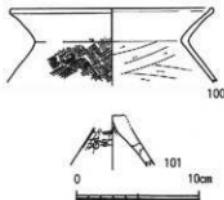
口縁部の残存率が1/12程度の小破片である。鋭く尖る屈曲部から口縁部が斜上方へ伸びるもので、端部は上方に摘み上げられて小さな面を作っている。2点共に生駒西麓産である。共に小片であり不明な点があるが、河内型庄内式壺の最終段階の壺B<sub>4</sub>にあたるものと推定され、遺物の帰属時期は庄内Ⅲ期～布留Ⅰ期が考えられる。

#### SD-7

2調査区西部のII-21-4・5B地区で検出した。南北方向に伸びる小溝で、検出長1.5m、幅0.28m、深さ0.08mを測る。埋土は有機物・植物遺体を多く含む黒褐色粘土質シルトの單一層である。遺物は古墳時代初頭前半（庄内式期古相）に比定される土器類が少量出土しているが、図化できたものは無い。

#### SD-8

SD-7の北に隣接する。東西方向に伸びる小溝で、全長2.28m、幅0.28m、深さ0.08mを測る。埋土は灰色粘土質シルトの單一層である。遺物は古墳時代前期前半（布留式期古相）に比定される土器類が極少量出土している。2点（100・101）を図化した。100は庄内式壺（壺B<sub>4</sub>）の小片である。体部外面は右上がりの細筋タタキ（6本/cm）が施されている。生駒西麓産である。101は小形器台の脚部である。脚部外面の上位は縦方向のナデで平滑にした後、横方向のヘラミガキが行われている。スカシ孔はやや小さめで焼成前に穿たれている。布留Ⅰ期と推定される。



第28図 SD-8出土遺物  
実測図

#### SD-9

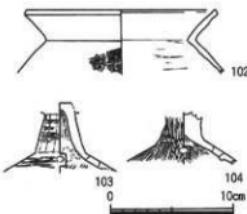
SK-6の北で検出した。南北方向に伸びる小溝で、検出長1.25m、幅0.42m、深さ0.25mを測る。埋土は2層から成る。遺物は出土していない。

#### SD-10

SK-7とSK-8の間を南北方向に伸びる。検出長3.15m、幅0.6m、深さ0.12mを測る。埋土は2層から成る。遺物は古墳時代初頭（庄内式期）に比定される土器類が少量出土しているが、図化できたものは無い。

#### SD-11

2調査区のほぼ中央部のII-21-4・5C地区で検出した。南北方向に伸びるもので、検出長3.1m、幅6.6m、深さ0.22mを測る。埋土は7層から成る。遺物は弥生時代後期～古墳時代前期前半（布留式期古相）に比定される弥生土器・土師器が少量出土している。3点（102～104）を図化した。102は庄内式壺の小片である。体部外面のタタキ調整や器壁が厚い等の特徴から、壺B<sub>3</sub>にあたるものと推定される。生駒西麓産である。103・104は高杯の脚部である。103は杯部が斜上方へ伸びるA類、104が椀形の杯部が付くB類にあたる。柱状部は103が中空、104が中実である。104は脚部外面に縦方向のヘラミガキを行うもので、この器種の中では古い様相を呈している。2点共にスカシ孔は4孔である。104がやや古く、時期を異にする他は、庄内式期新相～布留式期古相に比定される。



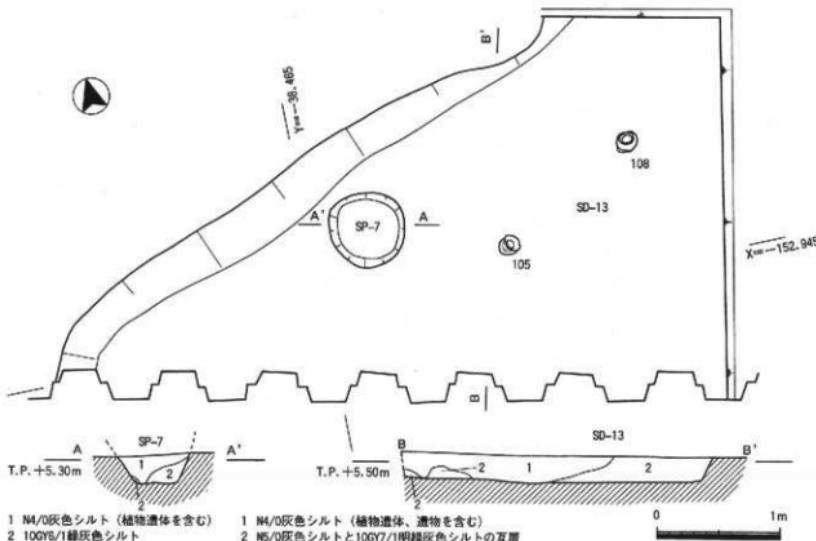
第29図 SD-11出土遺物実測図

### SD-12

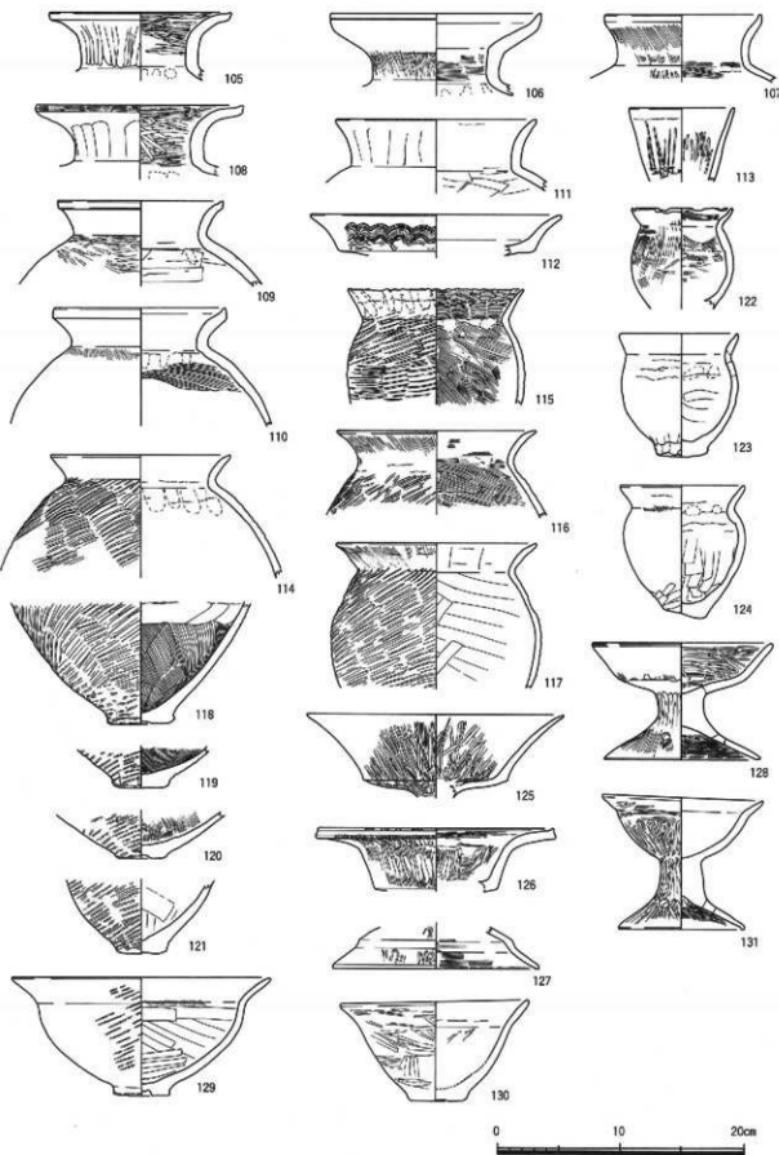
SD-11の東で検出した。検出部分の北端でSD-11に切られ、南部でSD-13を切っている。検出長3.6m、幅2.3m、深さ0.26mを測る。埋土は3層から成る。遺物は古墳時代初頭（庄内式期）に比定される土器類が少量出土しているが、図化できたものは無い。

### SD-13

2調査区の東端で検出した。東西方向に伸びるもので、西端はSD-12に切られ、南肩は調査区外に至るため詳細等は不明である。検出長5.7m、幅2.5m、深さ0.24mを測る。埋土は2層から成る。遺物は古墳時代初頭前半（庄内式期古相）に比定される土器類が、コンテナ2箱程度出土したが、一部を除いて小片が大半を占めた。27点（105～131）を図化した。105～111は広口壺である。頸部が直上方に直線的に伸びる105～108、外反して斜上方に伸びる109～111に区別されるが、111以外は口縁部は一様に摘み上げ口縁の形状を呈している。105・108が広口壺D<sub>1</sub>、106・107が広口壺D<sub>2</sub>、109～111が広口壺Aにあたる。7点共に、非生駒西麓産である。112は二重口縁壺の小片である。口縁部外面には櫛描きによるやや粗い波状文が施文されている。113は細頸壺である。口径8.4cmを測る。114～121は第V様式系壺である。分割成形に沿ったタタキ調整が行われている。115～117の口縁部は叩き出し技法によるもので、指頭圧痕が顯著な115やハケ調整を行う116・117がある。内面体部の調整においては、ユビナデ・板ナデ・ハケ等の多様な調整が行われている。118～121は第V様式系壺の底部である。4点共にやや突出した底部で、118・120はドーナツ底を呈する。122～124は小形壺Aである。3点共にやや雑な作りのもので、



第30図 SD-13・SP-7 平断面図

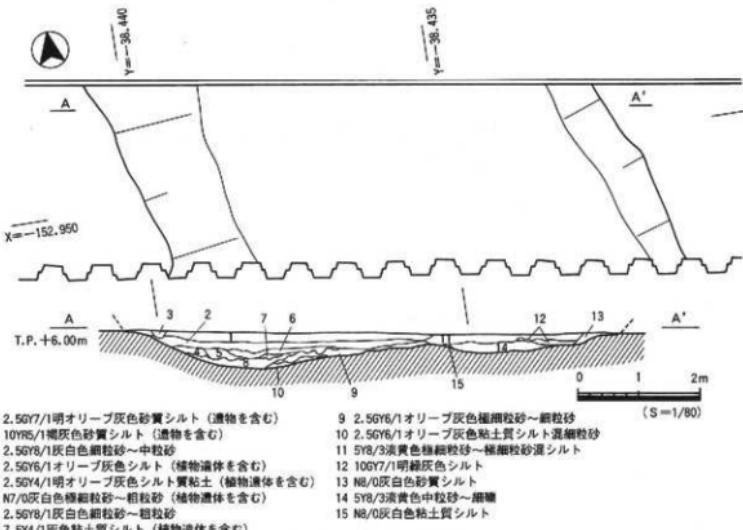


第31図 SD-13出土遺物実測図

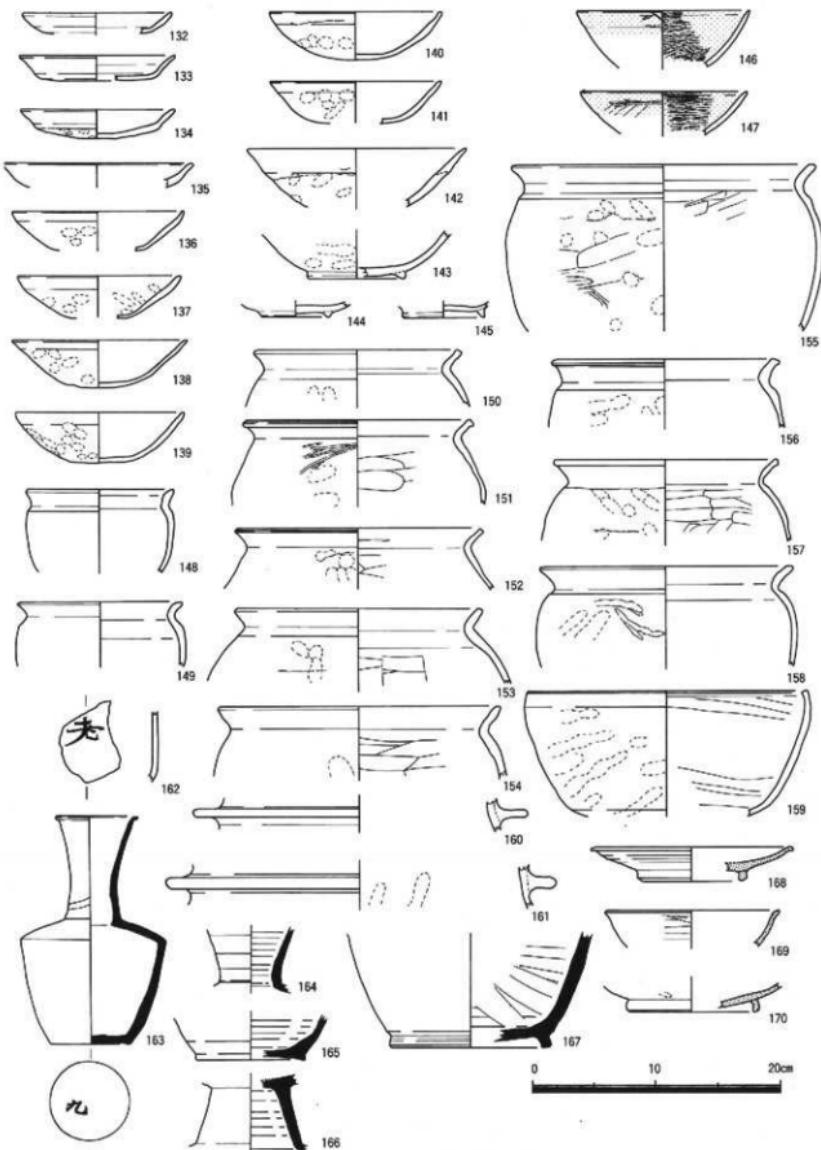
外面には指頭圧成形による凹凸が目立つ。底部が残存する123・124は共に貼り付けによるもので、124については斜めに貼り付けられており、未整形の底部表面には凹凸面を残す。125は杯部の口縁部が外反気味にゆるやかに開く高杯A<sub>2</sub>にあたる。126の杯部形状は口縁部が斜上方に伸びた後外折するもので、口縁部は摘み上げ口縁で端部の上下にキザミ日が装飾的に施されている。高杯B<sub>1</sub>にあたる。127は裾部の一部であるが、色調・胎土等が126と共通しており、同一固体と推定される。128は小形の高杯で、口縁部が斜上方に直線的に伸びる。脚部は短い中実の柱状部と屈折して聞く裾部からなる。脚部のスカシ孔は4分割する位置に3孔が穿たれている。129・130は鉢A<sub>1</sub>に分類される。129は復元口径21.3cm、器高9.6cm、底径4.6cmを測る中形の鉢である。口縁部は叩き出し技法によるもので、タタキ調整が口縁部におよぶ。底部は突出したドーナツ底である。130は復元口径15.2cm、器高8.2cm、底径4.6cmを測る小形の鉢である。131は脚台を持つ小形の台付き鉢である。鉢部の形状は、半円形の体部に外折する小さな口縁部が付く。脚部は中実で短い柱状部に屈折して聞く裾部が付く。スカシ孔は3方に穿たれている。出土遺物の帰属時期としては、高杯125の杯部底面の縮小と同部分の水平化傾向からみて弥生時代後期～古墳時代初頭前半（庄内式期古相）が推定される。

#### S D-14

3調査区西部のII-21-5・6FG地区で検出した。9層上面で検出したが本来の構築面は第5層上面である。南北方向に伸びるもので、東部でSD-15を切っている。検出長3.3m、幅8.0mを測る。深さは検出部分で0.55mを測るが、北壁面からみて1.1m前後であったと推定される。1本の溝と捉えたが、断面観察の結果、東側の流路が埋没した後に西側の流路に移動したことが推定される。埋土は、検出部分で15層が確認されている。遺物は奈良時代末期～平安時代前期を



第32図 SD-14平面面図

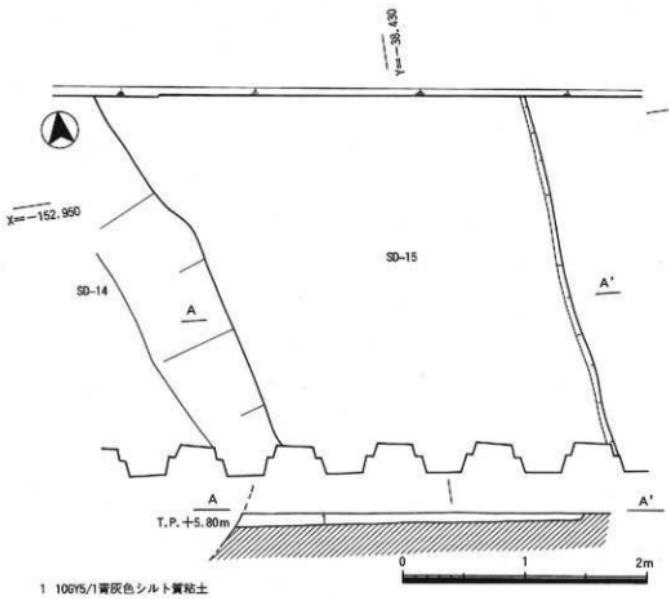


第33図 SD-14出土遺物実測図

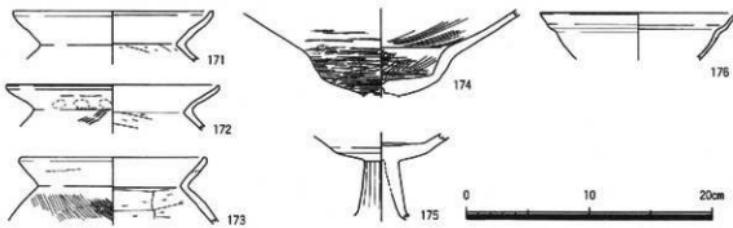
中心とする土師器・須恵器・灰釉陶器・黒色土器類がコンテナ1箱程度出土しているが、一部を除き小片化したものが大半を占めた。39点（132～170）を図化した。132～135は土師器小皿である。134以外は口縁部が1/6程度残存する小片である。口縁部の形態では、斜上方に直線的に伸びる132・135と底部の境に稜を有し外反気味に伸びる133・134がある。136～141は土師器杯である。残存率は138・139が1/2、他は1/4～1/6程度である。器形や各部の調整においては、ほぼ共通した画一性を持つもので、法量においても口径13.2～13.7cm、器高3.5～4.0cm程度で大きな差異は認められない。9世紀後半の所産である。142～145は土師器碗である。142は体部の1/4が残存している。復元口径17.8cmを測る。143～145は高台部が残存している。3点共に「ハ」の字形に聞く貼り付け高台で高台高が高い。146・147は黒色土器A類椀である。2点共に体部内面のヘラミガキは水平方向に丁寧に施されている。器面の炭素付着は内面全体と外面体部上半におよぶ。2点共に水戻された精良な胎土が使用されている。土師器甕は11点（148～158）を図化した。小形品の148・149と大形品の150～158がある。口縁部の下半をヨコナデすることにより体部との境に明瞭な稜線を持つ148・149・156～158と稜線を形成しない150～154がある。口縁端部は丸味を持って終わる148・149・154と内傾する面を持つものがある。159は復元口径22.7cm、器高10.0cmを測る土師器鉢である。体部は斜上方に伸びた後、口縁部近くで内湾するもので、端面は内傾する面を持つ。160・161は土師器羽釜の鍔である。162は「老」と記された墨書き土器である。墨書きの記された部分は土師器杯の底部外面と推定される。163は細長い口頭部と肩が稜角を呈する須恵器の長頸壺である。口縁部の一部を欠く以外は完存している。口径6.6cm、器高18.6cm、体部最大径11.7cmを測る。口縁部から体部にかけて自然釉、灰かぶりが認められる。底部は平底で、回転糸切り痕が認められるほか、「九」の墨書きが記されている。8世紀末の所産と考えられる。164は須恵器壺の口縁部である。165は須恵器の壺ないしは鉢の底部である。底部はあげて底で回転糸切りの痕跡を残す。166は須恵器高杯の脚部である。167は須恵器の鉢底部と考えられる。高台は貼り付け高台で高台高が高い。168～170は灰釉陶器である。168は高台付き皿である。口縁端部付近で外反し丸味のある端部を形成している。高台は垂直方向に高く、端部外側面は外傾する面を形成している。釉は内外面共に口縁部から体部中位に施されているが、全体に薄く均一でない。9世紀後半の所産と考えられる。169・170は共に小片であるが、おそらく椀形を呈するものと推定される。169は内外面に光沢のある淡灰緑色の釉が施釉されている。170は椀部の内底面が高台貼り付け位置からやや下がる形態を呈している。釉色は淡灰緑色で内底面に施釉されているが薄く均一でない。出土遺物の帰属時期については、163・166が8世紀末でその他は9世紀後半～10世紀前半を中心としたもので、前者が東側流路、後者が西側流路に関連した遺物と考えられる。

#### S D-15

S D-14と流路方向を同じくするもので、西肩はS D-14により切られている。検出長3.2m、幅3.55m、深さ0.14mを測る。埋土は青灰色シルト質粘土の單一層である。遺物は古墳時代初頭（庄内式期）～古墳時代前期前半（布留式期古相）に比定される土師器類が少量出土している。6点（171～176）を図化した。171～173は庄内式甕の小片である。甕B<sub>3</sub>にあたる。173の体部外面には左上がりのタタキの後、タテハケが施されている。174・175は高杯である。174は杯部中位で外折し、口縁部が大きく広がるもので高杯B<sub>2</sub>にあたる。杯部内底面の中央部が小さく窪む。175は杯部が斜上方に直線的に伸びるもので、高杯A<sub>4</sub>にあたる。176は小形鉢（鉢H<sub>2</sub>）の小片で



第34図 SD-15断面図



第35図 SD-15出土遺物実測図

ある。出土した土器組成からみて、造構の帰属時期は庄内Ⅲ期が考えられる。

#### S D-16

3調査区東部のII-22-6B地区で検出した。南北方向に伸びるもので、北部はSK-11に切られている。検出長1.15m、幅0.45m、深さ0.1mを測る。埋土は灰色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

#### S D-17

S D-16の東に並行して直線的に伸びる。検出長3.1m、幅0.5m、深さ0.16mを測る。埋土は灰色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

#### S D-18

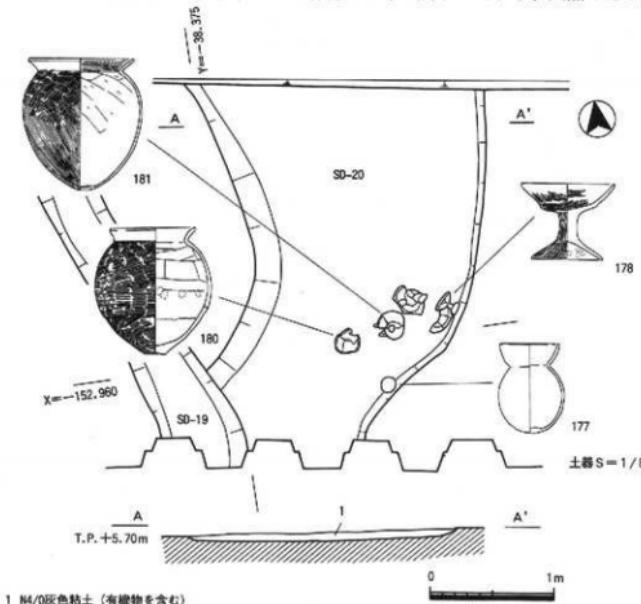
S D-17の東に並行して直線的に伸びる。検出長2.95m、幅0.68m、深さ0.1mを測る。埋土は灰色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

### SD-19

SD-18の東に並行して直線的に伸びるもので、南部でSD-20を切っている。検出長3.5m、幅0.7m、深さ0.14mを測る。埋土は灰色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

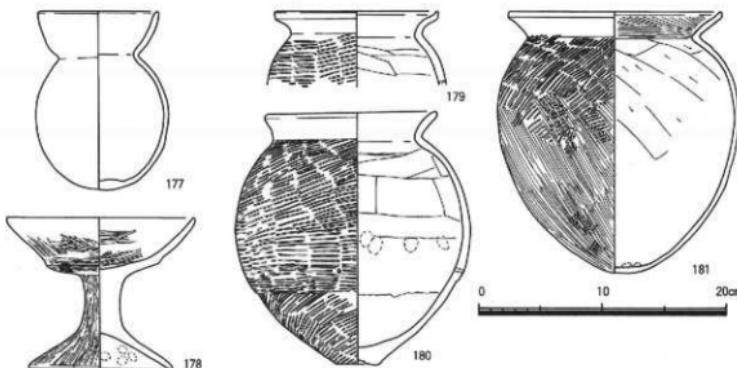
### SD-20

SD-19の東で検出した。検出部分では逆「く」の字状に屈曲しており、西端はSD-19に切られている。検出長3.15m、幅2.45m、深さ0.14mを測る。遺物は古墳時代初頭前半（庄内式期古相）に比定される土師器類が出土しており、東肩付近では完形品を含む土器類が集中する部分が認められる。これらの土器類を含めて、総数はコンテナ1箱分程度である。5点（177～181）を図化した。177は小形の短頸壺（短頸壺B）で完形品である。口径9.6cm、器高14.6cmを測る。やや雑な作りで、胎土には1～10mm程度の長石・チャート粒が散見される。非生駒西麓産である。178はやや小振りの高杯で、ほぼ完形に復元される。口径15.3cm、器高12.3cm、裾部径11.5cmを測る。杯部は段を有し斜上方に伸びる。脚部は屈折して開くもので柱状部は中実である。胎土は粗く1～3mm程度の長石・石英・チャート粒を多量に含んでいる。非生駒西麓産である。179・180は第V様式系壺（壺A<sub>2</sub>）である。180はほぼ完形に復元が可能で、口径13.5cm、器高20.8cm、体部最大径19.0cm、底部3.3cmを測る。体部は三分割成形に沿ってタタキ調整の方向を変えている。底部は突出しないドーナツ底である。体部の中位よりやや下に焼成前に小孔（3mm）が穿たれている。体部外面の煤付着は小孔位置から口縁部にかけて広がっており、火熱のため円形に剥



第36図 SD-20平面面図

離した部分が散見される。2点共に非生駒西麓産である。181は河内型庄内式壺の最古の形態(壺B<sub>1</sub>)を示す。ほぼ完形で口径17.0cm、器高21.5cm、体部最大径19.4cmを測る。体部は体部最大径が上位にあるもので、底部は小さな平底を呈する。体部外面のタタキは4本/cm程度でタタキの後タテハケを施す。体部内面は中位から屈曲部にかけてヘラケズリを行う。体部外面は熱による器面剥離が顕著である。生駒西麓産である。庄内Ⅰ期に比定される。



第37図 SD-20出土遺物実測図

#### SD-21

3調査区東部のII-22-6D地区で検出した。東西方向に伸びるもので、北部は調査区外に至り、西端はSK-12に切られている。検出部分で東西幅2.5m、南北幅0.6m、深さ0.13mを測る。埋土は灰色粘土の単一層である。遺物は出土していない。

#### SD-22

3調査区の東部で検出した。検出部分で「L」字状に伸びるもので、東西長3.3m、南北長2.5m以上、幅0.3~0.7m、深さ0.1mを測る。溝内の埋土は灰色粘土質シルトに灰色粘土がプロック状に入る不均質なものである。遺物は出土していない。2調査区の東部で検出したSD-16~SD-22のうち、SD-20を除く小溝については、久宝寺遺跡周辺で当該期を中心に検出されている畑作に関連した歓立て溝であった可能性が考えられる。

#### 小穴(SP)

#### SP-1

1調査区東部のI-25-4I地区で検出した。南部は調査区外に至る。検出部分からみて、円形を呈するものと推定される。検出部分で、東西幅0.79m、南北幅0.5m、深さ0.07mを測る。埋土は灰色粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

#### SP-2

1調査区東部のI-25-4J地区で検出した。東に隣接してSP-3がある。円形を呈するもので、径0.4m、深さ0.08mを測る。埋土は灰色粘土質シルトの単一層である。遺物は布留式壺

の小片が極少量出土しているが、図化できたものは無い。

#### S P - 3

S P - 2 の東に隣接している。円形を呈するもので、径0.37m、深さ0.09mを測る。埋土は灰色粘土質シルトの単一層である。遺物は庄内式壺の小片が極少量出土しているが、図化できたものは無い。

#### S P - 4

1 調査区東部の I - 25 - 4 J 地区で検出した。円形を呈するもので、東西径0.75m、南北0.78m、深さ0.16mを測る。埋土は2層で上層が炭を含む灰色粘土質シルト、下層が灰色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

#### S P - 5

1 調査区東部の I - 25 - 4 J 地区で検出した。S P - 6 を切っている。円形を呈するもので、東西径0.6m、南北径0.73m、深さ0.37mを測る。埋土は粘土質シルトを主体とする3層から成る。遺物は出土していない。

#### S P - 6

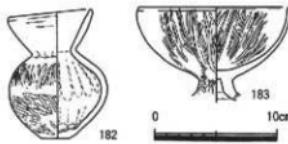
1 調査区東部の I - 25 - 4 J 地区で検出した。S P - 5 に切られている。検出部分で東西幅0.4m、南北幅0.65m、深さ0.28mを測る。埋土は2層で、上層が灰色砂質シルト、下層が灰色粘土である。遺物は庄内式壺の小片が1点出土したが、図化できたものは無い。

#### S P - 7

2 調査区東部の II - 21 - 5 D 地区で検出した。S D - 13 の底面で検出したが、S D - 13 出土遺物とは若干時期差が認められることから、S D - 13 の埋没後に構築されたものと推定される。円形を呈するもので、径0.6m、深さ0.24mを測る。埋土は上層が灰色シルト、下層が緑灰色シルト質粘土である。遺物は古墳時代初頭前半（庄内式期古相）に比定される土師器類が少量出土している。そのうち、図化したものは2点（182・183）である。182は小形の直口壺（直口壺B）で、底部は突出しない平底である。ほぼ完形品で口径6.8cm、器高10.2cm、底径2.4cmを測る。183は椀形の杯部を有する高杯（高杯C）である。口径12.3cmを測る。杯部内外面は縦方向のヘラミガキが施されている。2点共に浅黄橙色の色調で、胎土中に長石・石英・チャート粒が含まれている。これらの図化した遺物の他に、第V様式系壺、庄内式壺の小片が出土していることから勘案して、遺構の帰属時期は、古墳時代初頭前半（庄内式期古相）の庄内I期に比定される。



写真4 S P - 7 検出状況（北から）



第38図 S P - 7 出土遺物実測図

### 方形周溝墓（方形周溝墓）

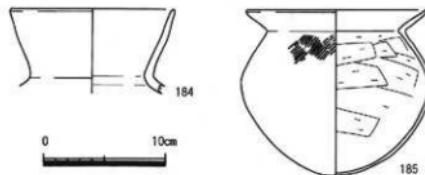
3調査区の中央部から西部で古墳時代前期前半（布留式期古相）に比定される方形周溝墓4基（1号方形周溝墓～4号方形周溝墓）を検出した。

#### 1号方形周溝墓

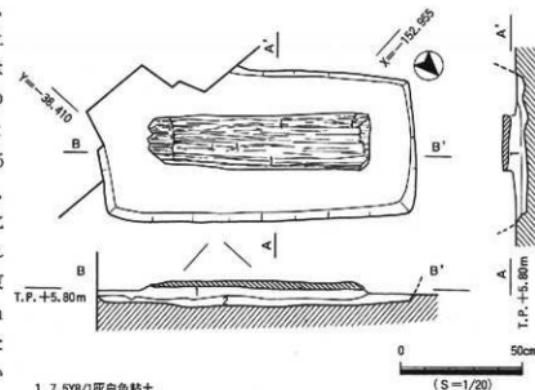
3調査区西部のII-21-6 H・I地区で検出した。主軸方向はN-37°-Wである。西周溝と南周溝を検出したのみで、全容は不明である。一辺の規模は、西辺からみて4.6m程度が推定される。墳丘の盛土は、第9層上面に19層10YR5/1褐色灰色粘土質シルトが盛られており、検出時点では0.1m前後が残存していた。主体部は検出されていない。周溝は西・南を検出した。検出部分で南周溝の端と西周溝の一部に陸橋部分がある。周溝幅0.4～0.6m、深さ0.05～0.17mを測る。周溝内の埋土は2層で、上層が灰色粘土、下層が明オリーブ灰色シルト質粘土である。遺物は周溝内から土師器等が極少量出土しているが、いずれも小片である。その他、南周溝と西周溝を区画する陸橋部付近からは、古墳時代前期前半（布留式期古相）に比定される庄内式壺1点（185）が出土している。2点（184・185）を図化した。184は直口壺（直口壺A）の口頭部の小片である。185はやや小振りの庄内式壺である。体部上位のみに細筋タタキ（6本/cm）を施すもので壺B<sub>4</sub>にあたる。生駒西麓産である。陸橋部分から出土した185を本造構に伴う供獻土器と推定すれば、1号方形周溝墓の構築時期は布留Ⅰ期が考えらえる。

#### 2号方形周溝墓

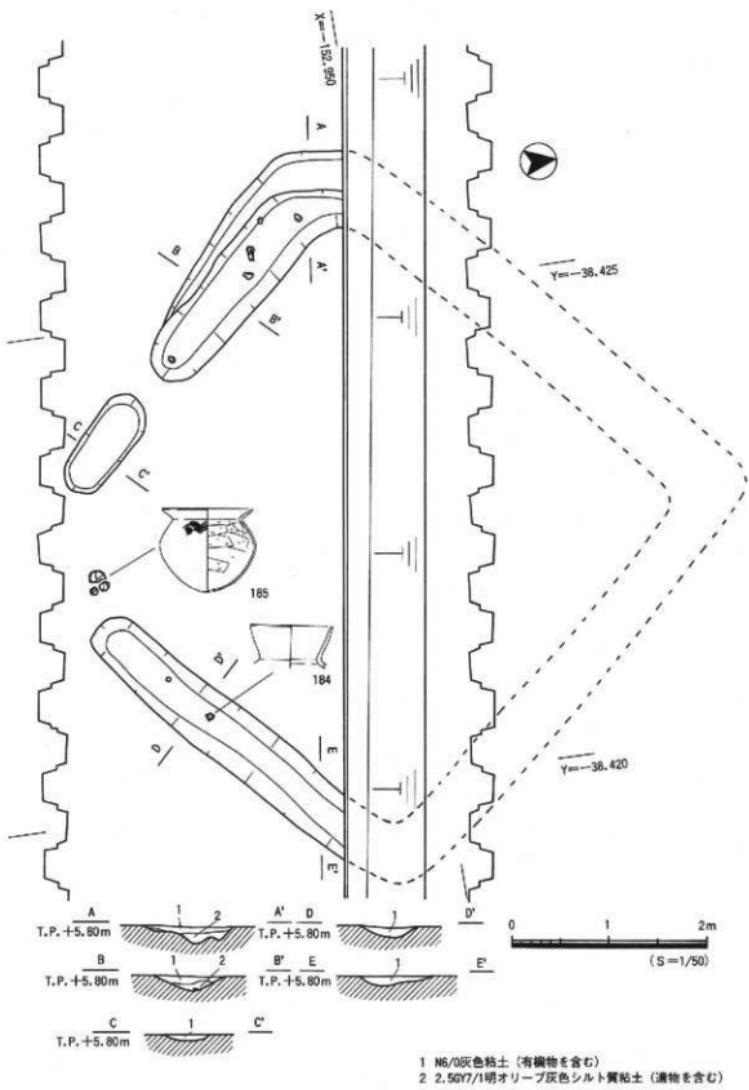
1号方形周溝墓の東側約5mで検出した。主軸は1号方形周溝墓と同様である。北・西の周溝の一部を検出したのみで、全容は不明である。図面上で推定される一辺の規模は7.5m前後を測る。墳丘の盛土は、1号方形周溝墓と同様で、層厚は最大で0.15mを測る。埋葬主体部は、墳丘のほぼ中央部分で南北軸に並行する形で検出された。埋葬主体部からは、東西幅0.62m、南北幅1.28mを測る掘方内に設置された木棺1基が検出されている。木棺は幅0.22m、長さ0.9m、厚さ0.03mを測る。



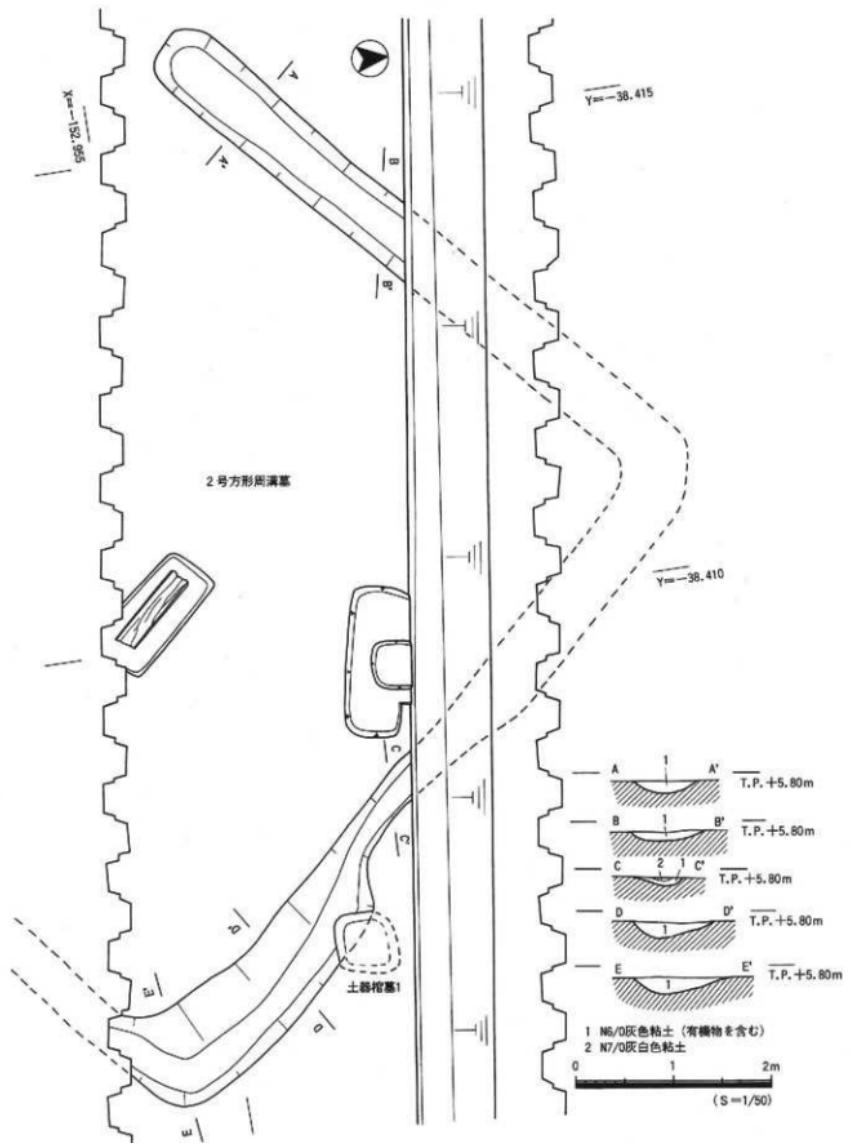
第39図 1号方形周溝墓出土遺物実測図



第40図 2号方形周溝墓主体部平面図



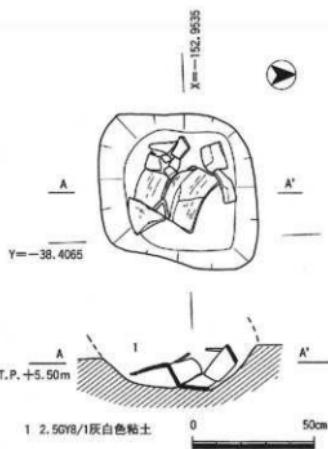
第41図 1号方形周溝墓平面図



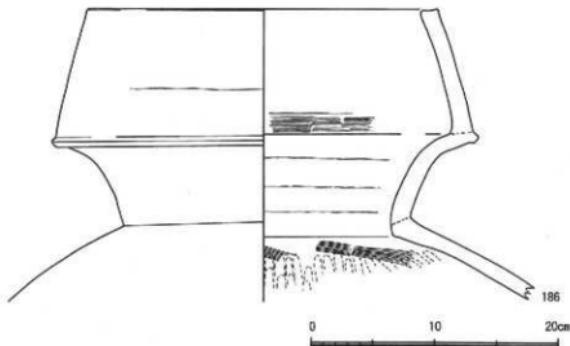
第42図 2号方形周溝基平面面図

底板187のみが残存していた。掘方内の埋土には灰白色粘土が使用されていた。木棺のサイズとしては小形であり、小児用と推定される。なお、この主体部の西側に隣接する部分からも僅かに白色粘土の広がりが確認されており、この埋葬主体部の南西側に並行して別の埋葬施設があった可能性が高い。周溝は北西部分に陸橋部を有する他、東周溝の途中で幅が狭くなる部分が認められる。周溝幅0.49～1.0m、深さ0.16mを測る。周溝内埋土は、一部を除けば灰色粘土の單一層である。遺物は周溝内から土師器の小片が2点出土しているのみで器種や帰属時期は明確でない。その他、東周溝の中央部よりやや南部の東肩部分で土器棺墓1基（土器棺墓1）が検出された。土器棺墓1は周溝が完全に埋没しない段階に構築されたもので、周溝底から東斜面に向かって斜めに掘方が掘られている。掘方の形状は不整方形で、幅

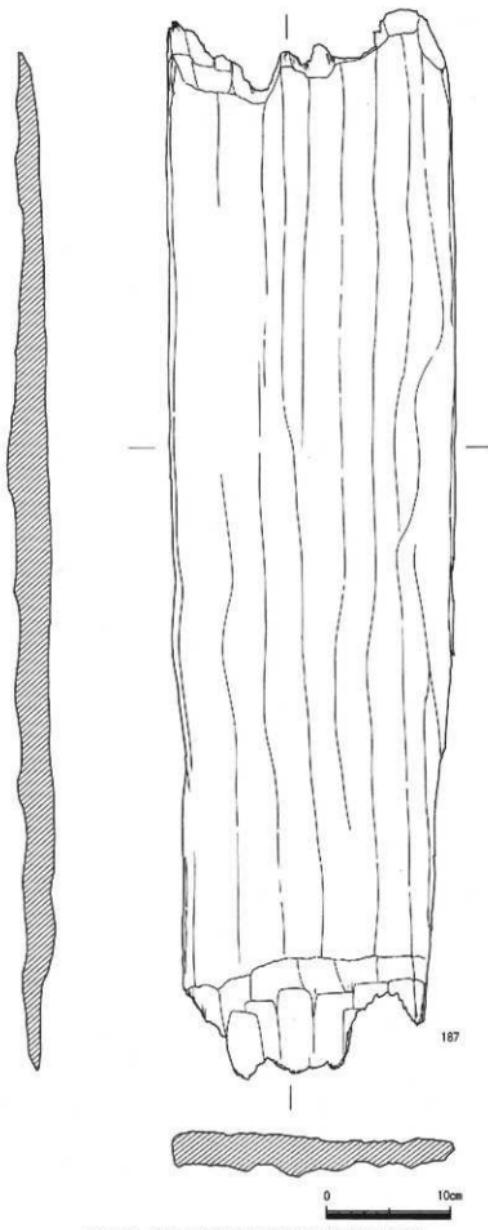
0.62m、深さ0.17mを測る。この掘方のほぼ中央部に、大形の複合口縁壺の口縁部を下にして土器棺として埋置している。186は土器棺墓に使用されていた複合口縁壺で、体部上半より上部が完存している。口径28.3cm、頸部最大径34.7cm、口頸部高16.9cmを測る。口縁部は内傾して直線的に伸びるもので、頸部との境に明瞭な段を形成する。形態的には西部瀬戸内の影響を受けたものであるが、本例は褐色系の色調で角閃石を多く含んでおり、生駒西麓産と考えられる。この土器は、古墳時代前期前半（布留式期古相）の布留I期に比定されるものであることから、2号方形周溝墓の構築時期もこれに近い時期が想定される。



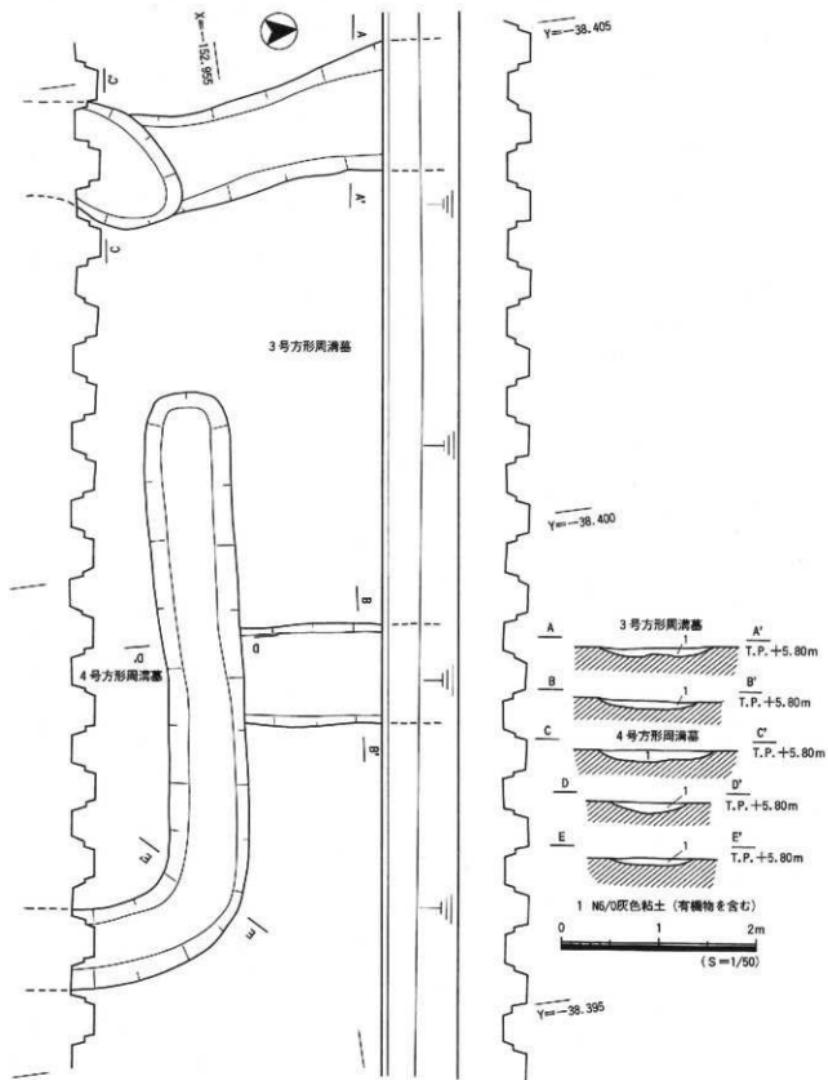
第43図 土器棺墓1平面面図



第44図 土器棺墓1に使用された複合口縁壺実測図



第45図 2号方形周溝墓主体部木棺底板実測図



第46図 3号・4号方形周溝基平面図

### 3号方形周溝墓

2号方形周溝墓の東に近接して検出された。主軸をほぼ南北方向に持つもので、1号方形周溝墓・2号方形周溝墓とは主軸を異にしている。検出部分では、東・西周溝の一部を検出したのみで、南部を4号方形周溝墓の北周溝に切られている。検出部分からみて、墳丘規模は一辺約4.7m程度が想定される。1号方形周溝墓・2号方形周溝墓でみられた盛土は認められない。周溝は幅1.2m、深さ0.08mを測る。埋土は灰色粘土の單一層である。遺物は出土していない。

### 4号方形周溝墓

3号方形周溝墓の南部を切るもので、北周溝と東周溝の一部を検出した。主軸方向は3号方形周溝墓とほぼ同様である。北周溝の西端に陸橋部分が存在しており、4号方形周溝墓の北周溝の西部が3号方形周溝墓の南周溝を再利用して掘削したとすれば、3号方形周溝墓の南周溝の西部に陸橋部が存在していたことが推定される。墳丘の規模は約7.1mが想定される。周溝は幅0.85m、深さ0.11mを測る。埋土は灰色粘土である。遺物は出土していない。

## 2) 遺構に伴わない遺物

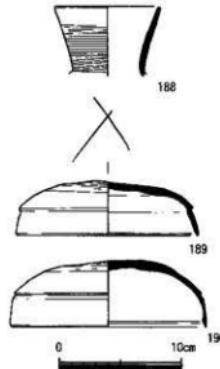
### ・第5層出土遺物

平面的に捉えていないため第5層出土遺物としたが、3調査区のII-22-6 A地区東端から6 B地区西端の断面観察で確認された珪片状遺構（21層）に伴う遺物と考えられる。須恵器3点（188～190）を図化した。188は提瓶の口頸部と考えられるもので、口径8.6cmを測る。口頸部外面にカキメ調整が施されている。焼成は堅緻で口頸部内外面に灰かぶりが認められる。189・190は杯蓋である。残存率は189が2/3以上、190がほぼ完形品である。189は口径14.8cm、器高4.5cm、190は口径16.0cm、器高5.4cmを測る。189の天井部外面に「×」のヘラ記号がある。焼成は189が不良、190が良好堅緻で、色調は前者が白灰色、後者が青灰色を呈する。TK10型式（6世紀中葉）の所産と考えられる。

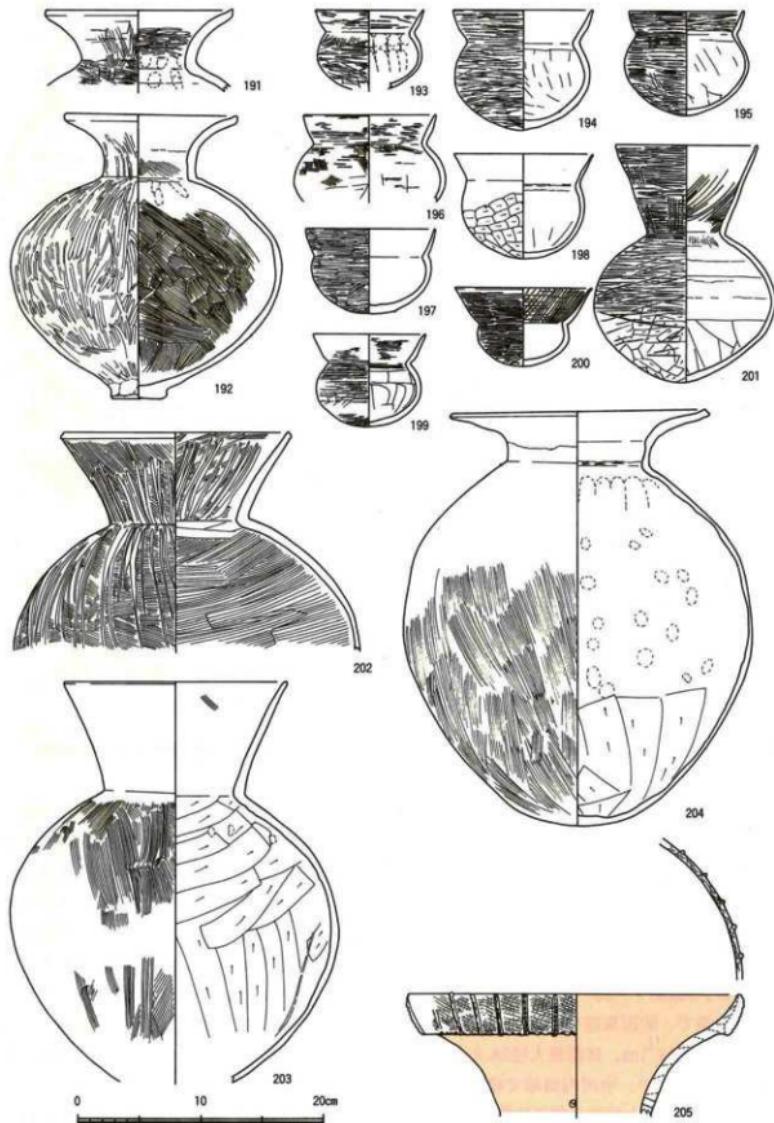
### ・第8層出土遺物

#### 1調査区 第8層出土遺物

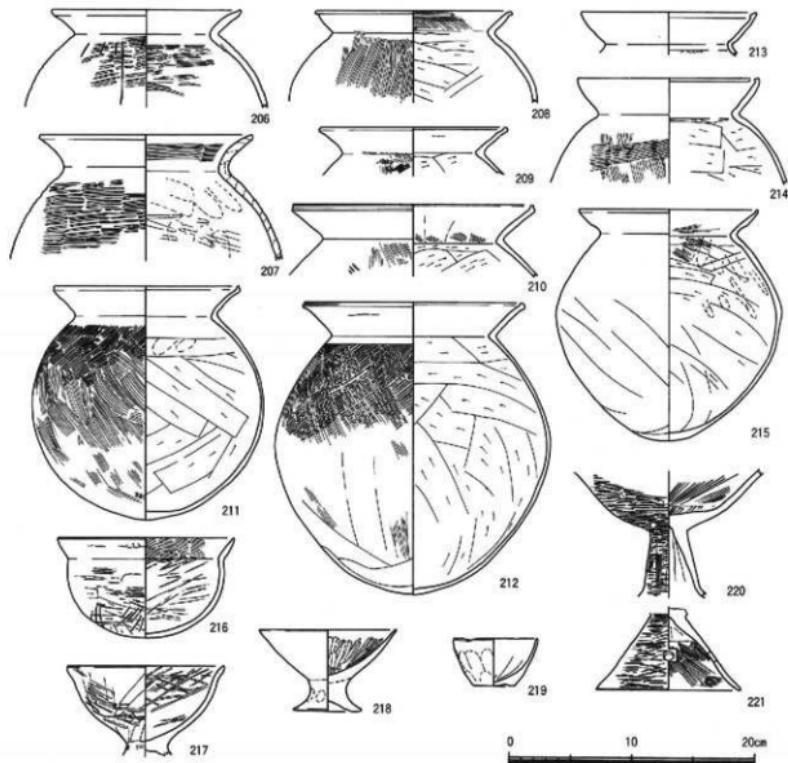
1調査区の第8層出土遺物は、一部を除けば調査区の中央部から西部にかけてのI-25-2 B、3 D、3 F、3 G地区から出土している。31点（191～221）を図化した。191・192は広口壺である。口頸部が外反気味に伸びる191が広口壺A、頸部が直上に伸びた後口縁部が大きく外反する192が広口壺Bにあたる。192は半分以上が残存しており口径14.0cm、器高23.3cm、体部最大径22.2cm、底径4.0cmを測る。191がI-25-2 B地区、192がI-25-3 F地区出土。小形丸底壺は8点（193～200）図化した。体部最大径が口径を凌駕するものや口径と体部最大径がほぼ等しい193～196が小形壺B<sub>1</sub>、口径が体部最大径を凌駅する197～199が小形壺B<sub>2</sub>、半円形の体部に大きく開く口縁部が付く200が小形壺B<sub>3</sub>に分類される。全て精製品で、体部外面にヘラケズリを行う198以外は横方向の密なヘラミガキを行う。200の口縁部内面には放射状のヘラミガキが施されている。193・195がI-25-2 B地区、196～198がI-25-3 F地区、194がI-25-3 G地区、



第47図 22-3調査区  
第5層出土遺物実測図



第48図 22-1 調査区 第8層出土遺物実測図その1



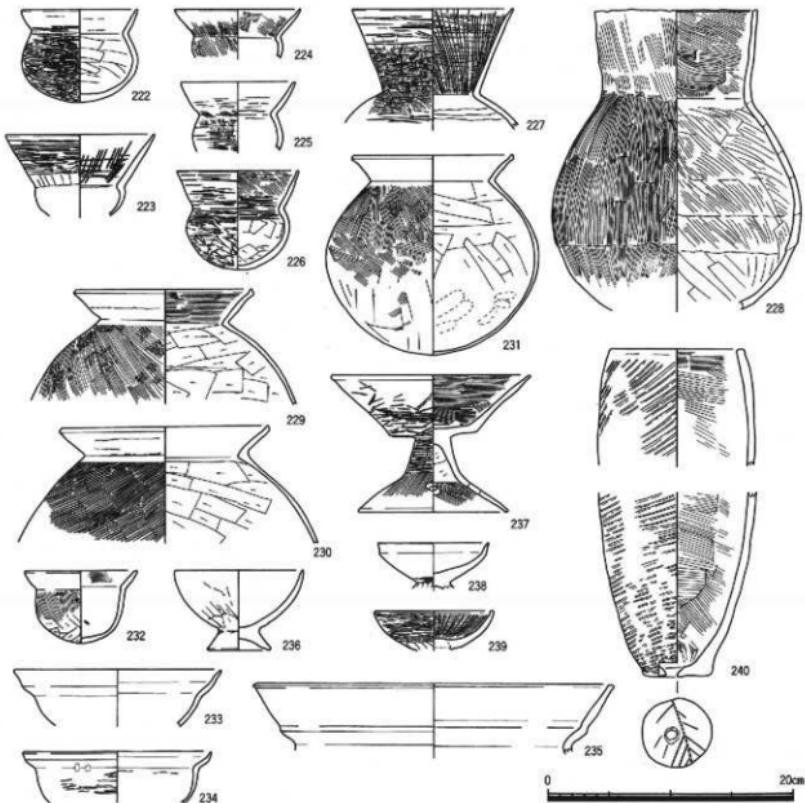
第49図 22-1 調査区 第8層出土遺物実測図その2

200がI-25-4丁地区から出土している。201は精製品の直口壺で、直口壺A<sub>1</sub>にあたる。202・203は大形直口壺Aに分類される。202が体部中位以下、203が底部を欠損する。202は調整を含めて全体に丁寧な作りで、胎土においても石英が極少量含まれる程度の精良なものが使用されている。焼成は良好で浅黄橙色の色調を呈する。203は当該期の中河内地域において普遍的に見られる大形直口壺で、河内型の庄内式甕と同様、角閃石を含み褐灰色の色調を呈する生駒西麓産のものである。底部から体部中位にかけて煤が認められたため、煮炊き具としての機能を果たしたようである。202がI-25-3D地区、203がI-25-2B地区出土。204は口縁端部が三角形を呈する広口壺で、四国東部を中心に分布する広口壺D<sub>3</sub>にあたる。ほぼ完形に復元が可能で、口径20.8cm、器高34.1cm、体部最大径28.8cmを測る。205は口縁部外面に幅広の端面を持つ南関東系の広口壺の小片で、中河内地域で確認された南関東系上器としては初例で唯一のものである。口縁部外面および上端面に網目状燃糸文と下端面にキザミ目を施した後、端面にキザミ目を施す棒状浮文が縦位に貼り付けられている。口縁部内面および頸部外面には縦方向に微細なミガキ状

の痕跡を残して塗布された赤色顔料が認められる。塗布されている赤色顔料は、頸部内面の中位以下が不鮮明である以外は比較的の残りは良い。頸部下半に焼成前に穿たれた孔（5mm）が残存部分で2個確認され、その位置からみて本来は四分割する位置に4個が存在していたものと推定される。この土器については、江戸川流域を中心とした下総地域と荒川右岸下流域の東京都北区付近を中心とした南関東を中心として分布が認められている。南関東地域における縄年では、布留式期古段階を中心とするものとされている。本例は包含層出土ではあるものの、共伴遺物からみて時期的にも矛盾するものでない。I-25-2B地区出土。206・207は第V様式系甕である。共にI-25-2B地区出土。208は体部外面が縦位のハケ調整によるもので、布留式影響の庄内式甕に分類される甕Dにあたる。I-25-2F地区出土。209・210は共に庄内式甕の小破片である。甕B<sub>4</sub>にあたる。共に2B地区出土。211・212は庄内式甕B<sub>4</sub>にあたる。211は中形で口径15.0cm、器高19.3cm、体部最大径18.8cmを測る。212は大形で口径17.6cm、器高24.1cm、体部最大径22.3cmを測る。共に生駒西麓産で、I-25-3D地区出土。213・214は布留式甕で甕F<sub>1</sub>にあたる。213がI-25-2B地区、214がI-25-3F地区出土。215は庄内式甕の形態を呈するものであるが、体部外面の調整はこの器種としては稀なナデによるものである。外面に煤の付着が認められない。非生駒西麓産である。I-25-3F地区出土。216は半円球の体部に小さく上外方へ伸びる口縁部が付く小形鉢である。鉢G<sub>1</sub>にあたる。体部外面の上半以下にヘラケズリが行われている。I-25-2B地区出土。台付き鉢は2点（217・218）を図化した。共に小形品で逆円錐状の体部に高台が付く。217は高台部を欠損する。口縁部が屈曲する217が台付き鉢A<sub>1</sub>、直口の口縁部を持つ218が台付き鉢A<sub>2</sub>にあたる。217がI-25-2B地区、218がI-25-3D地区出土。219はミニチュアの鉢である。口径6.8cm、器高3.9cm、底径3.7cmを測る。口縁部は未整形で波状口縁を呈し、底部はあげ底である。I-25-2B地区出土。220は杯部口縁部と体部の境に沈線状の段を形成する高杯である。高杯A<sub>4</sub>にあたる。I-25-2B地区出土。221は小形器台の脚部である。円孔は4孔と推定される。I-25-2B地区出土。包含層からの出土であるため時期幅のある資料と考えられるが、大半が古墳時代前期前半（布留式期古相）の布留Ⅰ期を中心とする。

## 2 調査区 第8層出土遺物

2調査区の第8層出土遺物は全域から出土している。19点（222～240）を図化した。222～226は小形丸底甕である。222・226がほぼ完形で、他は1/4程度が残存している。口径と体部最大径がほぼ等しい222が小形甕B<sub>1</sub>、半球形の体部に大きく開く口縁部が付く223・224が小形甕B<sub>3</sub>、球形の体部にやや長い口縁が付く225・226が小形甕B<sub>4</sub>にあたる。222・223がII-21-5D地区、224がII-21-4・5C地区、225・226がII-21-5B地区出土である。227は直口甕で口径13.1cm、口頸部高7.0cmを測る。直口甕A<sub>1</sub>にあたる。口頸部内面に放射状にヘラミガキを施す。II-21-4・5B地区出土。228は下膨れで体部下半に最大径を持つ体部から、ほぼ直上方に口頸部が伸びる直口甕である。口縁端部は未整形で凹凸が目立つもので、類例は少なく搬入品と考えられる。II-21-5D地区出土。229・230は庄内式甕である。甕B<sub>4</sub>にあたる。229がII-21-4・5B地区、230がII-21-5D地区出土。231は約1/2が残存している。体部外面はハケメ調整が行なわれているもので、布留式影響の庄内式甕に総称される甕Dにあたる。II-21-5D地区出土。232は球形の体部に斜上方に伸びる小さな口縁部が付く小型の鉢である。体部上位に初の圧痕が認められる。鉢Fに近い器種と考えられる。II-21-4・5C地区出土。233・234は二段に

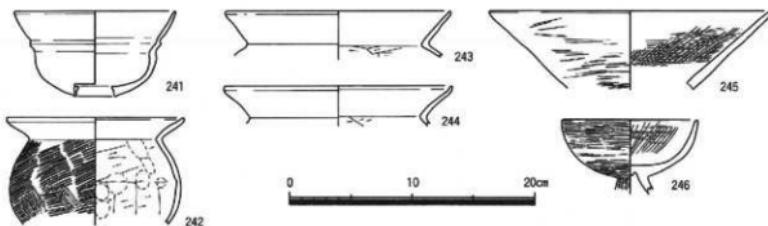


第50図 22-2調査区 第8層出土遺物実測図

屈曲する口縁部を有する小形の鉢（鉢II<sub>2</sub>）である。233が精製品、234がやや粗製品である。233がII-21-5 D地区、234がII-21-4・5 C地区出土。235は口縁部が二段に屈曲する大形鉢の口縁部である。鉢I<sub>2</sub>にあたる。形態的には山陰地方を中心に分布する鉢に類似するが、胎土や色調の特徴から生駒西麓産と推定される。II-21-5 D地区出土。236は楕形の体部に高台が付く台付き鉢である。台付き鉢A<sub>2</sub>にあたる。II-21-5 D地区出土。237は小形の高杯で杯部の半分が欠損する以外は完存している。高杯A<sub>4</sub>にあたる。5 D地区出土。238・239は小形器台の受部である。口縁端部は小さく外反して尖り気味で終わる238と口縁端部が小さく肥厚して終わる239がある。共にII-21-5 D地区出土。240は胴長で筒状の体部にわずかに突出する底部が付く底部有孔土器である。底部には焼成前に孔が穿たれている。底部裏面には木葉の圧痕が残る。色調は灰白色で、胎土は精良である。真蛸壺の可能性がある。II-21-5 D地区出土。小形丸底壺の形態からみて、布留式期でも古相に位置付けられる布留I期～布留II期の資料と考えられる。

### 3 調査区 第8層出土遺物

3調査区では集落域が拡大する古墳時代前期前半（布留式期古相）において、墓域を形成していたため第8層中の出土遺物は極少量出土したのみである。6点（241～246）を図化した。241は二段に屈曲する台付き小形鉢である。底部の孔については、脚部の挿入部分とも理解されるが1号方形周溝墓の周辺から出土したことや、断面が平滑で内外面と同様の風化状況を示すことから、底部穿孔土器の可能性がある。242は小形の庄内式壺である。体部下半を欠くが分割成形に沿ったタタキ調整の後に縱方向にハケを装飾的に配するもので、庄内式期古相に盛行する庄内式壺（壺B<sub>1</sub>）の特徴を示している。生駒西麓産である。1号方形周溝墓を検出したII-21-6H地区から出土しているが、1号方形周溝墓の構築時期が布留I期であるためそれよりは以前のものである。243・244は庄内式壺の口縁部の小片である。共にII-21-5・6G地区出土で生駒西麓産である。245は高杯の杯部の小片である。高杯A<sub>4</sub>にあたる。246は椀形の杯部を持つ高杯で、杯部は完存している。高杯C<sub>2</sub>にあたる。245・246は1号方形周溝墓を検出したII-21-6H地区からの出土で、布留I期に盛行する器種で1号方形周溝墓に関連した遺物の可能性がある。



第51図 22-3調査区 第8層出土遺物実測図

#### 註記

##### 註1

南関東系の土器については、本調査研究会の西村公助氏を介して埼玉県富士見市教育委員会の小出輝雄氏からご教示および資料の提供を受けた。両氏に対して記して感謝の意を表したい。

##### 参考文献

- ・古式土師器  
原田昌則 1993 「第5章 まとめ 3) 中河内地域における庄内式から布留式土器の権年試案」『II久宝寺遺跡(第1次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告37 (財)八尾市文化財調査研究会  
田島明人 1986 「漆町遺跡Ⅰ」石川県立埋蔵文化財センター
- ・須恵器  
田辺昭三 1966 「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園考古学クラブ  
・古代の土師器  
奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原官発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財調査研究所学報第32冊  
古代の土器研究会編 1992 「古代の土器Ⅰ 都城の土器集成」  
古代の土器研究会編 1993 「古代の土器Ⅱ 都城の土器集成」  
佐藤 隆 1992 「平安時代における長原遺跡の動向」「長原遺跡発掘調査報告V」(財)大阪市文化財協会

## 第4章 まとめ

今回の調査では、狭長なトレンチ調査であったにも拘わらず、古墳時代初頭前半（庄内式期古相）・古墳時代初頭後半（庄内式期新相）～前期前半（布留式期古相）・平安時代前期・近世～近代にわたる遺構・遺物が検出され、久宝寺遺跡の西部で新たな知見を加える結果となった。以下、周辺で実施された既往調査の調査成果を踏まえて、各当該時期の集落を概観する。

### ・古墳時代初頭前半（庄内式期古相）

当該期の遺構は、居住域に関連したものが1調査区の西部から3調査区の西部にかけての東西約100mの範囲で検出されている他、3調査区の東部では生産域を構成する小溝群が検出されている。当該期の居住域は、1調査区の南に隣接する第27次調査（KH99-27）の他、西側に近接する位置で実施された近畿自動車道に伴う亀井北（その1）のA地区およびB地区の北部で竪穴住居を主体とする居住域が検出されており、これらを含めて居住域が東西に200m以上にわたって展開したことが推定される。生産域としては、3調査区の東部のほか、東接する第23次調査（KH97-23）の3調査区で畑作に関連した小溝群が検出されている。久宝寺遺跡一帯の当該期の調査では、本例のように畑に伴うものと推定される多条の小溝群が随所で検出されている。これらの小溝群の上部では、土壤化が顕著で黒色～黒褐色を呈する分厚い耕作土層が形成されているのが一般的である。耕作土層の形成については、畑作に関わる混層耕法の一環としての「天地返し」や多条の「歓立て溝」の開削等が推定されており、今後これらの畑耕作上層下に残存する小溝群の性格や栽培作物の特定が急務である。墓域としては、調査地の南西で実施された亀井北（その1）の第8c遺構面（古墳時代前期IV）で検出された4基の方形周溝墓のうち2号墓～4号墓との有機的な関係が推定される。

### ・古墳時代初頭後半（庄内式期新相）～前期前半（布留式期古相）

当該期の居住域に関連した遺構としては、1調査区の西端から2調査区の中央部にかけての範囲で確認されている。墓域としては3調査区で検出された1号方形周溝墓～4号方形周溝墓がある。これまでに中河内地域において行われた、古墳時代初頭（庄内式期）～前期（布留式期）を対象とした調査では、当該期に集落の増加と分散化が顕著であることが確認されている。久宝寺遺跡内でも同様の傾向で推移しており、数多くの集落の成立を見ている。調査地の北部では、第13次調査（KH91-13）・第18次調査（KH94-18）・久宝寺南（その2）のH地区で居住域、加美遺跡（KM84-1）・久宝寺南（その2）のF地区で墓域が検出されている。一方、調査地の南部では、亀井北（その2）のD地区で掘立柱建物、第9次調査（KH91-9）では竪穴住居で構成される居住域が検出されており、その中の2棟の竪穴住居内からは重闊文鏡と素文鏡が出土している。墓域としては亀井北（その2）E地区において、当該期に比定される方形周溝墓5基が検出されている。

### ・平安時代前期

当該期の遺構としては、散発的に検出された粘土採掘坑の性格を持つ土坑（SK-1・SK-11・SK-12）以外では、3調査区の西部で検出されたSD-14が唯一の遺構である。内部からは、比較的良好な土器類が検出されており、断面観察および出土遺物から8世紀末と9世紀後半

～10世紀前半の二時期にわたる溝と推定される。調査地内では同時期の遺物を含む包含層の形成は確認できなかったが、東接する第23次調査（KH97-23）の3調査区で平安時代初頭の井戸が検出されており、本造構より東部に集落が展開したようである。

#### ・近世～近代

1 調査地の西部で2基の井戸（SE-1・SE-2）を検出した。その内、SE-2は、井戸用瓦枠と桶枠を井戸側に使用する農耕用井戸である。中河内地域では、大和川の付け替えが行われた宝永元年（1704）以降、繩文栽培の普及に伴って耕地形態が「島畑」と呼ばれる田畠混在の農地形態に変化しており、島畑部分を中心としてこの様な形態の農耕用井戸が近世中期以降から近代初頭にかけて盛んに造られたようである。これらの井戸は、竜華操車場の操業が開始される昭和13年以前までは、その機能を果たしていたものと推定される。

#### 註記

##### 註1

佐藤甲二 2000 「畠跡の耕作痕に関する問題点と今後の課題－仙台市域の調査事例をとおして－」シンポジウム「はたけ」の考古学 日本考古学協会2000年度大会 研究発表要旨 日本考古学協会

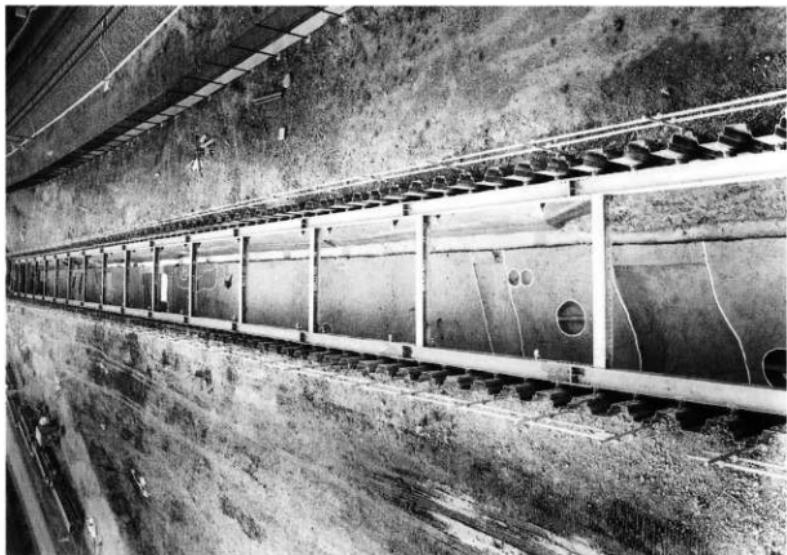
#### 参考文献

- ・田中清美 1986 「加美遺跡の検討」「古代を考える43」
- ・瀬和夫他 1987 「久宝寺南（その2）」（財）大阪文化財センター
- ・服部文章他 1986 「亀井北（その1）」（財）大阪文化財センター
- ・奥 和之助 1986 「亀井北（その2）」大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
- ・成海佳子 1992 「13. 久宝寺遺跡第9次調査（KH91-9）」「平成3年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告」（財）八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 1992 「17. 久宝寺遺跡第13次調査（KH91-13）」「平成3年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告」（財）八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子 1992 「久宝寺遺跡の調査概要」「大阪府下埋蔵文化財研究会（第25回）資料」
- ・坪田真一 1995 「8. 久宝寺遺跡第18次調査（KH94-18）」「平成6年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告」（財）八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 1995 「久宝寺遺跡出土の朝鮮半島系土器について」「大阪府下埋蔵文化財研究会（第31回）資料」
- ・原田昌則 1998 「10. 久宝寺遺跡第23次調査（KH97-23）」「平成9年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告」（財）八尾市文化財調査研究会
- ・大野 熊 1989 「島畑の考古学的調査－大阪府池島遺跡の事例－」「郵政考古紀要15」郵政考古学会
- ・西村公助 2000 「10. 久宝寺遺跡第27次調査（KH99-27）」「平成11年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告」（財）八尾市文化財調査研究会

# 図 版



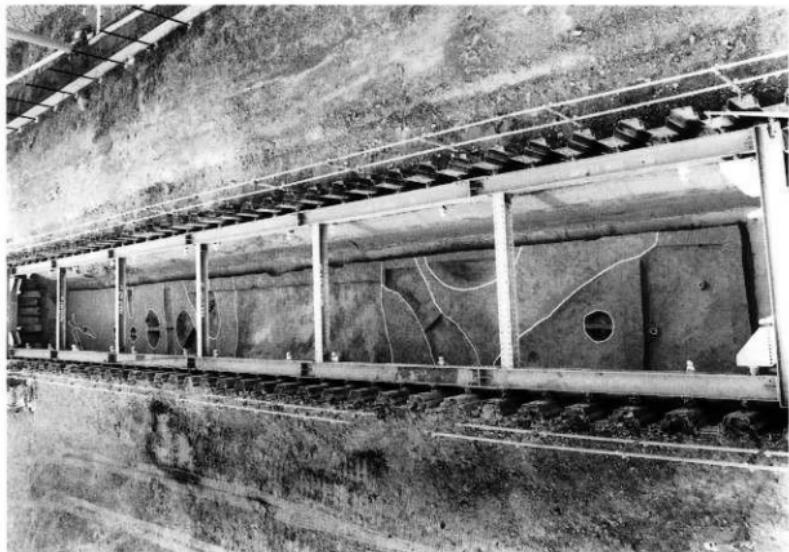
調査地を含む旧国鉄竜華操車場跡地全景（上が東）



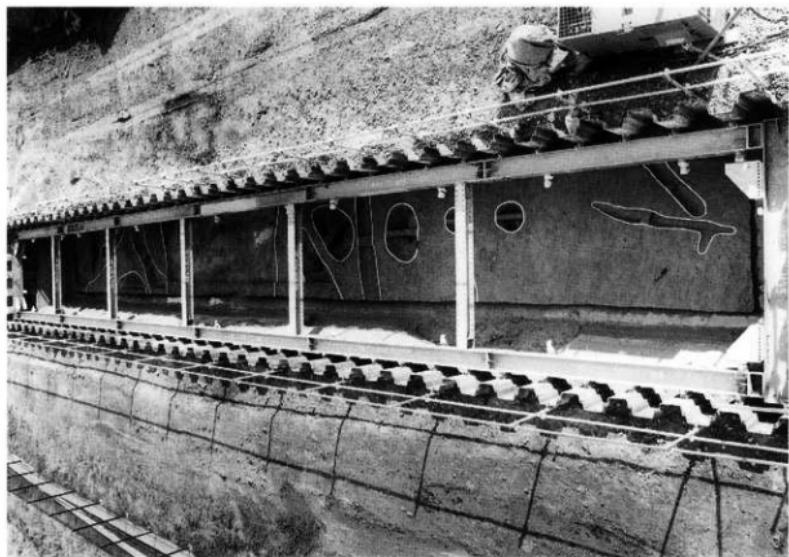
22-1 調査区全景（東から）



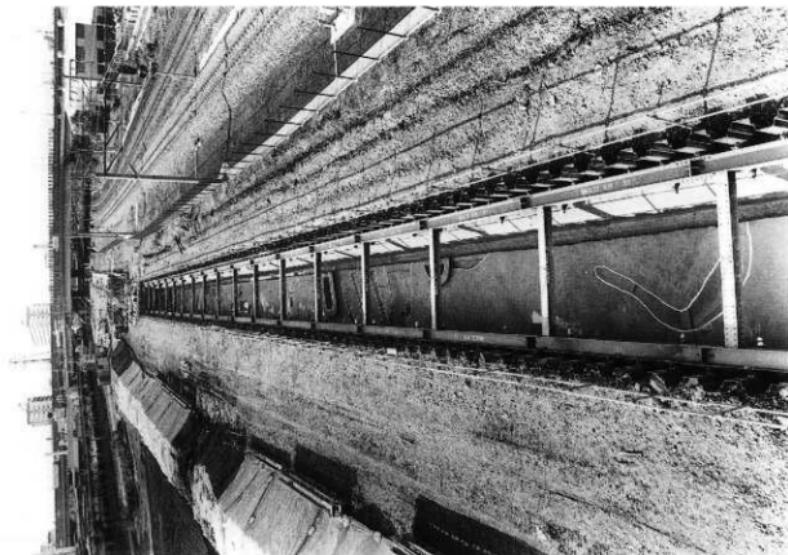
22-1 調査区全景（西から）



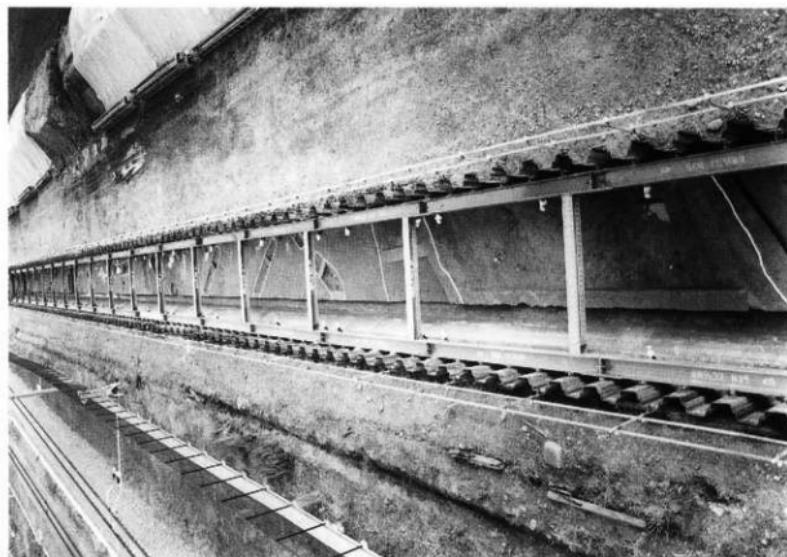
22-2 調査区全景（東から）



22-2 調査区全景（西から）



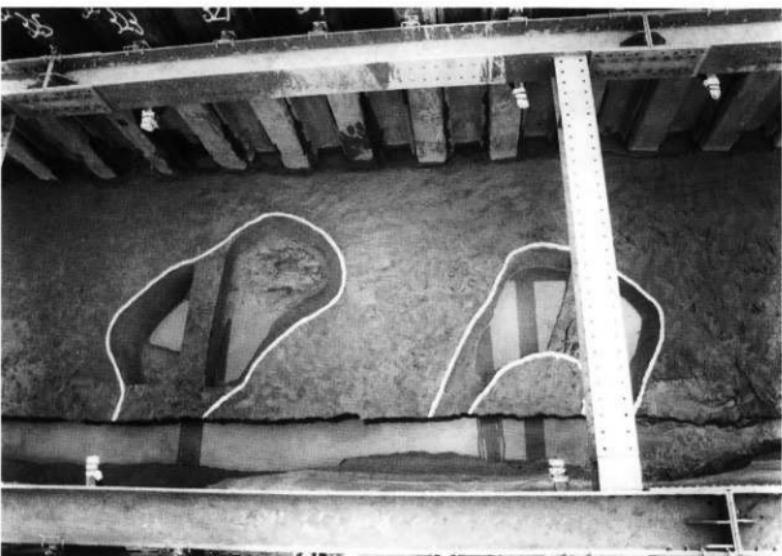
22-3 調査区全景（東から）



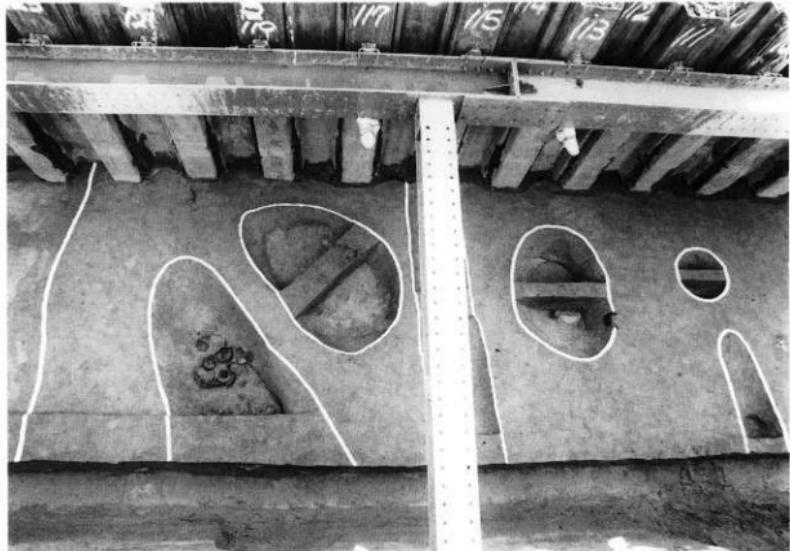
22-3 調査区全景（西から）



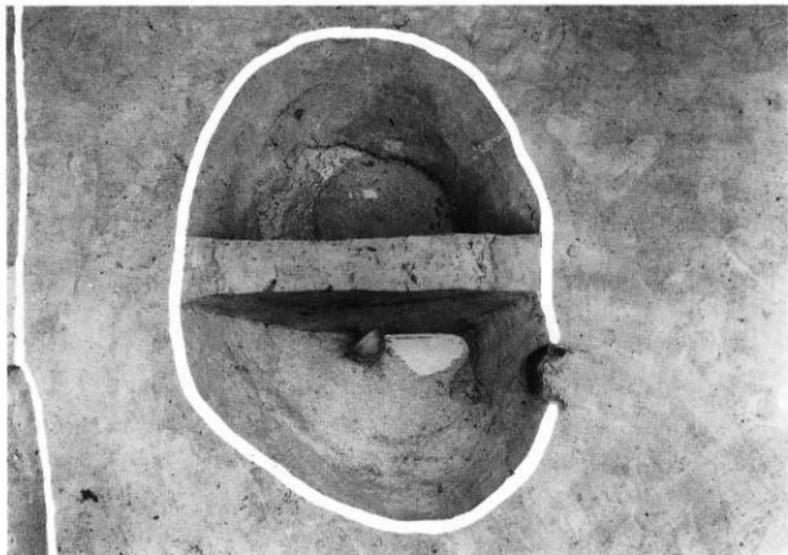
SK-1 検出状況（北から）



SK-2(右)、SK-3(左) 検出状況（北から）



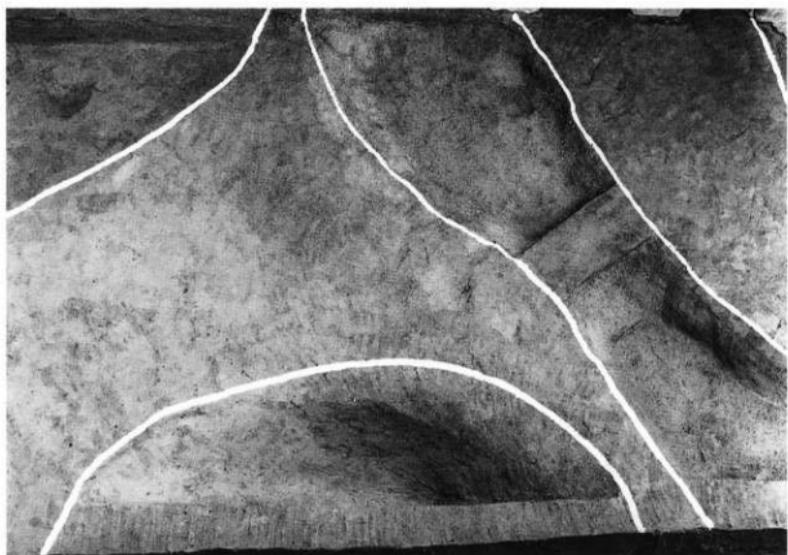
SK-6～SK-9他検出状況（北から）



SK-7検出状況（北から）



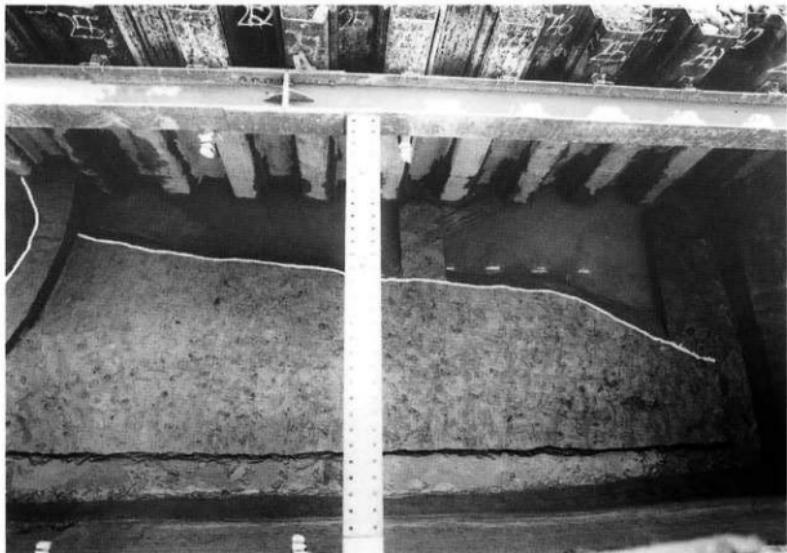
SK-9 検出状況（北から）



SK-10(下)、SD-12(右) 検出状況（北から）



SK-12(中央)、SD-21(左)検出状況（北から）



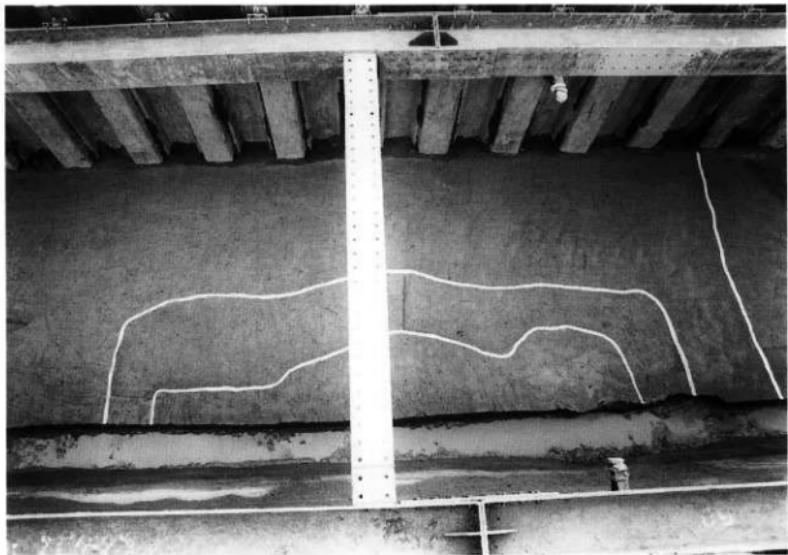
SD-1 検出状況（北から）



SD-2 検出状況（北から）



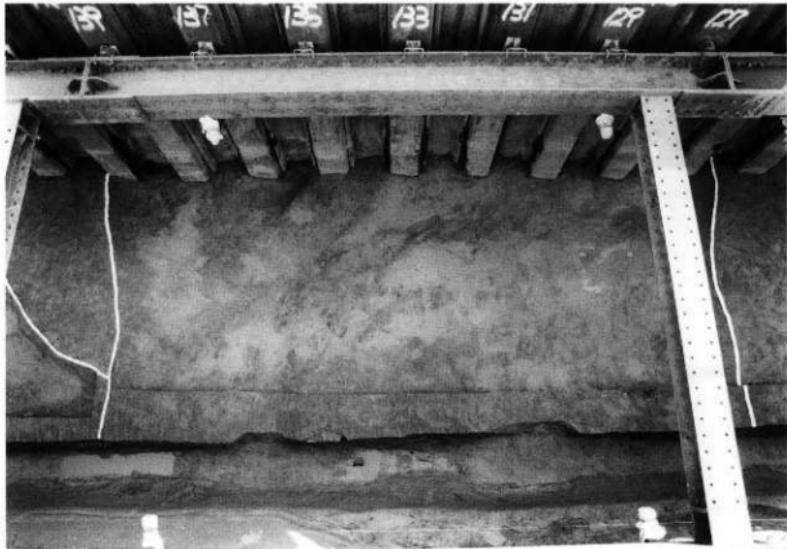
SD-3 検出状況（北から）



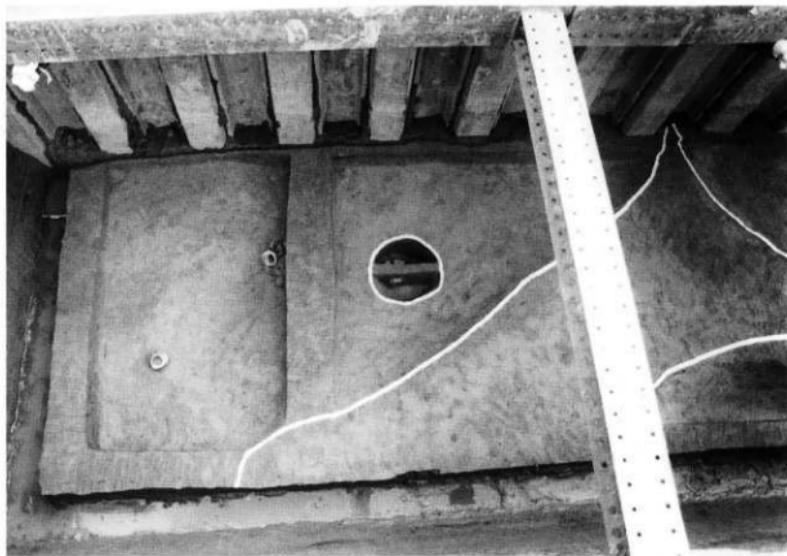
SD-4 検出状況（北から）



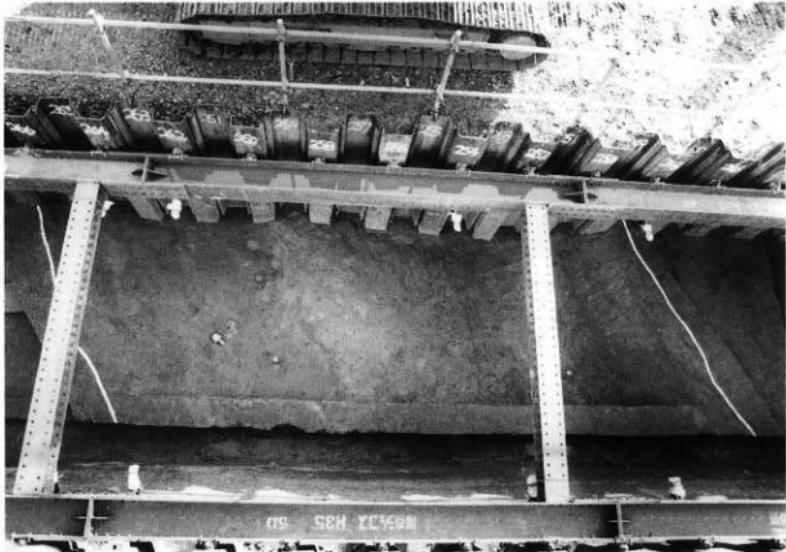
SD-5(左)・SD-6(中央)、SP-2～SP-6(右から) 検出状況（北から）



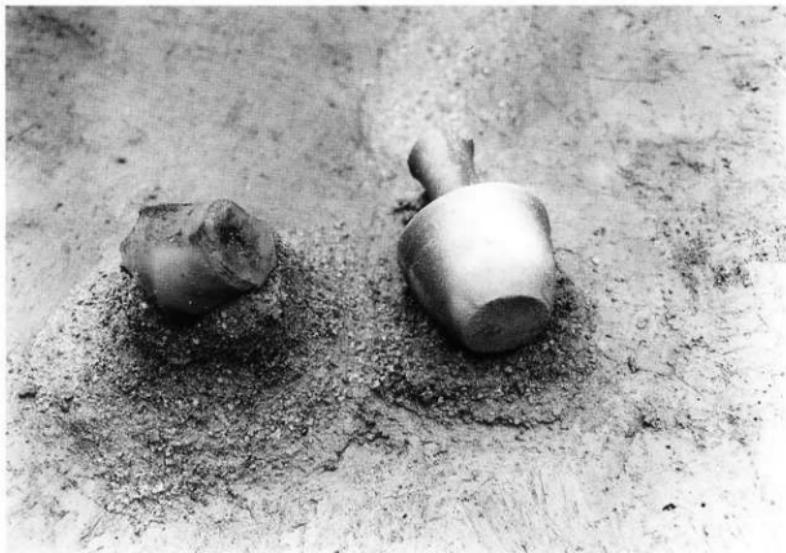
SD-11検出状況（北から）



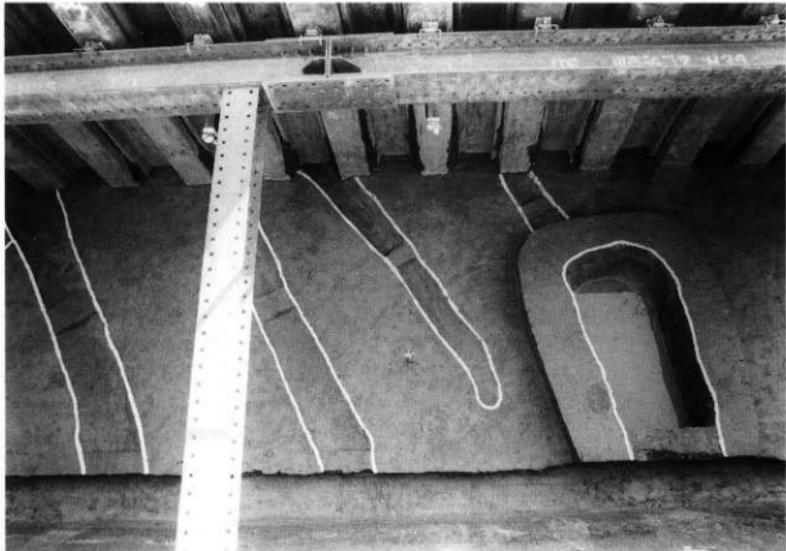
SD-13検出状況（北から）



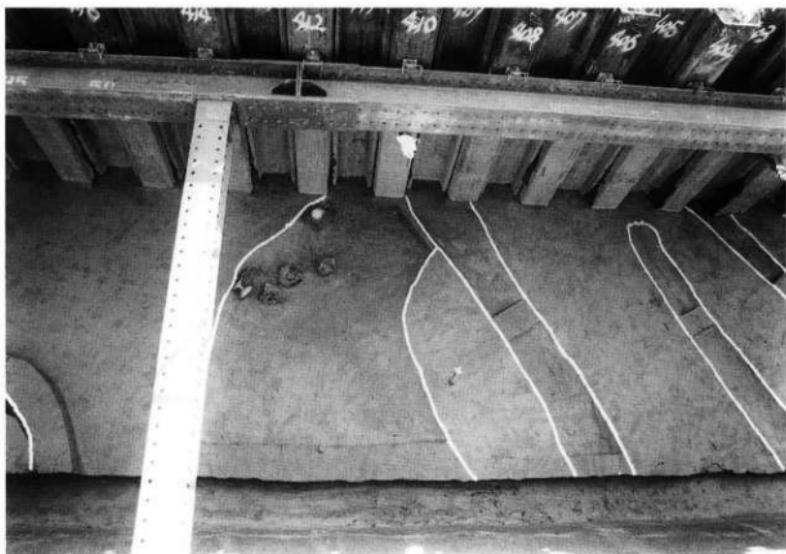
SD-14検出状況（北から）



SD-14遺物出土状況（南から）



S K -11(右端)、S D -16～S D -19(右から) 検出状況 (北から)

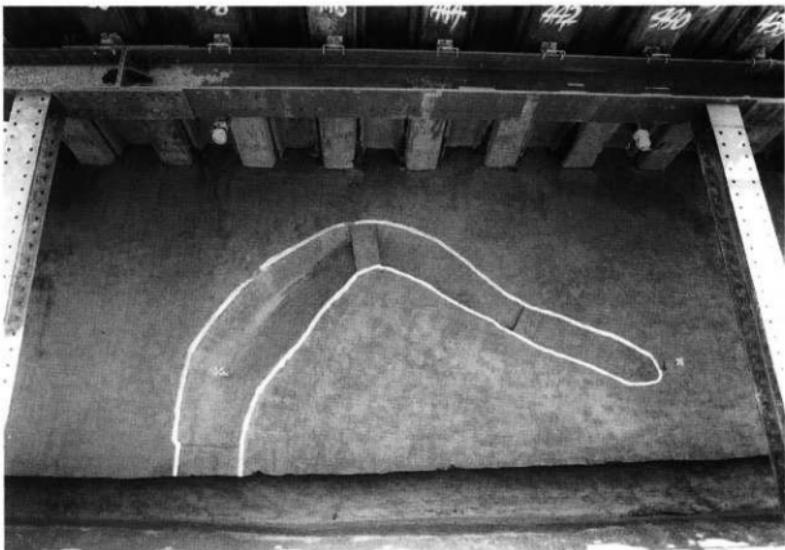


S D -17～S D -20(右から) 検出状況 (北から)

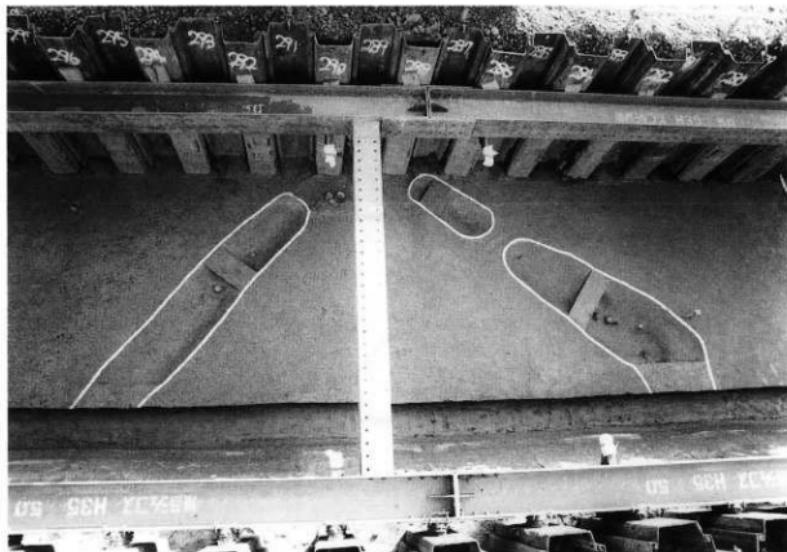
図版一四



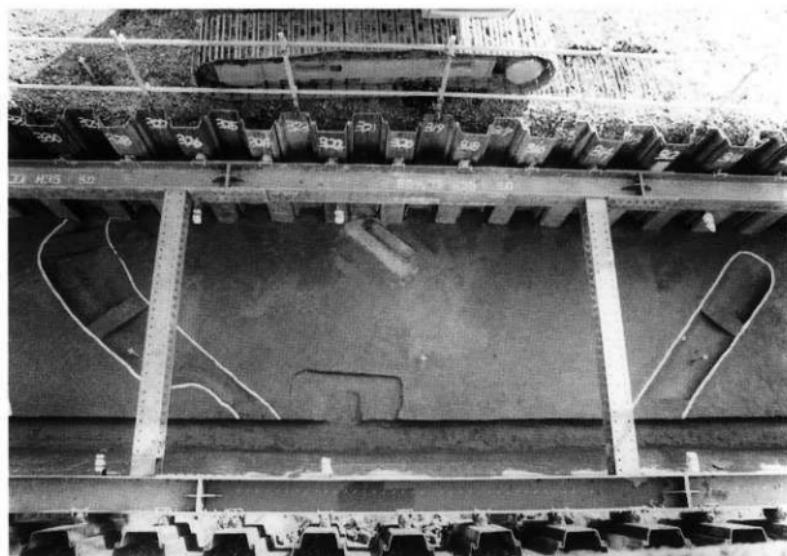
SD-20遺物出土状況（北から）



SD-22検出状況（北から）



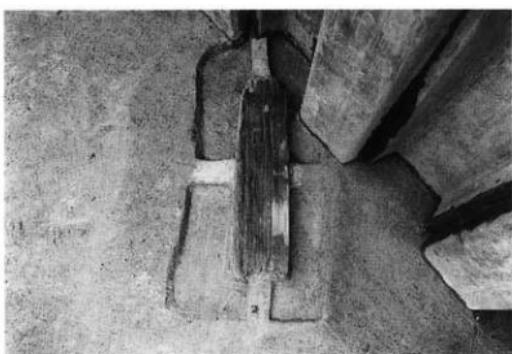
1号方形周溝基検出状況（北から）



2号方形周溝基検出状況（北から）



2号方形周溝墓主体部検出状況（北西から）



2号方形周溝墓主体部掘方掘削状況（北西から）



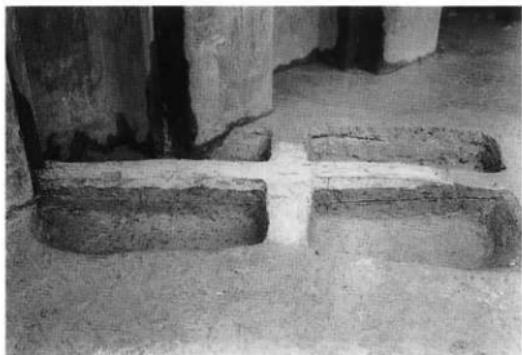
同上 断面（北西から）



2号方形周溝墓主体部掘方断面（北東から）



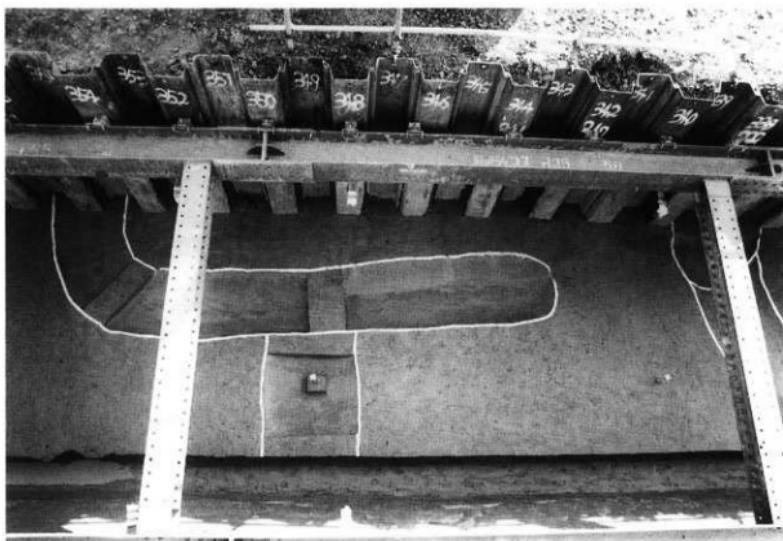
同上 主体部木棺底板取り上げ状況（北西から）



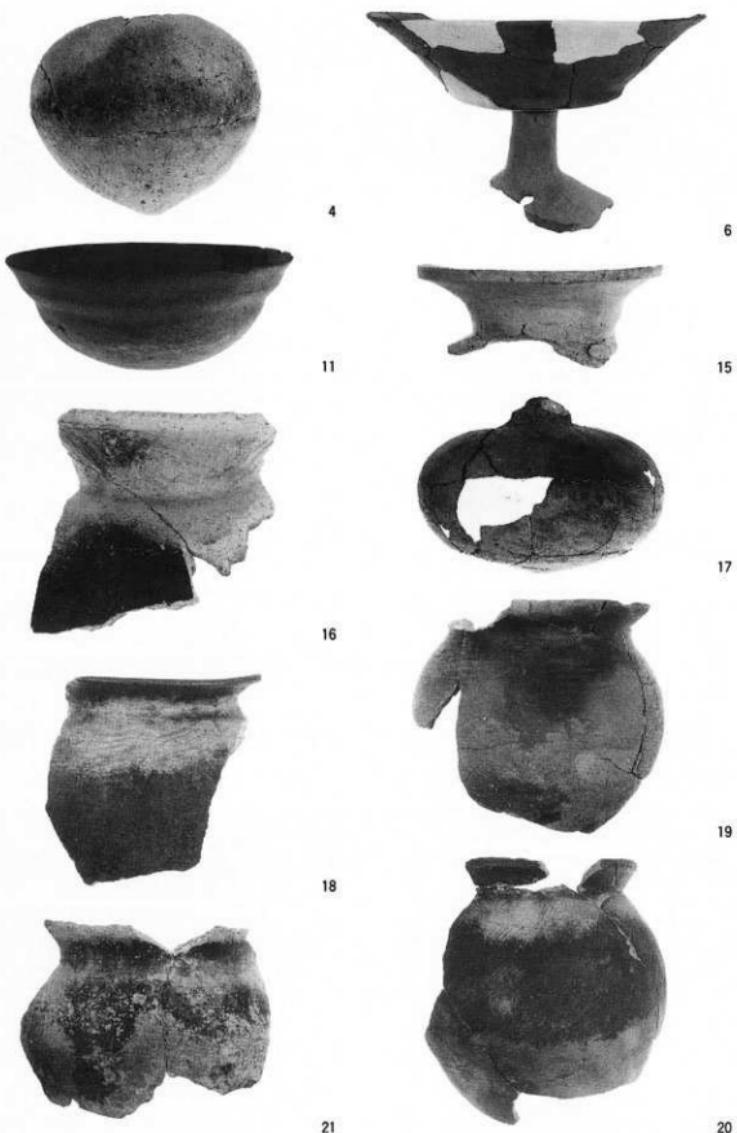
同上 主体部断ち割り状況（北東から）



土器棺墓1検出状況(東から)



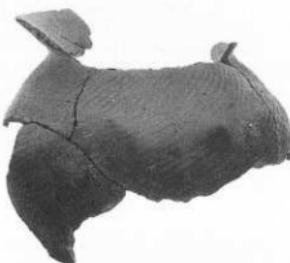
3号・4号方形周溝墓検出状況(北から)



SK-3 (4·6)、SK-7 (11)、SK-9 (15~21) 出土遺物



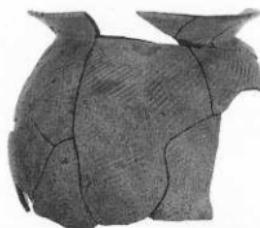
22



25



24



26



27



29



31

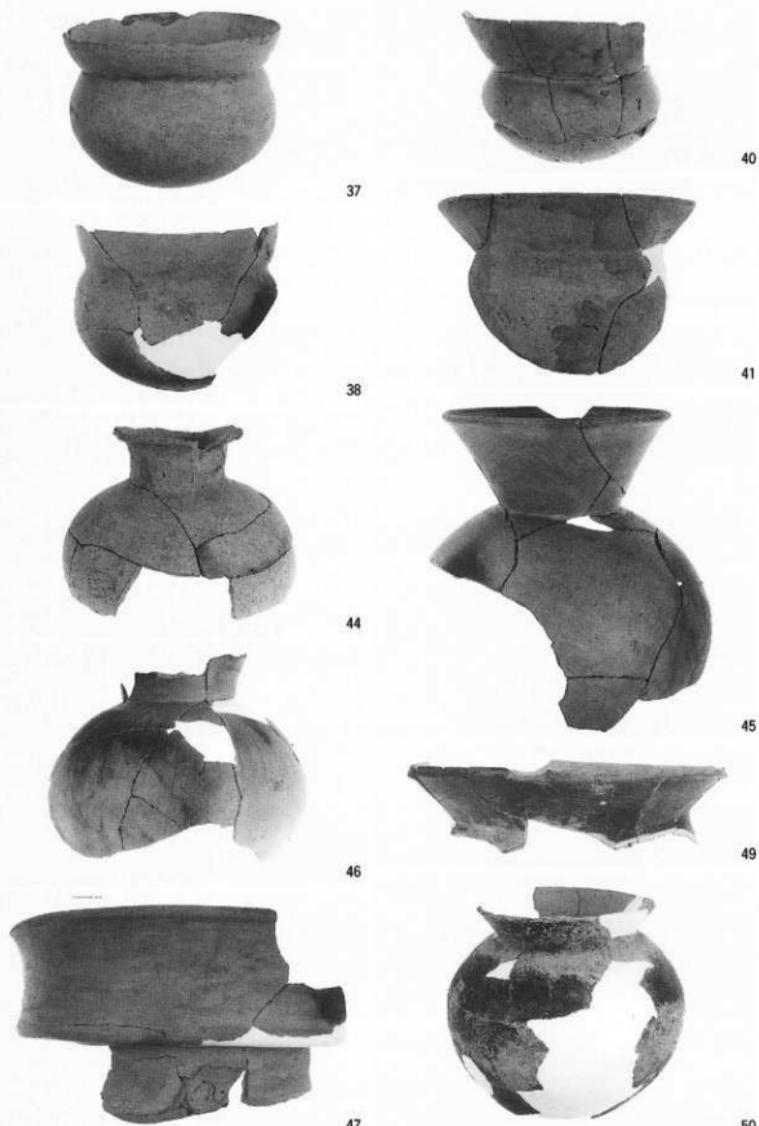


33

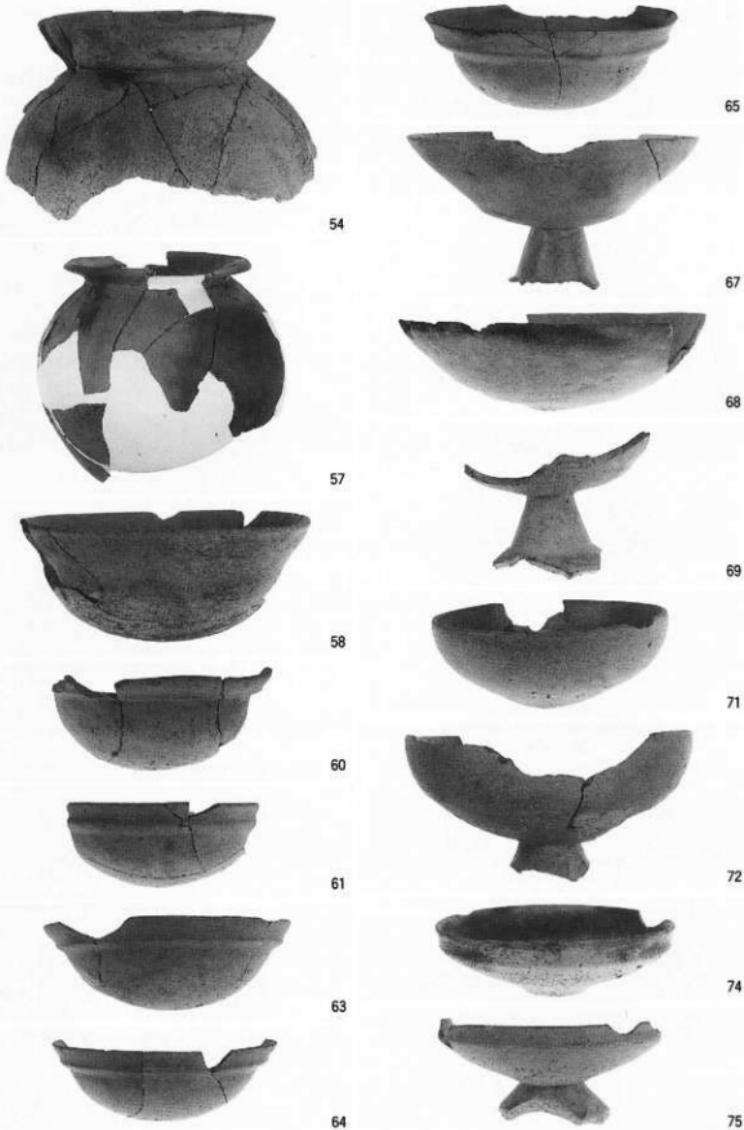


34

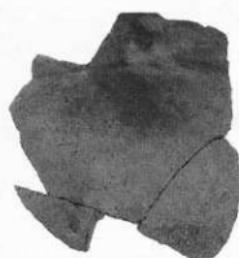
S K - 9 (22・24～27)、S K - 10 (29・31・33・34) 出土遺物



SD-1 (37・38・40・41・44~47・49・50) 出土遺物



SD-1 (54・57・58・60・61・63~65、67~69・71・72・74・75) 出土遺物



77



78

80



79



83



81



84



82

SD-1 (77~80)、SD-2 (81~84) 出土遺物



85



93



94



95



86



96



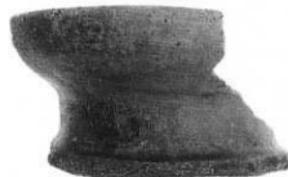
87



105



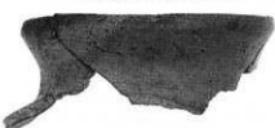
89



106

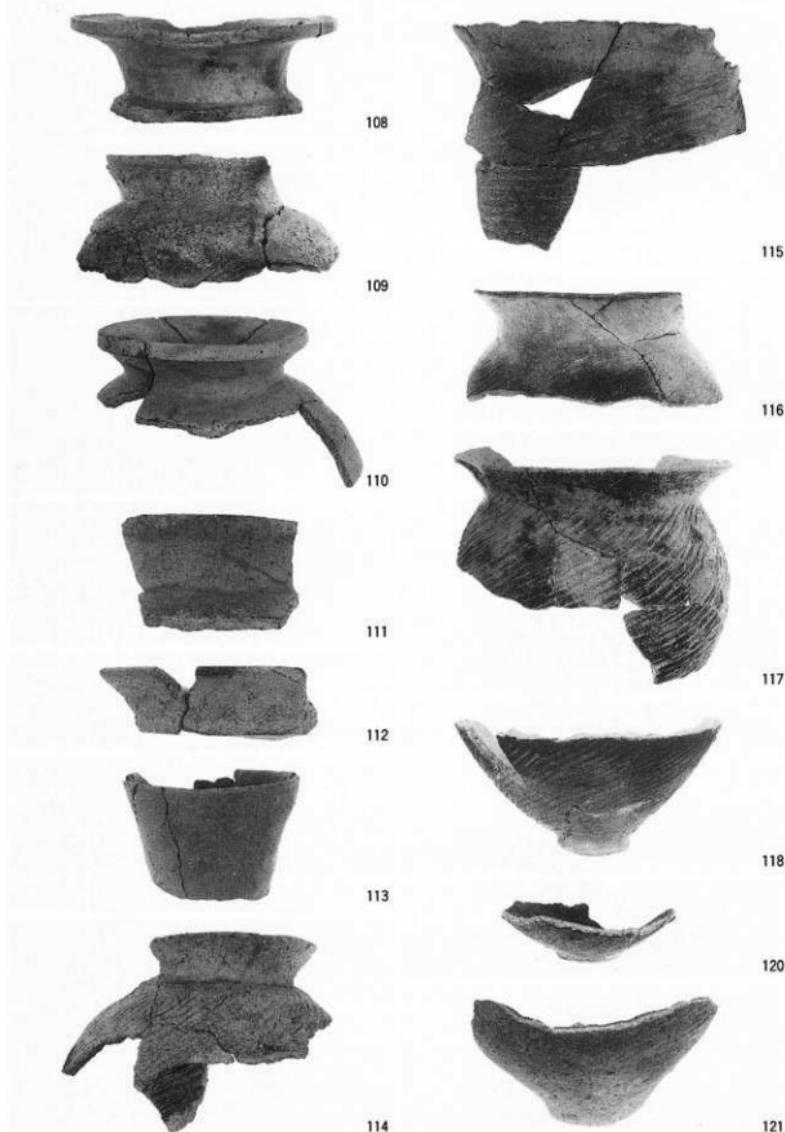


92

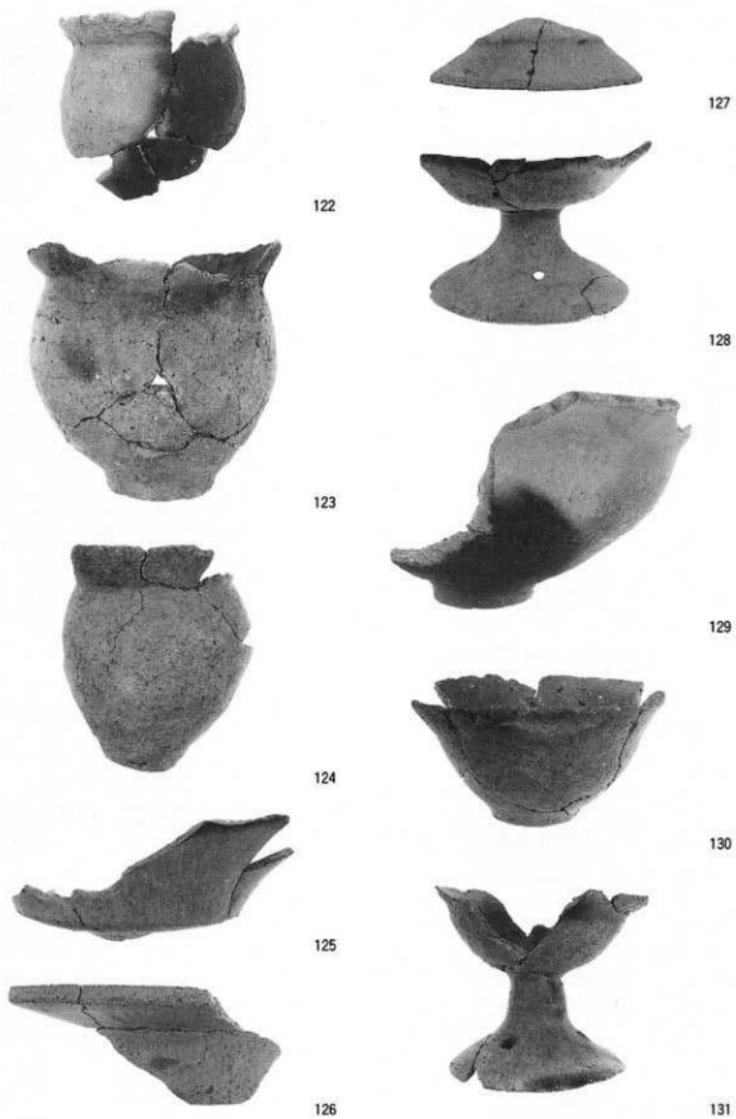


107

S D - 2 (85~87)、S D - 3 (89・92~96)、S D - 13 (105~107) 出土遺物



SD-13 (108~118・120・121) 出土遺物



SD-13 (122~131) 出土遺物



139



140



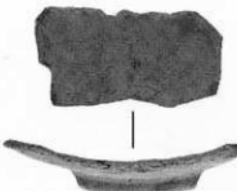
142



162



163



166



168



170

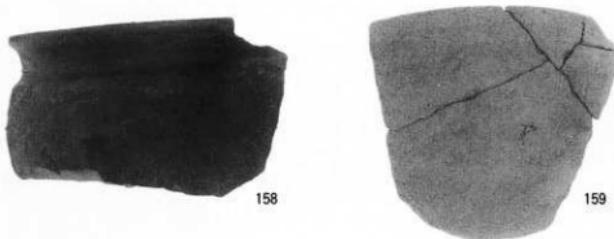
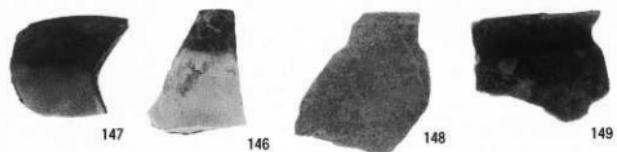


165

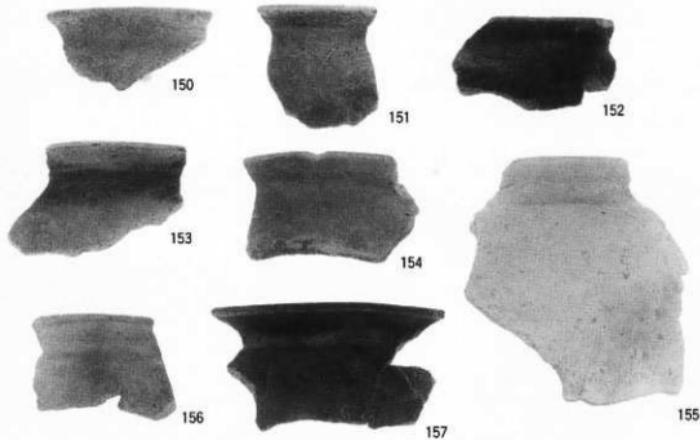
166

S D - 14 (139・140・142・162・163・165・166・168・170) 出土遺物

圖版二八



S D-14 (146~149・158・159) 出土遺物



S D-14 (150~157) 出土遺物



173



174



177



181



178



182



179



183

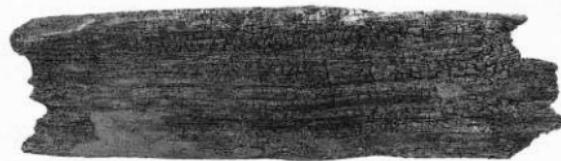


180

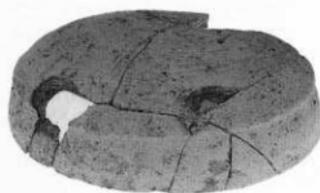


186

SD-15 (173・174)、SD-20 (177~181)、SP-7 (182・183)、土器棺墓1 (186) 出土遺物



187



189



190



191



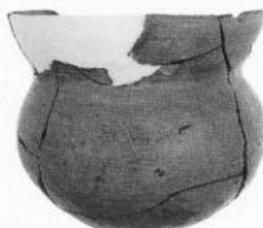
192



193



194



195

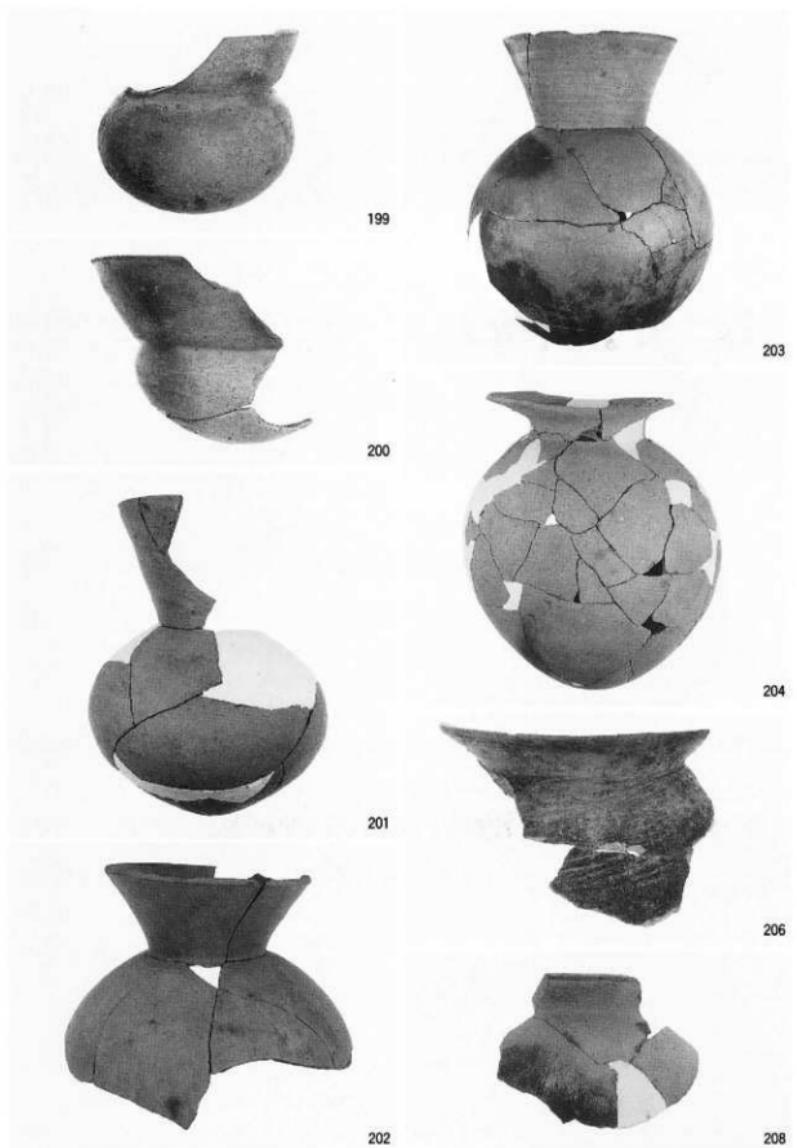


196

2号方形圓溝墓主体部木棺底板(187)

22-3調査区 第5層(189・190)

22-1調査区 第8層(191・192・194・195・197・198)出土遺物



22-1 調査区 第8層 (199~204・206・208) 出土遺物



205



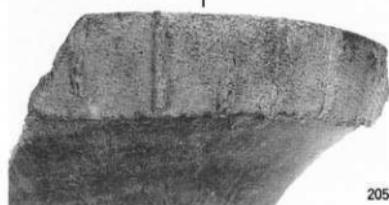
211



212



215



217

22-1 調査区 第8層 (205・211・212・215・217) 出土遺物



218



219



220



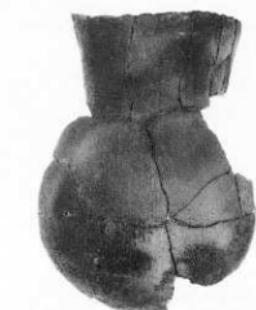
221



222



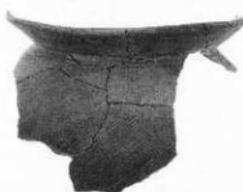
223



224



225



226



227

22—1 調査区 第8層 (218・219)  
22—2 調査区 第8層 (222・223・226～231) 出土遺物



232



237



235



239



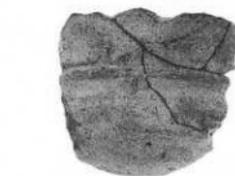
241



242



240



245



246

22-2 調査区 第8層 (232・235・237・239・240)

22-3 調査区 第8層 (241・242・245・246) 出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく
書名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告68
副書名	久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書－大阪竜華都市拠点地区区画道路2号線に伴う－
卷次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	68
編著者名	原田昌則
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58-2 TEL・FAX 0729-94-4700
発行年月日	西暦2001年10月31日

ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
久宝寺遺跡 (第22次調査)	大阪府八尾市 大字龜井	27212		34° 37' 14"	135° 34' 50"	1997.10.22 ～ 1998.01.13	928	区画道路建設に伴う調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久宝寺遺跡 (第22次調査)	集落	古墳時代初頭 前半～前期前半	土坑・溝・小穴	土師器・木製品	中河内地域で初の南関東系土器の出土。
		奈良時代末～ 平安時代前期	土坑・溝	土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器	
		近世	井戸		
	墓	古墳時代初頭 後半～前期前半	方形周溝墓4基・土器棺墓1基	土師器・木棺材	

財団法人八尾市文化財調査研究会報告68

久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書

—大阪竜華都市拠点地区区画道路2号線に伴う一

発行 平成13年10月  
編集 財団法人八尾市文化財調査研究会  
〒581-0821  
大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2  
TEL・FAX(0729) 94-4700  
印刷 近畿印刷センター  
表紙 レザック66 <260Kg>  
本文 ニューエイジ <70Kg>  
図版 マットアート <135Kg>

